

阪神・淡路大震災

明日の町へ

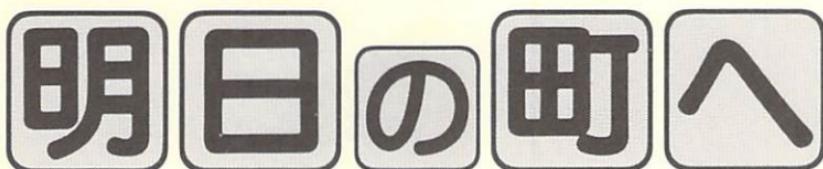
家族の体験
行動する人々
...
50日の記録

山田利行 [著]



発行 ▶ 株アスク・ヒューマン・ケア

阪神・淡路大震災



家族の体験/行動する人々
50日の記録

山田利行 [著]

発行▶株アスク・ヒューマン・ケア

阪神・淡路大震災

一九九五年一月十七日、午前五時四十六分。

兵庫県南部地震、発生。

震源地、淡路島。マグニチュード七・二。

死者 五四七六人

行方不明 二人

(三月十一日現在・警察庁まとめ)

確認された避難所数 一二〇〇カ所以上

避難所生活を送った人々 約三二万人

亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

1章 震災日記

■ 大地震が起きた！（一月十七日の記録）

9

■ 一夜明けて（一月十八～十九日の記録）

37

■ 激震地に入る——神戸市須磨区（一月二十一～二十四日の記録）

55

2章 被災地からの証言

■ 生きのびる

77

カラスが襲つた

78

五日間の籠城

84

勉強きらいやねん。でも…

91

はい。お金がないです。

97

母娘の脱出

104

■見つめる

保育園、「救援基地」になる
燃える火だけを見続けて：

大草原の小さな家 129

家族バラバラに別れて

「無事で申し訳ない」 144

心は神戸に残したまま： 153

■行動する

「自立建築」をめざして 160

淡路を担うのは： 171

「町の地質屋さん」のレポート 182

3章 震災日記・その後

■ そのとき、家族は…

■ 「日常」が戻るまで

■ 人々をつなぐもの

震災五〇日目に——あとがきにかえて

239

225

199

197

装丁 足立秀夫
表紙絵 山田茅

250

①章

震災日記

私の家族構成

私 山田 利行 (四十四歳)

明石市で書店自営

妻 山田 輝子 (四十八歳)

長女 山田 茅 (八歳・小学二年)

二女 山田 麻 (六歳)

※長男、山田友 (大学三年) は大阪府箕面市に住む

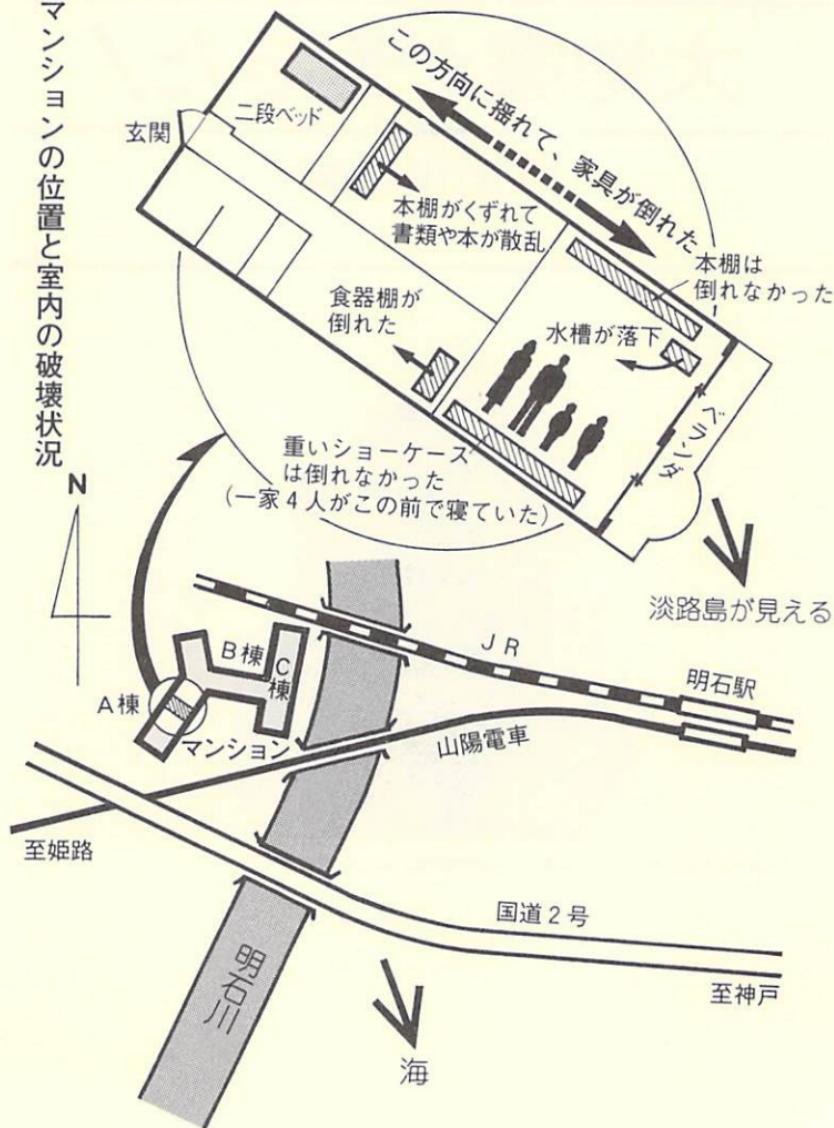
大地震が起きた！

〈1月17日の記録〉



明石の日本標準時を刻む大時計は、地震の瞬間から1ヶ月停止した

マンションの位置と室内の破壊状況



■一月十七日（火）午前五時四十六分—地震発生

もう起きようかと、寝ている頭の向きを変え、常夜灯にして廊下の明かりに目をやりながら、「今、何時頃だろうか？」と思つていた。暖かい布団に未練を残していると、床が動いた。「あっ、地震や」

それは一秒かもしれないし、二、三秒かもしれない。回数でいうならば、二、三回、軽く横に揺れたような気がする。その直後、大きな衝撃とともに真っ暗になつた。衝撃には、音が伴つたように思う。ドーンという表現が近いかなと思うが、一瞬のことによく覚えていない。

“衝撃”の次は、激しく揺れた。横にも上下にも。すべり台ですべり落ちる体をささえるかのように、ささえているのが精一杯。水平の横揺れと、垂直方向の上下動が合わさつていったが、円ではなく楕円を描くように揺れた。

妻・私・六歳の娘（麻）・小学二年の娘（茅）、この順で並んで寝ていた。そのときまで、私以外は、皆すっかり眠っていた。「地震や！」と跳ね起きた妻は、私を飛び越して、二人の子どもの上に覆いかぶさつた。

妻は「ふとんをかぶり！」と、あとで本人が言うには、一〇オクターブも上がつていた

というぐらいに、金切り声を上げた。その同じフレーズを二度も三度も繰り返した。それぐらいの長い間、いや、その後も、まだ激しく揺れていた。

妻は私に向かっても何か叫んでいたが、私は“冷静？”にも、一体何が起きたのか、この“異常さの正体”をつかむのに必死だった。「なんや、これは！」と実際に口に出したかどうか覚えていないが、意識としてはそうだった。

バラバラバラと枕もとに物が連続的に落ちる。落下物が何かはわかつていた。高いところに展示していた二〇個ほどの木製パズルだ。以前から、地震が来たら落ちると気にしていたものだった。アルミサッシュの搖れるガタガタガタという音がする。ガシャーンと、何かが破壊されたに違いない物凄い大きな音が続く。親子四人が塊になつて、地獄の底を見るように、激しい音の中で揺さぶられ続ける。

どうしても記録に残しておきたい音がある。それは揺れている間の、表現は難しいが、ブーレンとでもいうような、低い音で、しっかりと、一音を引き伸ばしたような音だ。耳にまつわりつくように、いつまでも聞こえていた。気のせいではないかと、言われそうな気がする。しかし、血圧などが上がつて自分の身から発生した音ではなく、建物が共振して発生させた音でもなく、もつと外部の空間から発せられているよう、私には聞こえた。そのブーレンという音が、もつとも不気味で恐怖だった。この音は、地震の“固有の”音

なのだろうか？

（後日、その方面の人にたずねると、地鳴りか、建物の共振音らしいが不明）
揺れた時間は、三〇秒ぐらいだったのか、一分も続いたのか、それ以上ということはないだろうが、体感ではわからない。「長かった」ことは確かだ。

（実際には二〇秒ということだったらしい。私は、その前から目覚めていたこともあって、揺れを観察したり記憶する余裕があつたが、落下物が体に当たったり、家そのものが崩れるほどの被害を受けた人は、そうはいかなかつただろう）

激しい揺れがおさまって、闇だけが残った。ブーンという音も消えた。「おわった」と言葉をかけあつたかどうかも忘れてしまつたが、本当に終わつたのかどうか、確かめずにおられない衝動にかられる。残された静けさが、恐怖が遠ざかつたことを示していた。なんとか気をとりなおし、布団をはぐり、子どもたちの無事を確かめ、安堵する。

■同日 午前六時頃——揺れがおさまつて

ふすまを開け、懐中電灯を探しに行こうとした。興奮のさめない妻が制止の声をかける。振り切るしかなかった。真っ暗ではどうしようもないのだから。

まったくの偶然で、子どもたちが前夜に懐中電灯で遊んでいた。その記憶を頼りに這い

進む。ガシャーンという破壊された音の結果で、足元が危険なことは承知していた。手で安全を確かめながら進む。書類がいっぱい散らばっているようだし、何かを踏みつけていくようで大丈夫かなと思つたりする。早く見つけたいと、気がせく。闇の中、懐中電灯に触れた感触は、なかなか良いものだつた。妻と子どもたちに、その明かりを点火してみて、懐中電灯を持ったことを証明した。オーバーに思うかもしれないけれど、『復旧』への第一番目の仕事に違ひなかつた。

明かりは、部屋各所の惨状を照らし出した。その一々の確かめよりも、ラジオ探しが一番目の仕事になつた。多少てまどつたが、見つけ出して、ラジオのスイッチを押してみる。電池の容量が心配だつた。鳴つた！

「強い揺れを感じました。しばらくお待ちください」といった内容のアナウンスが、繰り返されていた。やがて、震源地が淡路島であることを知り、規模がマグニチュード七・二と知らされる。淡路島とここ明石とでは、わずかに四kmしか離れていない。私たちが体験した揺れは、震源地の揺れだつた。強烈なショックで、私の脳が凍結されたかのようだつた。地震の規模が最大級であることは、その時点できちんと承知できたが、それがどういう意味をもたらすものか、把握できる段階になかつた。

震源地として説明されている六甲山の活断層は、かつて、自然保護運動をしていたとき

に、西宮北部・甲山周辺で現地観察をしていて学習すみだつた。一九七三年頃だつたと思う。活断層上に建てられた住宅地を実地に観察し、地学の講師から説明を受けていた。それは、新築まもないにもかかわらず、活断層が真下にあるためヒビが壁面に入つているといふものだつた。ヒビは、ロック屏や石垣にも現われていて、各戸のそれらをつなぐと直線的になり、地下の活断層を想像するに十分説得力があつた。新聞記者も同行していたので、数枚の写真とともに大きな記事として報道されもした。この震災で、あの当時の観察地はどうなつたのだろうか。この目で見たはずのことが単なる知識にとどまつていて、何の役にも立つていなかつたなあと感想をもつ。自分自身の備えとしても、地域の備えとしても。

関連して思い出したことがある。六甲山には幾本ものトンネルが開通しているが、そのいずれもが難工事であつたといふ。それは、活断層とぶつかるために噴出する地下水との戦いだと、新聞などでは表現されていた。したがつて、活断層は、その存在を十分に知らしめていたはずなのに、技術者にも為政者にも、その本質を追求されないまま、克服できるものとして、トンネルの長さを誇るだけのものになつていた。

大きな地震は、ここらあたりには起きないと思つていた。なんの根拠もなく。しかし、地震は、東京ではなく、神戸を襲つた。

■同日 午前七時すぎ——夜が明ける

我が家は、一〇階建ての四階部分にある。二百数十戸ある大きめのマンションで、明石川の右岸に面して立つ。明石川に架かる国道二号線の橋を東に向かって一五分ほど歩けば、JRの明石駅に到達する。JR線と山陽電車線に挟まれるように位置しており、家の玄関ドアを開ければJR線が見える。ペランダ側からは、山陽電車線と国道と川と海が見える。サイレンの音が、国道から聞こえ始めた。電話の受話器を取り上げても、何の音もしない。大事件が起きた、と、察する。ドアの外に出て様子をうかがつたが、人気がなく静かだつた。一、二歩、足を運んだだけで外を眺めるのをやめ、再び部屋に戻つた。

書類が散乱し、本棚が崩れ、機器類が落下し、食器の壊れた山ができていた。懐中電灯で照らし出していた頃は、手のつけようもないと思われたが、外が明るくなるにしたがつて、大丈夫なものとそうでないものとの区別がはつきりしてきた。

ちっぽけな我が家の中でも、どこがどうなつたのか、その全体を把握するのには、けつこう時間がかかった。壁面のヒビなど、破損箇所まで点検する余裕ができたのは、数時間も後だつたようと思う。家そのものが壊れた人の被害に比べれば、破損箇所を“探すこと”を必要とした“程度の軽微なものだが。

妻と話し合い、食料の点検と片付けに専念することとし、移動は無理と判断した。移動というのは、別居の親たちが大丈夫かどうか確かめに行きたい、という意味だ。私の父は昨年すでに死亡しており、母が神戸市須磨区に一人住まい。弟一家は三木市にいる。妻の父はすでに亡くなり、母がやはり須磨区に一人で住み、妻の兄一家がその近所に住む。〈結果的には、私の母と弟一家は被害なく無事、妻の母の家は全壊、ケガは胸の打撲程度で、避難所生活を送る。兄一家は家屋が全壊して避難所にいるがケガはない。母と兄が経営する工場も全壊した

子どもたちは、あの恐ろしかつたはずの揺れにもかかわらず、元気な表情をしている。ラジオは、地震の初期情報を連続的に放送していた。朝七時頃で、事の重大性を、私と妻は十分察していた。

茫然として、ベランダ側から景色を眺めていた。年配の男の人が犬を連れ、目前の明石川の河原を散歩していた。いつもの何事もない穏やかな朝のように。えー、なんで？

ラジオの音が弱い。最初に欲しかったものは、乾電池だった。懐中電灯に入れる予備の乾電池も、欲しかった。ラジオの音は今も消えそうだったから、乾電池探しが片付けの最初の、しかも、急ぎの作業になつた。見つけ出したものは使い古したものばかりで、充電式の電池は充電の必要なものばかりだった。しかたなく、ラジオをつけっぱなしにせず、

時々つけては消すのを繰り返した。どれほど情報が必要か、痛切に思う。

聞いていたラジオ局は、N H K。東京のアナウンサーが大阪放送局を呼び出そうとしていたが、なかなか接続できないでいた。大阪放送局も、強震に見舞われたに違いない。それを共有した側にいれば、その混乱の程度が、すでに重大性を知らせる情報そのものだった。

懐中電灯・ラジオ・電池

災害時に備えて、この三つの重要性は、いくら強調してもしすぎることはないと思う。時計や、人によつてはメガネも。

子どもは別として、災害初日、おとなは空腹感がない。水も食糧も毛布ももちろん必要だが、私の経験では、精神的に第一の拠り所になつたのが『明かりと情報』だった。ラジオの情報は、どこで火災が起きているなど身の安全のためにも欠かせない。

家具が倒れたり、部屋をしきるドア類が破損したとしても、通れなくならないよう確保した避難経路に、三つの必需品を常備しておきたい。

ところで電気メーカーにお願いしたいが、すでに発売されている「ラジオ付き懐中電灯」に、バックライトを備えた液晶時計を組み込んだ製品を作つてもらえないだろうか。災害の緊急時に、必需品が一つで間に合う効果は大きい。これを枕元において、ラジオを聴きながら休むこともできる。お休みタイマーも目覚まし時計の機能を組み込んだり、メガネを収納するアイデアもあれば、なおうれしい。量産して、安価で提供してくださることを期待したい。

■同日 十時頃——片付けに着手する

子どもたちは、私が右往左往していた間、さて何をしていたのだろう。終始、静かだったようで、気を子どもに配つていなかつた。親のすること、話すことに、関心をはらつていたのだろうか。たぶんそうだと思う。

部屋のどこが安全な場所か。荒れ方をチェックしてみると、海に面している側のものはことごとく崩れ、そうでない側のものは、たとえば、花も水も入つていた花瓶が倒れていなかつたり、安定がさほどよいとも思われない容器類が移動もせず、ポツンとタベのままだつたりで、発見するたび妻と私は何度も声をかけあって驚いてしまつた。揺れがあまり

にも激しかつただけに、とても信じられるものではなかつたが、現に、そこに証拠があるのだから。

もともとは食器棚だつたものをショーケースのようにして、商品の玩具（妻は“遊坊”の名で、ヨーロッパの木の玩具を扱つてゐる）を並べ、壁に押しつけるように置いていた。幅が一五〇cm×高さ一九〇cm×奥行四五cmと、割合、重量感のある家具で、上半分は、ガラス製の引きちがい戸だつた。じつは、私たち四人、ベッドが別の部屋にあるにもかかわらず、子どもたちが一緒に寝ようといふので、たまたまこの日、足をこのショーケース側に向けて並んで寝ていた。もし、これが倒れていたら、助からなかつただろう。海とは直角に位置していたので、倒れなかつた。

けつきよく一段ベッドのある子ども部屋が一番安全かなという判断になり、それを念頭において、手のつけられる所からコツコツと片付けの作業に入つた。妻も子どもたちも、みんなで。全滅したと思つていていた食器の中から壊れていらないものを見つけ出しては、子どもたちも一緒になつて、びっくりの歓声をあげた。立て直した食器棚は止め具で固定した。だんだんと落ち着いてきて、片付けの手を休めても、外の様子を何度も眺めるようになつた。そして、ようやく瓦のすり落ちた屋根や抜け落ちている屋根、声をかけあう近隣の人たちの姿が視界に入つてきた。

水の入ったバケツを持つ人を妻が見つけ、尋ねたらしい。「バケツ持つて行つたら水がもらえるそよ」と、妻がウワサを持ち帰ってきた。仮にそうだとしたら、並んでいるに違いない。迷惑になつてもと思い、妻は、ヤカンを一つさげて“下見”に行つた。帰つてきていわく。いっぱい並んでいるのに、前の人なんか大きなバケツで汲むから、みんな待たされどんよ。

実態は、給水車が来たのではなく、マンションの貯水槽が、衝撃で破壊されていた。貯水槽は、集会場になつてゐる一階建て別棟の屋上にある。一〇cmぐらいの水道管から吹き出した水が屋上にあふれ、雨水が出てくるはずの桶(とこ)を伝つて地上に激しく出でていたということだ。そこに人の列ができるが、水の勢いがよいので、行列は数時間で解消した。

私が水を汲みに行つたとき、「ローソン、開いてるよ」と教えてもらつた。乾電池が欲しかつたので、私は、二〇〇m先のローソンへ急いだ。「カヤ（長女）も行く」と、ついてきた。手をひいて、歩く。愛しくなつてしまふ。乾電池は売り切れ、食料もほぼ尽きていた。ローソンの陳列は整然としていた。乱れなかつたのだろうか。片付けられるほどの時間が経過していない。少しの菓子類と、不思議だけを持ち帰つた。

「カワセ（小規模スーパー）の前で、パン、売つてゐるんやて」と、また妻が聞いてきた。お釣りがないやろうから、小銭を持って行くと言い、お釣りがなかつたらあげてくるわと

も言いながら、妻は駆け出した。袋いっぱいのパンを買つてきた妻の土産話は、みんな文句言わんと整然と買つてあるし、普通の値段で売つてくれるんよ、だつた。店の人の早い対応に、私も感激していた。

突然、電話が鳴つた。通じないと思つてゐる電話が鳴つたから、びっくりした。あわてて受話器を取り上げると、妻の母からだつた。

「タンスが落ちてきて胸を打つたけど、自力で抜け出してきた。もう命からがらや」「どこから電話しどん」「公衆電話！」

受話器からざわめきが聞こえる。たぶん公衆電話を待つ人の列だらうと直感した。「わかつた」「アキオ（妻の兄）とこ行くから」で、電話を切つた。

ラジオの伝える状況把握は明らかに遅れていた。死者の数が増加していくその先に何が起ころうとしているのか予知する力がない。地震直後、NHKでは、しばらくもたつたあとで大阪放送局とつながり、その後、神戸放送局とやつとつながり、煙が見えるだと、迫真のレポートを必死に送つていた。短かつたけれども、このアナウンサーには重大性・緊急性が予知できていたと思う。東京は、これを単なる迫力ある現地レポートぐらいに扱つたのではないか。だから、東京の報道姿勢が、政府を動かすことなく、ある政治家の分派活動を地震と同様の重要さで流していた。

暮れそして年初から地震が多かった。情報の送り手として要を担うべきマスコミは、三陸沖の地震や想定東海沖大地震などで地震慣れに陥り、情報を読み誤ったのではないか。この点が、初期の救助体制を立てられなかつた重大な原因の一つと、私は思う。

ラジオをつけないと、家族四人が孤立しているような不安が伴つてくる。時計は腕時計だけに頼ることにして、掛けてあつた時計から、もろもろの器具から、単三型の電池を集め始めた。いくらか集めることができ一応の成果があつたが、幸いにもポケットラジオを発見し、電池も元気で感度もよく、ホツとする一幕もあつた。

どこで、いつ、何を売つているとか、水があるとか、生活情報はすべてといつてよいぐらいうチコミでしか伝わつてこない。それとも、私と妻だけが知らないのだろうか。掲示物の一枚も貼られていないし、回覧板もまわつてこない。ふだんの暮らしだつたら、どんなつまらないものも面倒なまでにまわつてくるのに。

「ガスが漏れています」と、注意を呼びかける地域放送はかかつたけれども、貯水槽の復旧見込みが立たないと書かれた黒板も見たけれど、近くの小学校が避難所になつてゐるのか・なつていなか、さっぱりわからない。付近には家屋の倒壊こそ見当たらないものの、強い余震に耐えられるはずもない建物は多い。雨をしのげる屋根ではない。もし、私たちがショーケースの下敷きになつていても、ロックされている玄関ドアを開

けてくれる人はいのではないか。避難しているのか、買物に出かけているのか、動けずにいるのか、区別はつかない。みんなそれぞれに、水汲みや片付けや、あるいは被害のひどい地域の救援にと体も心も休むことがない。電話は不通が多く、呼び出して応答がなくとも疑問をもたない。とすれば、今もなお、閉じられたままのドアは、じつは、中で事故が起きているとか、と、思わず想像してしまった。身の震える思いがする。ドアの内部を確かめる仕事を誰がすべきなのか。隣人か、自治会か、役所か。

〈その後、マンションの自治会の会長さんに手紙を託したところ、地震があつたその日の中にまわって調べたと、回答をいただいた。一月二十三日、地域の放送が、生活情報を探していた。また、マンションのホールにも掲示があつたが、その日のうちに剥がされたり脱落してしまっていた。私が聞き逃したり、掲示を見逃しているのかもしれないが、伝達方法の確実さ・正確さから言えば、とても広報活動といえるものではない。二月二日現在、一月二十七日発行の『市政だより・地震関連情報七号』が貼つたままだ。『五号』は見た記憶があるが、それ以外は、知らない。こんな大震災でありながら、情報を、テレビ・ラジオ・新聞などマスコミだけにしか頼れないとは、恥ずかしいことだと思う。行政の機能不全を露呈してしまっている。住民の有志が、『お風呂情報』とでもいうべきものを、模造紙に書いて、掲示していた。これならば、役に立った人もあるただろう〉

同日 昼すぎ——片付けが進む

揺れがおさまってまだ真っ暗闇のとき、懐中電灯のほかにも手探りでも探そうとしたものがあった。着る服だ。パジャマ姿では不安がつのる。しかし、闇の中ではどうしようもなかった。見つけ出した懐中電灯をたよりに、手にとれる範囲のものを、パジャマの上から着込んだ。

足の踏み場がないほどいろいろなものが重なりあい、散らばった状態から、通路を確保し、タンスまでたどりついたところで、子どもの着替えを先にすませ、寒くないようにはコートを着させていた。どこかへお出かけするようなスタイルになつた。帽子もかぶせた。靴も履かせた。妻の主導権で、真っ先にした仕事だった。

「あんたもこれを着て！」と、私は、長袖の下着・コットンシャツ・セーター・チヨック・ジャンパーの五枚を着せられ、下は、下着のパンツ・パッチ・ジーパン、さらに大きめだったパジャマのズボンと、四枚を着て、帽子を二つ重ねてかぶつた。足もとは、スリッパ。妻もいろいろ着込んだようだつた。靴も履いていた。

玄関ドアも、ベランダ側のアルミサッシも、ふすまもいっぽいに開けた。余震が来て、ドアが開けられなくなつては大変だから。幸い風はなかつた。曇り空。着ぶくれするほど

になつた私たちは張り詰めた気持ちも手伝つて、寒くなつた。電気もガスも止まつてゐる。灯油ストーブをつけるわけにもゆかない。

一〇リットル程度の水槽がひっくり返り、ガラスが割れ、二匹の金魚が横たわり、砂が飛び散り、水もそこらのものに飛び散り、ジユウタンはそれをたっぷり吸つていた。しかし、ガラスで割れたのは、水槽と食器ぐらいのもので、食器棚のガラスも割れていなかつた。食器棚は、飛び出してきた冷蔵庫にもたれかかっていたからだ。あたり一面にガラスや陶磁器の破片が飛び散つた家が多かつたようだが、そうでなかつたのが、片付けには幸いだつた。

書類や本の片付けは積み重ねるだけで簡単だ。子どもたちも手伝つてくれた。私は通販による本屋を営んでおり、自宅は仕事場でもあつた。業務用のコンピュータ・電話・コピ一は無事で、落下していたFAXも壊れていないようだつた。メガネも割れずに、書類の山の一番下から出てきた。

つまり、家屋内の被害は比較的軽微にすんだ。片付けながら、仕事のこと・暮らしていくためのお金のこと・知人や顧客との連絡のことなど、思い浮かんでは消えていつた。子どもたちに、「揺れたの、わかつた」と問うてみると、「わかつた」と言う。昨年暮れの三陸沖地震で被害にあつた友人の話を子どもたちにしていたので、「ねつ、あれが三陸

沖のと同じ、震度6なの」と説明し、「揺れる間、どうしてたの」と聞いた。「フトンかぶつとつた」と、カヤは一見ケロッとしている。

《私にとつては、あの時の恐怖が神経の底にはりつき、その後も続く余震のたびに、「来た！」と脅えてしまうほどだった。妻と私は「はよ行き！　はよ行き！」と子どもにかぶさるようにして二段ベッドに飛び込む。子どもたちは震えている様子もなかつたようで、表面からは受けた衝撃の程度はわからない》

玄関ドアの外の廊下で人が行き交う。ベランダ越しにも声をかけあつてゐる。そのいづれもが、こわかつたと言い、被害の状況を確認しあつてゐる。起き上がりつたままの姿に近い人もいる。我が家の前を国道二号線が通つてゐるため、サイレンの音がひつきりなしに鳴る。スズメ・ヒヨドリなど、鳥たちはいつものように木から木へ飛び移つてゐる、きょうもきのうと特に変わつたところがないかのように。チラッと数分だが、雪もちらついた。そうか、雪がちらつくほどに寒いのか。相変わらず戸を開け放つてゐるが、寒さは、さほど感じない。

ラジオは、地震情報を立て続けに流してゐる。死者の発生や家屋倒壊を伝え始めたのは、何時頃からだつたのだろう。ヘリコプターも明石までその機影を見せた。大震災の予兆があらわれはじめた。ラジオから震災の実相はほとんど伝えられていないに等しいが、情報

の断片が、"大変なことが起きた" という私の戦慄を裏付けていた。

確信は強まるばかりだった。こんなになってしまって、私は何をしたらよいのだろう。自問自答を続ける中で自然に浮かんだのが、とりあえず、記録に書き残そう、という考えだつた。今、何が起こっているのか、これから何が起ころうのか、事実ができるだけ正確に書きとめておくことにしよう。

私は、なるべく多くのことを記憶するように努めた。

おおかた片付き、この夜からの安全を確保する四人の部屋作りにかかりました。二段ベッドの下段に子どもたち一人が寝、上段にはコタツの天板を寝かせ、その上に、押し入れの布団や毛布などを山積みにした。万一、天井が崩れても、子どもたちはこれで助かるだろう（？）という仕掛けだ。ベッドのそばの床に布団を敷いて、私と妻が寝ることにする。もし余震が来たら、すぐに、子どもたちの寝ている所に飛び込むという段取りだ。これは子どもたちを守るために、むしろ自分たちの身を守るためだった。

おかしなもので、地震の襲来は時刻と無関係なのに、就寝中にひどい目にあつたため、次も就寝中という不安がついて離れない。

すっかり片付くということではなく、また、できもしないので、片付けに見切りをつける。午後四時頃だった。ホッとするとともに、寒さを感じる。玄関のドアを閉じた。「閉めて

も大丈夫やろか。地震でゆがんで出られへん、なんてないやろね。開けては寝られへんしね」と、妻が困惑していた。夜が近いので、懐中電灯の置き場所も決めておいた。

ところで、この日、何を食べていたのだろう。片付けながら、パンをかじつたと思う。それが、朝食であり昼食であったのかもしれない。炊飯器にご飯が残っていて、ノリを巻いて口に入れたのが夕食だつただろうか。子どもたちは時々お菓子を食べていたようだ。食べなくても空腹を感じなかつた。それだけストレスが強かつたに違いない。突然たたき起こされてこの始末だから、どうにかならないほうがおかしいぐらいのものだ。

■同日 午後五時すぎから——はじめての夜

午後五時二十九分、パツと部屋が明るくなり、電気が通じたことを知つた。うれしかつた。さっそく充電式乾電池の充電を始めた。ラジオはつけっぱなしで聞けるようになった。我が家にはテレビがない。地震で失つたのではなく、元からなかつた。ついでに言えば、新聞もとつていない。必要に応じて店に買いに行つている。ともかくも、ラジオが唯一のニュース源だつた。

「夜が始まる」と思ったものだ。恐怖を感じた。まるごと、余震への恐怖だつた。電気が使えるので、布団を敷く予定だつた所にホームゴタツを置いた。足を入れ、横になるとホ

ツとするが、何もすることがなくなってしまう。ラジオが伝える震災の被害状況は、夕方じぶんには、さらに深刻になっていた。ラジオ局を「AM神戸」に変えた。細かい地名を言つてくれるるので、よくわかる。火の手があちこちから上がつていると伝えていた。じつとしていられず、また起きあがつた。

受話器を取り上げても無音だった。部屋の空気が冷たかった。いつ余震が来るかわからないので、やっぱりコタツに足を入れとこかと思つたりしながら、視点も定まらず、多少は片付いた部屋の中をウロウロしていた。妻がラジオを聞いていて、どこそこがなんとかやと、時折、報告してくれる。

電話はあきらめていた、が、未練があつた。椅子を電話機の前に置き、腰をかけ、電話機のオンフック・ボタンを何度も押してみた。ほとんどの場合、か弱く「ツーツーツー」というだけだったが、突然「ツー！」と通話可能なサインに変わる。あわててダイヤルボタンを押す。結果また、「ツーツーツー」。何もすることなく、また意欲もなく、ヒマなので、電話機としばらく遊んでいた。

たまに通話可能になる。ところがあわてるものだから、番号を押し間違える。やり直そうとすると通話不能で、ふりだしに戻る。今度は押し間違えずつながつたと思うと、「ツーツーツー」を聞かされる。話し中なのか、回線がパンクしているのか、その区別が

できない。

被災地はあきらめて、沖縄の友人にかけてみようと、方針を変えた。何度も試みるうちに、つながった！妻と彼女はよく氣があるので、妻の慰みにもなつただろうと思う。電話をかけるのも一苦労なので、かけられることがわかつたことを成果として、この程度で終えた。

「私たちは無事です」という意味の文章を書いて、次は、FAXの機能テストも兼ねた送信の試みに移った。ダイヤルの手順はわかつてきたので、要は、紙が通つていくかどうか。で、これも正常とわかつた。

夜七時頃、電話が鳴った。「どうしとん。大丈夫やつたあ。なかなかつながらへんから。友達が、公衆電話のほうがつながりやすいみたいやつて言うから、かけてみてん」と、トモ（長男。大阪外大に通うため、箕面市に住む）の声がした。「おお」と、歎声をあげた後、トモを仲介にさせて、妻の兄家族の様子、私の一人住まいの母や弟家族の様子を知ることができた。

夜も九時ぐらいになつてからは、コタツから出ないようになつた。刻々と伝えられる状況をラジオで聞いていた。眠れば一番よいのだが、眠れない。もともと早起きさせられた子どもたちは、昼寝をとつていた。元気だ。アサ（二女）は、チーズをもう一つ欲しいだ

の、みかんゼリーを「おねえちゃんと分けて食べてもいい?」と、いつもの調子でねだる。国道二号線で、西日本方面から応援に駆けつけるサイレンの音が、今もやむことなく続く。それは、次から次へと通過するということもあるが、車の渋滞ができてしまつていて、進みにくいからでもあつた。ラジオを聞いていると、東からの進入でも同じのようだ。大橋九丁目とか、大田町とか、手に取るようにわかる地名が、レポーターの高ぶつた声から聞き取れる。その地域の東だとか、西だとかと説明されるにつれ、想像ばかりが膨らむ。

「安否情報です」と、スタジオのアナウンサーが原稿を読む。「加古川市の○○さんから、須磨区大手町三丁目の△△さんへ。心配しています。ご無事なら、AM神戸に電話してください」「安否情報の電話番号は〇七八一七三三一〇一二三です。電話は通じにくいですから、この安否情報をご利用ください。安否情報もつながりにくいでしょうけれど、根気よくおかげください」と、二人のアナウンサーが、手際よく読んでいき、安否情報の利用を呼びかけている。

「リスナーの方から電話がありました。今クルマに乗っているみなさん、タバコを外に捨てるのは危険です。ガスが漏れていて、大変危険です」「今、抗議の電話をいただきました。タバコを捨てるのは放火行為だということです。もう今からタバコは我慢しましよう

よ

この安否情報は二四時間ずっと、しかも連日、アナウンサーを交替しながら続けられていた。

この未曾有の大事件のさなかに、情報を受け・送り、提案をし、礼を言い、刻々と激変していく町の様子を伝えるAM神戸の二人のアナウンサー（三浦紘朗さんと岩崎和夫さん）には胸打たれる思いが募った。AM神戸も震災にあって、よくも放送ができたものと思う。暖をとる術もなく、食べる間もなく、休んでいる間もなく、マニュアルもなく、おそらく自宅に被災されたであろう家族を残して、翌朝まで乗り切つた。高ぶらず、一語一語に配慮が行き届いていた。この二人に共感し、鼓舞された市民も多かつたに違いないと思う。それは、近い将来の再生への道を確実に育てたように思う。この二人がマイクをもつていたことは、歴史にまた一つ輝きをもたせてくれるに違いない。私は、どうして誉めちがるのか。ミスもあつたかもしれない。だが、この極限で、信頼できる情報がなかつたら、悲しすぎるからだ。まるで、解放軍の“自由放送”的なうでもあつた。

深夜、マンションの放送がかかつた。ガスが駐車場で漏れているから、車を動かさないで、というものだった。

情報について

震災によるパニックを避け得たのは、ラジオを中心とする情報おかげだと思う。情報には、安全面・精神面・生活面と、三つの側面があつた。とりあえず私の経験から、感想を述べる。

全国向けメディア——当初は、NHKラジオ（第二）を聴いていた。地震発生直後はそれでもまにあつていたが、時間が経過するにつれ、細かい地名の入った報道が必要になつてくる。その点では全国向けの報道はあまり役に立たない。テレビについて言えば、映像による視覚性はさすがだが、当初、震災の悲惨さをまるで“商品”的ように扱つていて憤りを覚えた。震災一ヶ月後ぐらいには、被災者の立場から見ても、役に立つてポートが報道されるようになったと思う。ヘリコプターによる報道競争は考え直してほしい。

地元のメディア——大変役に立つたし、心の支えにもなつた。特に、「AM神戸」の健闘は称賛に値する。地震が起きたそのとき、AM神戸はすでに通常の番組を放送していた。激震によって社屋は崩壊寸前までになつた。自家発電が起動し、その大混乱の中

から、再び電波は緊急事態を伝え始めた。AM神戸のスタッフは、可能なかぎり交替しながらマイクに向かつた。私がたまたま聞いた一人のアナウンサー以外にも、そういう人たちがいたことを記しておきたい。

AM神戸のほかにも、地元のメディアとしては、「サンテレビ」と「Kiss FM」がある。私には視聴する機会がなかつたが、機材の点検やスタッフ確保で苦心しながらも、地元の情報を伝えようと必死になつていたということだ。Kiss FMは、神戸近郊に住む外国人に向かって、外国语による放送に専念していたということだった。

地元紙・神戸新聞社も、社屋が崩壊した。しかし、驚くべきことに、十七日付の夕刊が四ページで出ている。このような非常時を想定して、京都新聞社と相互協力協定ができていたからだという。発行されたという事実だけでも勇気づけられるが、放送メディアと比較して情報量の多い文字メディアが健在だったことは、被災地にとって福音だった。

行政からの情報——「震災情報」が逐次、印刷され、目につきそうな所に貼られていった。私の住む明石市では、緊急性が低かつたこともあってか、居住しているマンションの掲示板で見ただけだが、神戸市内では、震災後一週間から一〇日ぐらいすると、電柱・公衆電話ボックス・避難所など、至る所で見られた。カラー刷りのいかにも立派なものだった。ただし、行政の情報は、罹災証明その他の手続きにまつわるものが多く、その手続きの煩雑さが市民に新たな不安を与えたようにも感じる。“市民のための情報”ではなく、“市政のための情報”だった。広報することで免罪を狙っているという印象を

ぬぐえなかつた。

貼り紙——ボランティア情報・解体業者の宣伝・住宅情報・求人情報など、被災地は貼り紙だらけ。ボランティアグループがミニコミ紙まで発行している。その情報をどう利用するかは、被災者自身にすべてゆだねられている。被災者にとっては、情報は多ければ多いほど安心するようだ。

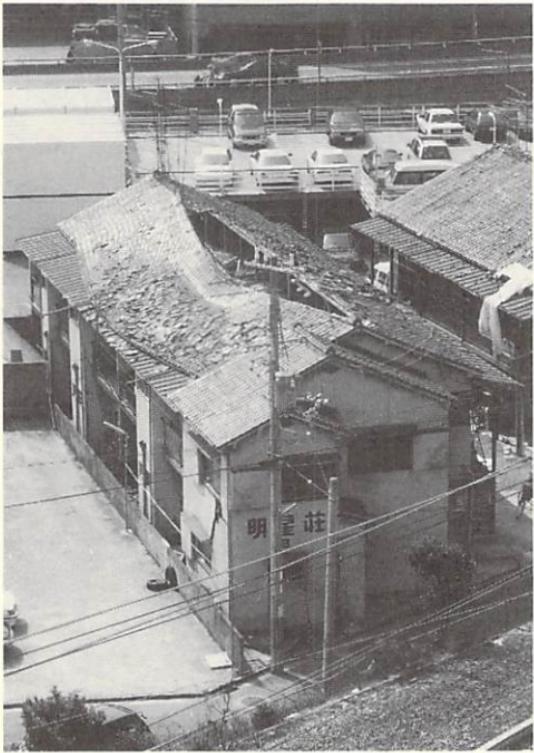
クチコミ——貼り紙を読んでは、その情報を伝えてまわるの得意とする人もいるようだ。行政のわかりにくい情報は、クチコミに乗るとやさしくなる。変形してウワサやデマになることもあるが、今回、そこは聞くほうが心得ていて、欲しい情報を選択しているふうでもある。情報があふれる日頃の環境のおかげかもしれない。クチコミの送り手は、多くの情報の中から、より必要とする情報を選びだす“機能”もあわせもつている。不安定な要素を含むが、クチコミは機動力をもつ重要な情報源になつていている。

なお、ある小学校の先生から、給水車の情報についてこんな話を聞いた。学校の校庭に給水車が来ると、マイクで近隣に知らせ。水はすぐなくなつてしまふので、再び給水車がやって来る。マイクで知らせると、近くの人はすぐ来られるが、遠い人が着いた頃にはまたなくなつている。「水が当たらない」と苦情が出たそうだ。このような情報の不公平は、あちこちで生じていたのではないか。

情報提供がどうあるべきかは、「救援」に直接かかわった人たちの意見が重要だと思う。その方面的報告書が出ることを期待したい。

一夜明けて

〈1月18～19日の記録〉



屋根が抜け落ちた文化住宅。自宅のベランダから撮影(明石市)

明石の自宅から箕面への道のり



1月18日午後、妻と子どもを連れて、大阪府箕面市にいる長男のところへ避難した。平常時なら2時間の道のりだが、神戸市内が通過できないため迂回路をとった。渋滞に次ぐ渋滞で、およそ11時間かかって到着した。

■一月十八日（水） 一夜明けて

ほとんど眠れなかつた。頭が重く痛い。妻も頭痛だ。血圧が高いせいか、手も冷たくなつてゐた。余震の恐怖にさいなまれてゐるふうでもあつた。

「新聞が手に入るか、どうか見てくるわ」「カヤも行く」「あかん、今はガスが漏れてゐるから危ない」

外に出た空気はうまかつた。ガス漏れ注意の大きな札があちこちに掲げられていた。すでに、修理にきた車が数台、停まつてゐる。白髪まじりの髭をつけたガス工事の職人と思われる人がタバコをふかしている。「あなたは安全と思つてるのかもしらんけど、人が見たら不安に思うじゃないですか。やめてください」と、腹立ちまぎれに言つた。長靴でそそくさと踏みつけ消していた。

ローソンの入り口に貼り紙がしてあつた。店を開けられる状態ではありません、と。商品が売り切れたということだろうか。神戸新聞販売店まで足を運んだ。歩道上に、ビニールに包まれた朝刊が配達されもせず、トラックから荷おろしされたままになつてゐた。私より先客がいて、販売店の人が見当たらず、不満そつたつた。「もつていんだろか（持つて帰ろうか）」と言つてゐたが、私は、わざと帰る意思を強く示して立ち去つたので、ど

うなつたかは知らない。

家に帰り、一息ついて、また同じコースに出かけた、カメラを持つて。貯水槽使用不能の掲示と、ガス漏れ注意の掲示と、ローソンの貼り紙と、新聞の放置と、さくら銀行の閉店の断わり書きを撮った。これぐらいならいいだろうなと思ったが、住民に向けてシャッターを切る気持ちにはなれない。瓦の落ちた家屋を撮るのもためらわれた。そもそも、カメラを下げてウロウロしていってはいけないようにも感じる。新聞の包装はまだ解かれていなかつたので、買うのを断念し、家に戻った。

電話は相変わらず通じにくい。妻は臥せつていて。朝食は、何かを、たぶんパンを食べたのだろうけれども、よく覚えていない。気分は重苦しいが、大阪市の友人と電話で話をしているときだけ、妻はおしゃべりになつた。「私とこは建つてますが、隣はつぶれました」と、板宿（須磨区）をはじめ激震地に住む人にも数人、連絡がとれた。

勤めに出かけてしまう前に、八時頃、青森に住む、三陸沖地震を経験した友人にも電話をしてつながつた。「私は、震度六・震度五と、二回経験しました。片付けても、また元通りになつてしまふ」と、いろいろ教えてもらう、これも、妻が聞きとつた。

ガス漏れがなおつて使えるようになつた。ガス漏れの原因は、地盤陥没でバルブがはずれていたとのことだつた。さっそくお湯を沸かし、熱い茶をすすつた。

「カワセに行って、なんかこうてくるわ」「すぐ食べれるようなもん、こうてきて」ということで、今度は、カヤとアサと私の三人で、向かいのスーパーへ買物に出かけることになつた。店内に入ると、天井から水がボツンボツンと落ちている。階上にスイミング・クラブのプールがあつて、それからの漏水だという。非常出口の表示灯が留め具からはずれ、電気コードで宙吊りになつていた。パン・調理済み食品などは、開店まもないにもかかわらず、ほとんど売り切れに近い状態だ。買物かご一杯入れたレジ待ちの、長い列の最後尾がわからないぐらい通路をふさいでいる。しかし、誰も文句も言わない。あきらめているふうで、黙々と順番を待つてゐる。

買って帰った冷凍うどんをすぐに作つた。アサとカヤは喜んで食べ、カヤはもつと欲しいとおかわりをする。妻に食べさせようとしたけれど、井に半分食べて残してしまつた。たつた一日で、疲労が極限に近づいていたように思えた。昼の十二時前後だつた。

起こさんとつてね。妻は、コタツで横になつた。私は、アサにもカヤにも、起こしたらあかんから、こつちにおいでと呼びよせ、部屋を別にした。暖はなかつたが、そう寒くもなかつた。

水を汲みに行こうかと思つても、もし、子どもと離れているときに強い余震が来たら大変だからそもそもいかない。子ども一人連れて水を汲みに行くのも、どこか不安だ。

しかたないので、仕事先への連絡など、電話連絡に“専念”していた。妻の近くに寄つていったカヤが、「おかあさんが、ツーツーツーの音がやかましいって」と、私に伝えてきた。オンラインでかけるものだから、スピーカーからその音が出ていた。電話の話し声も、どうしても大きくなってしまう。お互いに事情を伝えようとするものだから、つい力が入ってしまう。相変わらず一本電話をつなぐのに苦労する。

妻は、ひたすら眠りたい、食べられない、いらだつてているようでもある。一時的な病気のような感じがする。どうもこのままではまずい。

「トモの所へ行くか？」と声をかけてみた。行つてくれたら、ワシは一人になるし、仕事もできるし、と、提案しながらも、見通しはまったくなかつた。一晩、トモの所で寝て、また一緒に帰つてもいいとも思った。とにかく、この状態から抜け出すことが先決だと、思つた。妻は、賛成しているふうでない、かといって、反対でもない。無気力なのだ。

午後三時頃だった。地図を広げて、ルートを探す。平常時なら二時間で行けるが、神戸を通過できないから、どれだけかかるかまったく見積もれない。行くならば、すぐにでも出発しなければと思った。私もほとんど寝てないので、長時間の運転には不安があった。トモに電話を入れると、幸いいた。そして、「OK！」と言つてくれる。うれしかつた。

「食べるもんとかも、用意しちゃから」

お互い時間を見積もりしあつて、午後八時か九時ぐらいかなと打ち合わせた。

（ふりかえつてみると、妻の状態は、震災のパニックによる自然な反応だったのだろう。当初、子どもの着替え、近所の情報集めなどに妻が采配をふるつていたが、それが一段落したところで、ショックが初めて何かの限界を越したのかもしれない。疲労がどつとやつて来たのかもしれない。一方、私のほうは、早く記録の作業にかかりたいという心せく思ひがあった。そのためには、妻をなんとか安定させたかった。もし一人になることができたら、一心にワープロをたたけるだろうとも思っていた。震災を記録に残すことが、自分の役目ではないかという直感のようなものも働いていた）

■同日 一路、箕面みのおへ

リュックに当座の着替えを詰め込み、おやつ程度の食料を持って、着の身着のままの出发になってしまった。毛布を二つ、積んで。

午後四時頃の出発だった。二kmも走ったところで、いきなり渋滞の列に入つてしまつた。東行き、つまり神戸方面の列だ。国道二号線が通れないでの、東行きの迂回路が渋滞していると、学習させられてしまった。

七〇〇mほどを一五分ぐらいで抜けられたであろうか。一〇分ほど北上して、また渋滞。

一kmほどを三〇分ぐらいはかかったと思う。前方交差道路で、救急車が連続して通過している。神戸市西区にある西神戸医療センターに向かっているのだろう。ラジオから訴え続けられていた「不要不急の車はご遠慮ください」のメッセージに傷つきながら、自分を慰めた。

しかたなかつたんだ。いまさら戻ることもできないし。きょう行かないと、明日は行けないかもしないし。車を出すのはもうこれつきりだから。

渋滞を待ち、そして、ひたすら走った。

交差点を左折で抜け、西神ニュータウンの中心地、西神中央駅の前を通過し、団地を横断し、田園の中を走った。二〇分も走って、今度は長めの渋滞になつた。一~二kmぐらいで、一時間近くかかつたか、と思う。三木市と神戸市を結ぶ幹線道路と交差する所からの渋滞だった。

この交差点を抜けてからは、神戸市北部の市境に沿つて三〇kmぐらいは快調に走れた。日もすっかり落ちて、ライトをつけていた。山奥ともいえるこの地で、反対車線に大型トラックを多數まじえた渋滞があつて驚いた。山の中を縦断して神戸方面に通じる国道から抜け出してきた列だった。この道は、ときどき走っているので様子がわかつていたが、私の走る快調な進行方向の車も、ふだんの何倍も多かつた。

中国自動車道の西宮北インター前から、国道一七六号線に入るべく走らせた。そのインター入口前を通過して、渋滞の最後尾についた。それからが大変だった。一七六号線で右折するつもりが、その前方三〇〇mが進まない。動かない。なんと二時間もかかってしまった。ここで、岡山から応援に来た救急車と出合った。脇道に停め、職員が立ち小便していた。パトカーの先導を待っていたパワーショベルカーの出発にも出合った。三田市の救急車がサirenを鳴らして、病院に向かっていた。インターの向かいに流通基地があり、大型トラックが、次々と、我々の列に加わってくる。すべて災害救援のように思えてしまう。岡山から来た赤帽トラックが、緊急物資搬送中と書いた布をつけ、警笛を鳴らしながら、反対車線のすいている道を逆走して行つた。

やつとの思いで一七六号線に入り、ここでも長い停滞の後、前方に見えてきた道路情報表示板は、黄色の点滅をまぶしいほどに点灯させていた。「通行止。土砂崩れ」——心臓の凍る思いもしたが、赤いテールランプの列が延々と連なり、それが進行方向に向かって一応動いているのだから、なんとかなるのだろう、とでも思わなければ、引っ返すわけにもいかないし、と、山岳地帯を走る暗い国道で、じつと我慢だつた。

八時、九時、^{とき}時は容赦なく過ぎていく。この渋滞の列に、七〇〇円の札をぶら下げて、弁当いりませんか、とニタニタしながら売つてまわる男二人がいた。

子どもたちは寝ている。妻は、眠つたり、目を開けていたり。十時、十一時。「もうどれくらい、来た?」と、重くなつた口を開いた。「三分の一ぐらいかな。着くのは二時か三時ぐらいになるかも」と、恐る恐る返答した。妻の忍耐が切れた。「いい加減にしてよ」と。それ以来、無口になつた。そして、やがて横たわり眠つた。

くやしかつた。判断は甘かつたかもしれないけれど、もう来てしまつてゐる。追い込まれる気持ちで胸がしめつけられる。ハンドルを握る手に汗がにじむ。十分にあつたはずのガソリンの残量が気になり始める。この渋滞から抜け出せるのだろうか。ガソリンはそんなにないかもしれない。通過したガソリンスタンドは、電気を消していた。

リュックを背負つて歩いている男の人を何人も見た。この真っ暗な山影の、どこにいる人たちの行く先があるのだろう。見通しのきくカーブでは、前方に救援物資を積んでいるらしい大型トラックが何台も見える。黙々と進む車の列。緊急搬送を阻む因子の一つにつっているであろう私の車も、つられて進む。流れが止まつていて、懐中電灯で地図を照らし、どこまで進んだかを確かめる。残つてゐるガソリンで行けそうだと思うようになる。

ラジオはつけっぱなしで鳴らしていた。毎時四十五分になると、兵庫県災害警備本部発表の被害状況が報告される。「死者が三〇〇〇人を超えた」とか、「三〇〇〇人の大台

にのった」とかいう表現に出合った。そこには、意図に反して、三〇〇〇という数字になることを期待している向きすら感じられる。「三〇〇〇人になりました」とか、「三〇〇〇人になつてしましました」というように、控えめな表現がないものだろうか。大震災の名を与えたいならば、死者がこれ以上何人カウントされようと、倒壊家屋が何軒になると、すでに大震災であることはわかりきっている。死者の数を毎時毎時、発表する必要がどこにあるのだろうか。過去の大震災と比較して、何番目というフレーズを誰が聞きたいのだろうか。

延々と読みあげられる亡くなられた人の名前に、耳をずっと傾けていた。「神戸市長田区の」に続いて、そこに住む友人・Tさんの子どもらしい名前を言つたようと思つた。一度だけしか聞けなかつたが、妻も聞こえたというから、気になる一つができてしまった。一眠りして、妻は気を取り直してくれていたみたいだつた。「塩瀬町やから、Kさんの所やね」と、親しい人の名をあげた。車は、宝塚市まであと一息の所まで来ていた。そして、「土砂崩れ」の現場を、片側交互通行でまもなく通り抜けた。

宝塚市内に入ると二車線になつた。快調に走れるようになつた。とにかく給油をしてと思ひ、「ガソリンスタンドに寄つた。「ローリーがいつ来るかわからない現状で、ガソリンがないんです」「箕面へはどう行けばいいですか」

わかりやすい説明で、迷うことなく走り、二軒目のガソリンスタンドで給油できた。箕面市に入る直前、走ろうとしていた国道一七一号線で迂回路を指示された。やむを得ず右折して、現在位置を地図で入念にチェックし、午前三時前、トモの待つワンルーム・マンションにたどりついた。

目を覚ました子どもたちは、また元気になつて、コタツに足を入れ、我が家にはないテレビを見ていた。「お寿司にする？ 焼肉にする？」「いまごろ、肉なんか食べたないわ」と妻。ということで、寿司を頂戴した。「この寿司、えらい冷たいやん」「ああ、遅なりそうやから、冷蔵庫に入れとつてん」

■ 一月十九日（木） 再び明石へ

そのまま横になり眠つた。七時頃、目が覚めた。特に打ち合わせもせざ來たのだから、この日の予定なんてなかつた。テレビ報道を初めて見た。どこがいいかと、トモは、チャネルを、サービスよろしく、あつちへこつちへと変えてくれる。画面いっぱいに、ドラマでも出てくるのかと思うほどのセンセーショナルなタイトルが映し出される。母を失つた子どもが「ママ、ママ」と言い続けている。その同じ場面を二度も流す。涙がこみあげときそで、必死で私はのみこむ。とてもじゃないが、見てられない。

誰だか知らないけれど、金に輝くイヤリングを揺らしながら、何かもつともらしいことを言っているが、一体なんだと思ってしまった。それに一々うなずいているキヤスター。現場口ケーションとしての資料映像としての、その重要性・報道性は認めたい。そして、少しだが、見せてもらった。だから、私は、やっぱり帰ろうという気になっていた。それも、すぐに。

妻の顔色がよくなつた。やつぱり連れてきてよかつた。ここに居てくれるかもしれない。密かに安堵して、「もう、遅なつたらイヤやから、早めに帰るわ」と言い、帰宅の許しをもらつた。

午前九時出発。覚悟していた通り、明石に着いたのは夜六時半だった。

少しでも渋滞の列に加わらないようにしようとしているうちに、宝塚市の中山寺なかやまでらに迷いこんでしまつた。地割れが激しく、倒壊家屋もあつたりして恐ろしく、なんとか早く抜け出したかった。

猪名川大橋いながわの上で渋滞の列にいたとき、ラジオが「西宮大橋は落下の恐れがあるため通行止になりました」と伝えてきた。不気味な思いがする。橋上にいる間に、強い余震が来ないことを願うばかりだった。

一人になるとその解放感からか、感情が自然にはとばしり出る。長田区のTさんの子ど

もが亡くなつたと思い込み、あふれる涙をとめることができなかつた。家を失つた妻の母を思つても涙が流れた。

ラジオは相変わらずつけっぱなしになつた。「スキーを載せた車が、渋滞の道を走つてゐる」の声に、AM神戸のアナウンサーである三浦さんは、若者たちに呼びかけていた。「今、若者にとつてかつこいいことは、車を動かさないことですよ。ね、そう思いません」「神戸がこんなに大変なのに、その郊外でパチンコをしている人たちがいる」とする、非難の声もあつた。ボランティアが善で、パチンコを悪とする、二極化の例になるだろう。片方を切り捨てる考え方はどんなときでも危険だ。みんなが興奮しているだけに、冷静な判断が欲しい。ちなみに、アナウンサーは読んだだけでコメントしなかつた。賢明だったと思う。

■同日 作業場 兼 寝室

帰ると、郵便が入つていた。取引先である東京のO社から、FAXが通じないからといふことで、ハガキで安否を尋ねてきた。消印は一月十八日だから、翌日に届けられていてことになる。ということで、どうやら郵便が届き始めた。

FAXが一枚届いていて、長田区のクマちゃんこと林英雄さん（後日、証言をとる）の

無事を知らせてきたものだつた。家は半壊になつたので、今は、中央区にあるご自身のオフィスに仮住まいしている、とのことだつた。

気になつてゐるTさんの安否を尋ねるために、北区の友人に電話を入れた。そして、無事であることがわかり、聞いた放送は、なんだつたのかなという始末だつた。でも、ほんとうによかつた。うれしかつた。

箕面へ、無事着いたことを電話連絡し、Tさんの子どもは人違いか何かで、とにかく無事だと、伝えた。

帰路、コンビニで買った三つのおにぎりの残つていた一つと即席ラーメンが夕食になつた。食べることも相当いい加減になつてゐる。ふだんは、消費者問題にもタッチし、添加物の少ないものをと心がけているのだが。

時計は八時をさしてゐる。昨夜もせいぜい三時間しか眠つていない。しかし、せき立てられるもののほうが強い。二段ベッドの下段にコタツを置き、コタツの上に、電話の子機、ワープロをセットし、脇にラジオを置いた。作業場兼寝室の準備完了だ。

私は、『震災の記録』の打ち込みを始めた。

不要不急の車

大災害時の道路では、救助や緊急物資搬送の車が最優先であることは明らかだ。今回は、震災直後のひどい交通渋滞が、最優先であるべき車の進路を妨げた。そのために失われた命もあるだろう。また、もしも車に引火すれば、道路は火の海になつていただろう。

妻子を箕面まで避難させた行為は、私にとつてはやむを得なかつた。同じくして脱出をはかつた人は数知れない。車を使わないルートもあつたかもしれないが、被災地に近いほど公共交通の不通箇所が多くなり、ことに避難を必要とした弱者にとつては、車がもつとも安全だつたともいえる。一方、電話が通じない家族の安否を確かめずにはおらず、他府県から詰めかけた人もこれまた多かつた。それぞれに事情は切実だつた。そして、切実な事情を抱えた人たちの車の列が、緊急搬送を妨げたことは事実だ。

いずれの都市で災害が起ころうと、これは避けようのない事態なのだろうか。

大阪から神戸に至る地域は、市街地が東西に平たく伸びている。道路交通網も東西に偏つて発達し、南北に通じる幹線道路がほとんどない。抜け道が少ないとことが、渋滞を生む原因のひとつになつたと思う。

電話などで無事だとわかつていながら、被災の現場に車を走らせるのはやめてほしい。緊急性の高い場合を除いて、車での乗り入れ・移動は控えるべきだと思う。ただし、緊

急性や必要性を客観的にはかるのが難しい。思うに、ラジオなどで情報をいちばん早く届けること、災害対策本部が被災者を安心させる内容の情報を的確に流すことが、人の移動を最小限にとどめるのに役立つのではないか。

こうした前提に立って、災害時には「車を動かさない」という原則をもちたい。

激震地に入る（神戸市 須磨区）

〈1月20～24日の記録〉



あちこちに残る焼け跡（須磨区）

自宅から板宿までの道のり



1月20日、妻の母を避難所に見舞う。須磨区板宿にある実家は全壊した。通常なら、明石・板宿間は海岸沿いに走る山陽電車で15分だ。しかし不通になったため、バスと地下鉄を乗り継いで大回りすることになった。

■一月二十日（金）板宿いたさとに行く

きょうは、妻の母がいる避難所に行くことになっているので、その準備にかかった。持つてきてほしいと依頼があつたものをリュックに詰める。まず、水とお茶のペットボトル（一・五リットル容器一本ずつ）。明石では手に入りにくいため、箕面市で買っておいたものだ。それから、下着・タオル・靴下・かぜ薬など。

ドロップ缶も頼まれていたので、買いに行くと、カワセの前には、人の列ができていた。店内は人數制限をしているため、その順番待ちだった。敬遠することにした。

マンションの水汲み場に、応急の蛇口がつけられ、入れ代わり立ち代わり、人の動きがあつて、『活気のある』場所になっていた。台車で水を運んでいる人が多い。新品のを見かけるから、わざわざ購入した人もいるようだ。一方で、子どもや女人が、重いバケツを手でぶらさげて、行つたり来たり。大変だな、と思った。はつきり言って、不公平だなとも思った。うちには当面使うことのない台車があるから、共用してもらえばいいと思いつき、臨時の仕事をしてしまった。

ベニヤ板で看板を作った。マジックで、「子どもや女人の人が優先です。水汲みは重労働ですから、男人もどうぞ」と書き、台車にくくりつけて水汲み場に置いた。看板の裏面

で、「どんな小さいことでも、自分に何ができるかを見つけて、早い復旧を」とも、訴えた。

台車を使うと、どうしてもエレベーターに乗らなくてはならないが、私は地震発生以後、一度も乗っていない。万が一でも、余震に出来たら、かなわないからだ。自分の水汲みは、階段を歩く。

もう一つ、臨時の仕事をした。「自治会長様 当マンションにて、震災後に玄関ドアが閉じられたままになっている場合、①不在、②人が中にいて事故か何かで閉じられたまま、この区別がついているのでしょうか。気になります。お調べくださいませんか」のメモを書き、管理人室に届けた。

（前述の通り、地震の当日にまわって調べたとの回答をいただいた）

同じ明石市内に住む友人から電話があつた。神戸・明石地域の共同購入グループのリーダー格の人である。「おいらは『復旧』なんて考えてへえんのや。新しい動きへの出発やと思つとるねん」と言い、ネットワーク拡張の考え方などを語る。こちらの近況など、いろいろ話して電話を切つた。

そんなことをしているうち、出発がすっかり遅くなってしまった。十一時前に、リュックを背負い、コートを入れた手提げ袋をぶらさげて家を出る。コートも依頼の品のひとつ。

カワセの前を横切ると列が消えていた。ドロップ缶を三つ求めた。

明石駅まで足早に歩き、西神中央駅に行くバスに乗った。満員だ。乗り合わせた人の荷物は、概して大きい。それを二つ・三つと持っている。私は立っていたが、左前に座つていしたロングヘアの若い女性が、すぐ前の人々の荷物を取り上げて、「持ちます」と言い、まだ余裕があるとみて、「それも持ちます」と、膝の上をいっぱいにしていた。荷物の主は、遠慮はしたもの、好意を受け取っていた。

ときおり緊急の車がサイレンを鳴らして走る。救急車・消防車・パトカーに限らない。パトカーに先導されたガス・水道・電気・血液の運搬車、土木局の車ほか、さまだ。とにかく、サイレンが聞こえたら道をゆずる。このルールはよく浸透していると思う。ゆずつても、思うように道があかないことも多い。やはり不要不急の車は運転してはいけない。

西神中央駅では、駅員が、ハンドマイクで電車の運行状況を絶えず説明していた。コンコースに立つと、バギーや簡易型の運搬具を引いている人も多い。空港で見かけるスーツケースや車輪つきの大型バッグもあつた。まさか、外国旅行するため、ここにいるのではあるまい。おしゃれなはずの近代的地下鉄の駅に似合わない風景だった。
電車は、すべて名谷行き。名谷で板宿行きに乗り換える仕組みになつていた。板宿以遠

は不通のままだ。車内はだんだん混んできて、板宿に着いた頃は、ほぼ満員になっていた。地下鉄は、買い出し電車であり、お見舞い電車であり、救援電車であつた。日々に語るその言葉に、「五時間コースやな」とか、「あしたは、JRが動くんとちがうか」などと、交通機関の心配をしている。

板宿で、はき出されるように出口に向かう。整然という形容がピッタリで、急ぐ人がいない。私の後方で、中年の男の人が、「持ちましよう」と誰かに声をかけ、二つのバギーをつかんだ。札を言った女の人の腕に、子どもがいた。階段の所になると、その男の人は相手を脇のエスカレーターへと導き、「私、上で待つてますから。どうぞ」と言って、自分は階段を上がった。

〈誰もが整然としていること、黙々とした行列、そして、互いへの気遣いは、震災直後の、非常に特徴的なムードだった。誰だって疲れているに違いないが、凄まじい光景を目にし、そこに行き交う人々と、ひとたびコミュニケーションをもてば、自分のすべきことは何かと、自覚せざるをえない。そして、すべきことがあるのは、喜びなのかもしれない。破壊のショックに呆然となつた後、私を含めて多くの人は、すべきことを見つけることで自分を保つていたようと思う〉

■同日 被災地・板宿

地上の空気は、生ぬるかつた。無風で、晴れていた。ヘリコプターが舞う。消防ホースが、道路上に幾本も通り、水が通つてゐるらしく、膨らんでいた。避難所に行く前に、全壊したという妻の実家を見ておくことにする。地下鉄の出口で、いきなり一軒の家が横倒しになつていて。約一m幅に残された歩道に身を寄せて通り抜ける。木造建築は、地上にまっすぐ立つてゐるほうが珍しいぐらいで、つぶれたり傾いたりしている。一階部分が押しつぶされた、家や文化住宅（二階建ての木造アパート）が多い。幅一〇m程度の天井川は、右岸の護岸が崩れ落ちていた。地割れも激しい。広島県呉市の消防車が、この地域を守備範囲としていた。

天井川の橋を越えると、そこに実家がある。路地に並ぶ戸建ての二軒目だが、手前の家が路地を覆うように傾いているため、実家がどうなつてゐるのか見えない。見るためには、傾いているその下をくぐらねばならない。右足を半歩出してみると、体がついていかない。膝もつき出してみるが、こわい。あきらめようかと思つたら、反対側からハシゴをかついで来る人がいた。度胸をすえて駆け抜けた。妻に知らせたい気持ちもあつて、どうしても見なかつた。

玄関が南方向に大きくひしゃげ、菱形のようになつてゐる。右側の壁は全部剥がれてい

るから、台所の奥まで見通せる。妻の母は、二階で寝ていて、タンスにはさまれ、近くに住む妻の兄の「おばあちゃん、いるんか」の大きな声で、何とか這い出したという。

避難先は、大黒小学校の二階・二二番教室。廊下も避難場所に当てられていた。めざす教室は一番奥まつた所にあった。教室の入り口には名前が貼りつけてあって、おばあちゃんの名前を確認した。四〇人ぐらいは居るようで、廊下のガラス窓にはカーテンが引いてあって中がよく見えない、それは、プライバシーを守っているようで、覗き見ようとするのもよくないように思える。

後ろのドアを引いて、中を覗き見た。ドアを開いた正面に、あの傾いた家の人がいた。靴をぬぎ、敷きつめられている布団のどこを踏んでいいかよいかもままならず、それでもなんとか声をかけられるぐらいまでたどりつき、「このたびは、大変でしたね」とお見舞いの言葉を送り、「おばあちゃんを知りませんでしょうか?」と尋ねた。「今、水、もらいに行ってる」「水をもらうというのは、どこでもらうのですか?」

背後にあつた窓を指さして、「あそこ」「ありがとうございます」と礼を言い、再び、どこを踏んだらよいかと足をもてあましながら、靴のあるところまで戻った。靴に足を入れ、運動場に出ようと階段に近づいたところで、おばあちゃんとうまい具合に出くわした。「ここやねん。入り。まあ、見てみ」と、今度は、前のドアから入った。ほんのりと、ち

ようどよいくらいの暖かさだつたが、暖房があつたのだろうか。それとも、人いきれなのだろうか。確かめていない。

黒板に近い列に、机ではなく布団が敷きつめられ、一一人の居場所になつてゐた。おばあちゃんは、そのほほ中央の部分に位置していた。まるで、教壇に立つ、先生の場所といふうだ。おばあちゃんは右手で、並びの右側の御三方をさして、「この人たちにエライ世話になつてなあ」と涙ぐんだ。いずれも女性である。「一緒に逃げてきたさかいな」と、そのうちの一人のおばあさんが言つた。御三方の向こうには、おじいさんが体を起こして座つていた。

妻の兄がやつて来てから脱出の様子をひとしきり話してくれたあと、話題は避難所生活のことへ移る。食糧事情はよいと言う。「もう、きのうあたりから、急によくなつて。余るん。もう、お腹いっぱい」「そやから、食べるものはええねん。みんなが差し入れを持つてくるやろ。いっぱいやね。寝る所があらへんぐらい」

リュックを開いて、依頼の荷物とコートを届けた。下着の類は、もういらぬと言う。御三方の一人の息子さんが、ハシゴで二階に入つてくれて、下着などを取つてきてくれたそうな。「お位牌も取つてきてくれてね」と笑みを見せた。

おばあちゃんは、郵便貯金と書かれた紙袋を取り出した。その中に、通帳と現金が入つ

ている。「これ、トモの学費。これが最後やねん。いつ死ぬかわかれへんしな。渡しとくでも、これ、どうしたんです。取りに行つたんですか?」「あの人と一緒に取つてもろてん」と、ハシゴ氏のことを意味していた。私は、通帳と印鑑を受け取つた。「すみません。ありがとう。ほんとうは、私がせないかんことですのに」

私の事業は、まだ採算がとれていな。とても大学にやる費用がない。幸い学費のほうは、申請を出して全額免除で切り抜けている。トモ自身のアルバイト収入と、おばあちゃんの資金援助で学生生活を送つていたのだった。おばあちゃんは、先に亡くした夫と冷凍設備の工場（兵庫区）を経営していた。息子がその後を継いだが、工場も震災で操業不能になつてゐるという。

「きょうは下見のつもりで來たんですけど、つぎ来るとき、何が要ります」と、尋ねると、メモを書いていた。「熱いお茶がほしいね」「それは、お湯と茶の葉を持つてくるの? お茶にして持つてくるの?」一思案して「お茶にして」「それから、ぬれティッシュと、メントムと、マジック、それだけでいいわ」

「来週の木曜日には、薬をもらいに行かなあかんねんけどね」「もらいに行くって、どこへ」「大学病院」「どやつて行くん。行かれへんで」「歩いてでもいいよ」「それは、無茶や。どうしてもそこでないと、あかんの」「あかん。甲状腺の薬は、どつこにもあらへんねん」

そこで、私の車で行くか、あるいは渋滞のもととなる車を出さずにする方法があるか、災害本部に相談することにし、担当医の名前などをメモしたのだった。

三〇分はいただろか、別れて、運動場へ出た。自動車が数十台も駐車している。避難者の所有する車なのかもしれない。「車中泊」と貼り紙をしている車があつた。教室でなく、車で寝泊まりしているということなのだろう。

つぎは、妻の兄一家が避難している板宿小学校へ向かった。隣の校区になる。山陽電車板宿駅東の踏切を南から北へ抜け、再開発で新しくなつたばかりの板宿商店街を歩いた。耐火構造の建築群が整然と立ち並び、アーケードも建物も、被害がないように見える。取引口座のある信用金庫が営業していたので、驚いて挨拶に立ち寄つた。「こちらへんでは、うちどこだけが営業できまして」と説明してくれた。

板宿小学校の校門の中に入った。兄さんの避難している部屋はわからなかつたので、玄関ホールに掲出されている名簿を見てまわつた。「体育館D」とわかり、校内配置図で三階にあつた。

兄さんはいなかつたが、つれあいのリツコさん、そこへ、リツコさんの妹さんとその中学一年の息子さんが見舞いに来ていた。体育館は広く、新築まもない建物で、暖房がソフトに入り、水銀灯で明々としていた。

リツコさんは妹さんをさして、「この人の周りは被害が少ないのよ」。どこかと尋ねてみれば、五位の池（板宿と同地域）の上ということで、「五、六十軒、瓦の落ちてない家がかたまつてあるの。この子なんか、地震のとき、起きなかつたのよ」。

地震談義をしていると、ダダッと揺れた。余震だつた。「ここだつたら、安心やね」などと、話していた。避難所には、愛犬たちも避難していた。

小学校を後にし、この地域の友人宅、四軒をまわつた。途中、妻の兄さんの家にもまわつた。兄の家は、まつすぐ立つてゐるが、壁の亀裂や脱落が激しい。歩けば歩くほど、被害は各所におよんでいる。いつ強い余震がやつて来るかもしれないのに、高い屋根に上がり、瓦屋根を修復する手だてもなく、青い雨よけシートをかけている。上空を飛ぶ飛行機は、真っ白の飛行機雲を残していく。きょうは晴れだが、天候の変化は迫つてゐる。

Hさんの家では、ご夫婦そろつて片付けの最中だつた。「子どもは、田舎にやつてね、この近くでとりあえずの家が借りられたから、引っ越すの」と言う。Hさんは、床にできた割れ目に定規をあててみせ、「ここを毎日、計つとんねん。少しづつ開いてきてね。裏が崩れとんや。エへへ」と、ひょうきんさに変わりがない。

Oさんは、電話では無事を確認しているのだが、現場に立つと、全壊・半壊の中の独立峰という感じ。瓦礫の山を踏み越えて、呼び鈴を押した。「ああ、お会いすることができる

ましたね」と、Oさんと私の腕が、まさにそんなふうに動いて喜びをあらわした。それほどに、周囲は惨状だ。ここで、三人死にました。向かいは中学生のお坊っちゃんが亡くなつてね。その家のベッドが立つたんですって、と身振りで説明してくれる。ベッド自体が衝撃で立ち上がったのか、床が陥没したのか、とにかく、想像を絶するような力が加わつただろうことは周囲を見ればわかる。

夕方になって、少し冷えを感じた。

Wさんは、外見からは被害はないようと思えるが、「板宿小学校にいます」と貼り紙がしてあつた。

Iさんは文化住宅の一階部分だが、どうやつて脱出したのかと思うほどに、ひしゃげていた。カーテンに「↓板宿小学校」とだけ、書かれていた。

■一月二十一日（土） 市民の足・市バス

「神戸駅に行きます。乗つてください」と、車掌役の男性は、大きな声で誘導していた。バスは板宿を発車した。ほぼ満員。午前十一時頃。「バス停がありませんから、降りたいところではボタンを押してください」

たくさんの人々がリュックを背負つて歩いている。自転車も多い。道路の舗装が至る所で

波打ち、地割れを起こしている。応急の舗装をした所もある。起伏のある道を走るものだから、バスは車体を揺らしながら、ゆっくり走る。

大田町の交差点を過ぎると、景色は一変して焼きつくされた光景になる。車内がざわつく。阪神高速が、大きく傾いていた。支柱の中ほどで、多数の鉄筋がむきだしになつていた。

「駒ヶ林、お願ひします」と、奥から女の人が頼んでいた。「ハイ」と車掌役は返す。駒ヶ林で降ろしたあと、走っている途中、乗りたそうな人がバスの窓から見えた。車掌役が運転手に声をかけた。「止めて」。車掌役はバスを降り、手招きして、さつきの人を呼んだ。「次は、和田岬です」。全部のバス停がなくなつたのではなく、残つているものも多かつた。でも、「そこで降ろしてくれません?」と声をかければ、どこでも降ろしてもらえた。「あのう、帰りは、どこで乗つたらいいんですか」「乗りたい所でバスを見つけたら、手を挙げてください」。

「次は、中の島です」。後方で、乗客の声がしたような気がする。でも、はつきりしない。車掌役も迷っている。「止まるわ」と運転手が言って、バス停に止まつたが、誰も降りようとしてない。再び、バスは動いた。

車掌役と運転手のコンビで、市民の足を演じようとしていた。こんなバスも、地震は生

み出してしまった。

■同日 取引先・トーハンへ

私は、ヒントブックスの屋号で本屋をしている。店を持たない書店で、宅配便や書籍小包で全国各地に送ったり、近くは配達している。店がなかつた分、店舗部分の被害が発生しなかつた。業務関係の機器も無事だつたが、仕入先と顧客の大半が神戸市内だつたため、休業状態に追い込まれた。

仕入先であるトーハン神戸支店は、神戸駅の近くにある。いつものように裏側からまわつて行くと、B棟に「危険」の貼り紙が貼られていた。正面玄関つまりA棟に立つと、自動ドアが動いた。職員の皆さんの前に姿を見せると、「ヒントさん」と、びっくりしたよう見られてしまった。消息がつかめない店の一つにされていたようだつた。

書店仲間などの安否を聞く。帰りがけに、職員の一人が小声で尋ねてきた。「歩いてきたん?」。リュックを背負つた震災ファンションのせいかもしれない。

帰りは山側をまわるバス路線を選んだ。行きに乗つた浜側のコースとは違い、震災前のバス停がほぼそのまま使える状態にあつた。乗務員も一人で、震災前の市バスと変わらなかつた。

明日、雨が降るという。しかも、まとまつた雨が降ると予報が出ている。青い雨よけシートをかける風景があちこちに見える。急いでいるのだろう。

午後五時すぎ、AM神戸の電波で、代議士のH氏とその妻氏が、切々と震災を見舞う言葉を述べていた。その中で、強い余震が来るというのに屋根に上がっているのは、情報が徹底していないからだ、と言っていた。

違う。誰も、余震に脅えている。にもかかわらず、自分で家を守らねば、財産を失うからだ。政府が家をポンとくれるならば、誰もそんな危険なことをしない。

■一月二十二日（日）

『震災の記録』を終日、書き続けた。

■一月二十三日（月）

午前十時すぎ、NHKラジオ（第一）で聞いた早川和男さん（神戸大学教授・建築学）の話に、思わず関心をもつてしまつた。要旨はこうだ。

神戸市は、六甲アイランドやポートアイランドや西神ニュータウンなど、大規模開発やイベントにばかり力を入れて、市民の安全をあまり考えてこなかつた。古い木造建築の改

造、貯水槽の整備などをなおざりにしてきた結果が、今回の震災で露呈した。市長は、市民に謝罪すべきだ。政府は全力をあげて住宅を提供するべきで、住むところさえあれば食べることはできる。当面、市が働きかけて、被災者にホテルを開放してもらうべきだ。

早川さんはかつて、一九八九年十一月四日の神戸新聞紙上で、現在の笹山幸俊市長에게注文をつけていた。いわく、「住む」のではなく「住まされている」街。「行政暴力の街」。六甲アイランドに通じる六甲ライナーがマンションを見下ろし、プライバシーを侵害している例をあげながら、市民のための街づくりを提言している。

これから、神戸市をはじめとする被災地の“復興”“再開発”的呼び声がますます高まるだろう。その一方で、復興論議からすでにとり残されつつある淡路島がある。復旧ではなく新しい動きへの出発だ、と言う友人もいる。

行政主導の大規模な再開発を望まない人は多いのではないか。自分たちの町づくりのビジョンが必要だと思う。私たちで声を上げて行政を動かしていく、そんな流れを作り出せないものかと考えた。

■一月二十四日（火）

ここまで記録を進めてきた。

私の記録は当然、私の体験でしかない。自分と家族に起こったこと、通りすがりで見聞きしたこととに限られている。

他の人々は、どんな体験をしたのだろう。私が電話したり訪ねていった友人たちの話は、同じ揺れの瞬間に起こったことも、それぞれ違っていた。被害の程度や、その後にとつた行動も違う。何を必要とし、何を望んでいるのかも違うだろう。

思うに、災害援助の中に、「記録係」が駆けつけるボランティアがあつてもよいのではないかだろうか。ひとつには、記憶はどんどん薄れてしまうからだ。マスコミ報道は、たくさんの被災者の証言をとっているが、いずれも短く、地震の衝撃だけを伝えるのが目的のように思える。あるいは悲惨さだけを強調している。もうひとつ、震災の当初は、誰しもが自分に襲ってきた恐怖を“話したかった”し、“聞いてほしかった”のだ。おそらく、通じにくかつた電話で、そのようなことが語られたに違いない。語ることで、癒されたのだと思う。

②章

被災地からの証言

●証言者の在住地



●震度7の
地域



一月二十五日から、私は取材に歩きだした。

私の友人、妻の友人、

そして友人を介して出会った人たち……。

この震災を、どう生きのびたのか。

そこに何を見て、何を感じたのか。

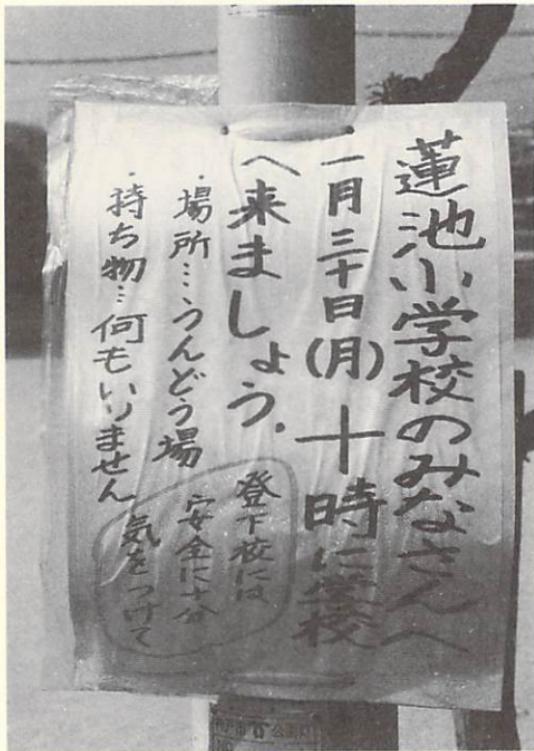
何を思い、どう行動しているのか。

どんな生活を、望んでいるのか。

どんな町を、作っていきたいのか。

彼らの声を伝えたい。

生きのびる



電柱にくくりつけられた子どもたちへの呼びかけ(長田区)

カラスが襲つた

●中井静香 十二歳（小学六年）

通学先だった蓮池小学校の教室、家族四人と犬一匹の避難生活を送る。避難後ちょうど一ヶ月にあたる二月十七日、教室前の廊下でパイプ椅子に腰かけ、話を聞いた。同校では、子どもたちのほぼ全員が被災し、各地に疎開した子どもも多い。近くの中学校を借りて二時間程度の「二部授業」が行なわれているものの、学校再開のメドは立っていない。

家は二階建てだつたけど、一階がつぶれたの。古い家だつたから。

すごく揺すぶられて目が覚めたら、お父さんが、「まさはる！」と隣の部屋に寝てたお兄ちゃんの名前を呼んで、次に「しづか！」って呼んだ。

私ね、カラスが襲ってきたのかと思った。

——なんで?

「カラス!」と、大声でお父さんが言つたから。ほんとうは“ガラス”だつただけど。キュッキュッキュッキュッと音がしてて、カラスが鳴いてると思った。そしたら背中に本が当たつて、カラスのくちばしかと思つて、「こわい」と叫んでた。お母さんがあとで教えてくれたんだけど、お母さんが静香にかぶさろうとしたら、リーケン(犬)が静香の背中にいたんだつて。

〈静香ちゃんは、お父さんとお母さんの間で寝ていた。リーケンは、部屋の隅で眠つていた。キュッキュッキュッキュッというのは、柱のきしむ音だつた〉

——それからどうしたの?

お父さんが、階段を見たりしてた。「下がつぶれてる。階段が降りられへん」とか言つてた。真つ暗でなんにも見えなかつたし……。ガラスがいっぱい割れてるし、なんかいっぱい散らばつて……。ときどき揺れたからじつとしてた。

〈父親は家族を外に出そうと思うが、外の状況がわからず、明るくなるのを待つしかなかつた。やがて、うつすら明るくなつて、近所で声をかけあうのが聞こえてくる〉

お向かいのおじさんと、隣のおじさんが、「だいじょうぶかあ」と言うてくれて。「みん

な無事ですう」って、お母さんが大きい声で言つてた。「一階から入ろか」っておじさんが言つたら、「へたにさわられたら、家が崩れる」ってお父さんが言つて、今度は隣のお兄ちゃんが、「ベランダの戸、あけましょか」って言うてくれたら、お父さんが、「そこあけたら、崩れるかもしらん。割つて出るわ」と言つてん。

——どやつて割つたん？

毛布を手に巻いて、ガラスを割つた。そこから隣のベランダに出て、近所の人がハシゴをかけてくれたから、お兄ちゃんが先に降りて、私が降りた。それからお母さんが降りて、お父さんがリーケンを抱いて降りた。近所の人が下で待つて助けてくれた。

下に降りたら、素足やつたけど、みんなが靴下や靴を履かせてくれた。パジャマのままやつたから、服やコートを着せてくれたの。

（路地を抜けて道路に出ると、みんなが寄り集まつていた。ここは、商店街・会社・工場・倉庫、そして住宅が混在した密集地域だった。地盤の亀裂が激しく、大きなビルまでも傾いていた）

——みんな、親切なんやねえ。

ガラスが刺さった男の人が来て、「どうしたらいいか」とお母さんに聞いてた。お母さんは看護婦さんだから。すぐ近くで、顔が真っ青になつて倒れている女の人がいて、人工

呼吸をしてもらつてゐたところやつたの。お母さんも「代わるわ」って、交替してた。

——助かつたの？

亡くなつた。十五歳だつて、あとでテレビを見て知つた。知らない人だけど。

（昼近くなると近所から火の手があがり始めた。一家は、蓮池小学校へ避難した）

——おなかは、すかなかつた？

全然、すかなかつた。すごく寒かつた。

——最初に食べたのは何？

チヨコレート。避難してきて体育館の前の廊下にいたら、親戚の人が来て私たちにくされました。

——ここで、お手伝いしたりするの？

お父さんが家のものを取り出すのに、お兄ちゃんは連れて行くけど、私は絶対連れて行つてくれない。「あぶない」つて。「リーケンと、ここでお留守番しどきイ」つて。本や教科書は、取つてきてくれたけど、服とかがまだ。卒業式に着て行く服を買つてもらつたの。あの服、取りに行きたい。

——地震のこと、テレビで見た？

うん。悲しかつた。自分がよく行つたり通つたりしてたところが、焼けたりつぶれたりし

て、全然わからへんようになつてしまつて。三宮のビルが倒れてるのを見て、こんどまた大きな地震が来たら、どうしようと思つた。

前に、北海道の地震をテレビで見たときは、ただ「こわいなあ」と思うだけやつたけど、自分がなつてみて「こんなこわい思いをしてたんや」と思つた。

——おうちの人は、どうしてる？

お父さんとお母さんが、家のことをよく話してゐる。「お金が足りない」とか言つてたから、お母さんに、自分の貯金を「あげる」と言つたの。お母さんが働いてゐる病院でも、お金を貸してくれるつて。

もし家ができるんやつたら、自分だけの部屋と、広い台所があるといいなあ。

——広い台所？

はい。ケーキとかクッキーを作るのが好きだから。でも一番いいのは、じょうぶな家。それと、みんなが一緒にくつろげるようなのがいい。

——学校は、まだ始まらへんね。

早く始まつてほしい。前は、学校がきらいやつたし、友達に腹が立つたり、そんなときは行きたないなあとつたりしてたけど、今やつたら、まだ会つてない友達に会いたいから。みんなと勉強したいし、一緒に給食が食べたい。

初対面の子どもから核心にふれる話を聞きだすのは難しい。そこで私は、「震災体験・お話しシート」なるものを作つてみた。「地震が起きたとき、どうしていましたか?」「おうちの人は、どうしていましたか?」どんな会話をありましたか?」など三項目の質問だ。このシートを静香ちゃんも一部、私も一部、手にして、質問を進めていった。“話すこと”は被災者の心の傷を癒すために最も良の方法の一つといわれる。学校でも、子どもたちが体験を語つたり、書いたりする場が作れればいいと思う。

あどけなさの残る小柄な静香ちゃんは、終始、言葉を拾うようにボツボツと話した。四月からは中学生になる。中学の三年間、高校の三年間——少女の殻を脱ぎながら、変わる町と人々を見つめてゆくことになるのだろう。

五日間の籠城

● 小河定一 八十四歳

一人暮らしのサダイチさんは、明治生命の避難所にいた。せがれに連れて来られたのが一月二十一日の夕方。それまでの五日間、半壊した家の中で独りでいた。食事はどうしていたのか。誰も訪ねて来なかつたのか。長い一日一日を、どうやって過ごしていたのか。二十五日に避難所を訪ねると、一つ一つ記憶をたどりながら話してくれた。

毎朝、目が覚めたら、熱いレモンティを飲むんです。

あの日は、目が覚めたのが五時二十分頃で、五時半頃に飲みました。それから新聞を取りに行つて……。ぬくかつたら山歩きに行こうと思つてたんですけど、寒かつたので、も

う一度コタツに足を入れたんです。

そのときですわ。ガツンと来ましてね……。

あんまり揺れが大きかったから、コタツに頭からもぐつて、ジーッとしてました。地震はやみましたけど、海がすぐそこですから、これは津波が来ると思ってね。

三分、五分、じーっとコタツの中で待ってました。真っ暗な中で、体を丸めてね。津波が来たら終わりやなあと、もう覚悟してました。一〇分ぐらいじーっとしてました。長かつたこと、長かつたこと。

顔を出したら、海がシーンとしてる。

やつたあ！ 助かつた、思いましたなあ。うれしかつた。

（サダイチさんは、助かつたと言ったとき、あぐらをかいている太ももを叩いてみせた。海がシーンとしてる、と言ったときも、耳のそばに手をそえ、声も落として、シーンと気分を乗せた。その後、満面に笑みを見せた。津波を心配するほどの、その地は、須磨区須磨浦通^{（さなみうらどおり）}。昔は漁師の村だった）

——それからどうしたんですか？

電池で聞くラジオがなかつたし、柱時計もふつとんで、それきり動かなかつたね。五時四十七分十二秒で止まつてました。ちょっと進んでたんでしょうな。

六時半頃に、^{しおや}塩屋（垂水区）の孫娘が、「おじいちゃん、だいじょうぶ」って、電話してきましたわ。「家はめちゃくちゃやけど元気よ」と、そこまで言つたところで、電話がブツンと切れました。

——時計がないのに、なぜ六時半頃とわかるんですか？

いつも太陽を見てて、南側の窓へのかかり具合でわかります。あの電話は、たしかに六時半頃だったね。

外に出てみたら、ブロック塀が倒れたり、家が壊れたりで、おそろしくって、家の中でじーっとしてました。不安はなかつたね。どんなことになつてるか、だいたいわかつてたし、覚悟はしてたから。

ふだんは、やることがなければ本でも読むんだけど、メガネが見つからないのでね。あそこは昼間も暗いから、メガネも電気もなかつたら、本は読めません。ヘッドランプはありましたけど。ヘッドランプは、山で使うやつですよ。

（サダイチさんは、八十四歳にして現役の山男。避難所生活も自らの冬山用寝袋を持ち込んで寝ている）

コタツのまわりは落ちてきた本だけで、本棚も倒れて、とにかく部屋の中、むちゃくちやで動かれへん。どうしようもないから、コタツでじーっとしてました。トイレ行つた

り、お腹がすいたりするまでは、もう、ただそこにいましたね。

——ただ、じーっと?

京都の長男とこ行こうかな。名古屋の三男とこ行こうかな。そんなことをいろいろ思つたりしてたね。思つては消えて、消えては何やら考えてました。そうやつてたら、時間が過ぎていきました。

——長かったでしょ、夜が。

寝れました。ヘッドランプは節約して、トイレに行くときだけつけてね、寝ては、目があいて、また寝て、そうやつていたら朝が来ました。

——何を食べとったんですか?

紅茶茶碗に三杯半の米を炊くと、四回食べれるんです。ちょうど地震の前の日の、十六日に炊いたのがあって、十九日まで食いのばしました。塩昆布もあつたし、焼き豚、塩鮭も食べました。でも、塩鮭は焼かないままだから、まあナマみみたいなもんですけどな。あとは何があつたかな。ちりめんじやこ。いつもの三回分を四回に分けて食べました。

避難所に来たのが二十一日の夕方だったから、二十日と、二十一日は、何を食べとったかな。……覚えてないなあ。

——五日間もじーっと家にいたんですか? 誰も来ずに?

あつ、思い出した。十九日の夕方、近所の人が大きなおにぎりを四つだつたかな、持つてきてくれました。そうや、あの人に助けてもうたんや。おにぎりは、一回に一つずつ食べました。塩昆布と佃煮も、持つてきてくれて、「ここに居つたらあかん。見てもらえるところはないのか」と、やかましく言われたけれど、食糧をもらつたものだから、もう一日は家に居れると思いました。

〈そう言つて、サダイチさんは笑う。少しずつ記憶の糸がほどけてきたが、私は不思議でならない。あの状況の中で、じーっとしている様を想像できない。地区の民生委員とか、自治会とか、役所から人が来なかつたのだろうか〉

そうそう、他にも来た人がおつたね。真つ先に一人駆けつけて様子を見にきたのが、地震の日、十七日の朝の十時頃だった。あと、パンや缶詰を持つてきてくれた。役所の人じやなく、来たのは知り合いと、息子たち。

——避難所に行きたくなかったのですか？

遠慮してね。年寄りは早起きでしょ。家やつたら好きにできるし。

そのうち、家のトイレがいっぱいになつてね、つまつてしまつてしもて。公衆便所まで行つたら壊れてるし、切符をこうて駅の便所に行こうと思つても、電車が止まつてゐるから入れんでしょう。

せがれが、自治会長に「避難所はどこがあいてるか」と聞きに行つて、「まだここがいいている」というて、それで、せがれに無理やり連れて来られましたんや。

避難所だと、目が覚めてもみんな寝てるからね。布団の中でじーっとしてるのがつらいね。まあ、ここには食べるものがあるから安心やけど。

……野菜が食べたい。小芋、かぼちゃ、にんじんの煮物。菜つ葉のおひたしも食べたい。娘のとこ行つて、野菜を腹いっぱい食べよかなあ。

娘のとこは孫が三人おつてね。市営住宅に住んでいるのやけど。横尾（須磨区）だから、歩いても行けます。足には自信があるからね。天気さえよければ、週に二回ぐらい、山へ行つて歩いてました。六キロぐらい歩きます。

——今は、山へは？

今歩くとね、心臓がドキドキする。なんでかね、疲れてるのかもしらん。

本が読みたくなつて、せがれと、二十三日に本を取りに家に戻つたら、ひょいとメガネも見つかりました。十七日に新聞を読んでた、その新聞の下にありましたわ。

サダイチさんに、野菜を腹いっぱい食べてもらえる手だけが見つからない。

熱いレモンティも、避難所では手に入らない。たとえ手に入ったとしても、敷きつめられた布団に寝転んでいる大勢の人たちの中で、一人、香りを楽しむわけにもいかないだろう。娘の所に行くのは、「子どもが多いしなあ」と気がねがあるようだつた。日常生活を失つてしまつた八十四歳のおじいさんは、それでも、身振り手振りをまじえ口角泡を飛ばして、大声でしつかりと話し続けた。

一九三八年（昭和十三）年、神戸が大水害に襲われたとき、サダイチさんは一の谷の土砂崩れ現場で、行方不明者の救出にスコップを握つた。遺体に傷をつけてはならないから、少しずつしか掘れなかつたと、今になつて語る。震災でそんな記憶をよみがえらせるサダイチさんは、脚力もあり、日中は避難所から山に出かけることもできるはずだが……そのエネルギーを震災が奪つていなければよいがと、案じている。

勉強きらいやねん。でも…

●谷口亜希 十五歳（中学三年）

高校受験を前に、長田区の自宅は大火災で焼失した。弟の通う御藏みくら小学校の体育館倉庫で、家族と避難生活を送る。避難所から、進学支援のため開かれている私塾へ通っている。短時間ではあつたが、塾の教室で会うことができた。

避難した最初の晩は、全然寝られなかつた。「学校とか進学とか、これからどうなるのか」と、考えたりしてました。

私、勉強はきらいやねん。どつちか言うたら、早く働いてお金が欲しい。でも、お母さんは「高校は出といたほうが、あとからええ」と言うし……。公立か、私立か、迷つてゐ

んですけど、一応、第一希望は公立。でも、私立も今やつたら、家が焼けた人は入学金や授業料が安くなるみたいやし……。

——友達と、いろいろ話す？

なんでも話せる友達は、一人か二人ぐらいです。こんなことになつて、差がはつきりするというか、やつぱりなという感じで。気前のええ子と、そうでない子と、はつきり分かれるな。

——どういうこと？　どう気前がいいの？

私はみんな焼けたでしよう。鏡やブラシをくれたり、ゲームボーイやCDを貸してくれたり……。でも、なくなつたもので一番残念なものがあるの。これがあつたら、あとはなんにもなくともいいぐらい、だいじなもの。

〈なに？　と聞くと、亜希さんは、ちょっと照れるように笑つた〉

「すっぽんファミリー・せみまる」というアマチュアバンドがあつて、そこに好きな男の子がいてね、その子にもらつたサインと、一緒に撮つてもらつた写真が焼けてしまつた。地震のとき、お母さんが「急いで出よう」って言つてたけど、まさか焼けるなんて思わなかつた。

——地震のこと、聞かせてくれる？

掛け時計が頭のすぐ横に落ちてきて、目が覚めたんです。ジェットコースターに乗ったみたいでした。長かったです。こわくて、布団にもぐつてました。天井が落ちてきそうで、家が崩れそうで、ゴオーッていうような、ものすごい音がしていました。

（亜希さんの家は、菅原市場すがわらいちばの中にある大衆食堂だつた。三階建ての一階が店舗、二・三階が住居。寝室は二階にあつた。亜希さんは自分の部屋で、お母さんと小学生の弟は別の部屋で寝ていた。お父さんは肺炎で入院中だつた）

「なんにも見えへん」と、お母さんを呼びました。そのあと懐中電灯で照らしたら、窓も壁もぐじやぐじや。靴下だけ履いて、オーバーをかぶつて、階段で降りようとしたら、壁が落ちて階段が埋まつてた。お母さんが寝ていた部屋の窓が開けられて、外の電柱がちょうど手の届くところにあつたから、それを伝つて降りました。降りるとき、隣のお兄ちゃんが足を持つてくれました。

——家から持ち出したものは？

懐中電灯のところに、お母さんがハンドバッグをかけてたの。その中にうまいこと、財布とかハンコが入つてて、お母さんはそれを持つて逃げました。とにかく急いでたから。外へ出たら、市場の人かいっぱいいて、目の前が火事。何軒か先の家も火事。火事にはさまっていて、地震よりこつちのほうがこわかつた。

もうそれは、すごいとしか……。

〈亜希さんの話に、身振り手振りが加わった。目に焼きついた光景を、なんとか表現しようとしているようだった。それは誰にとっても、「すごい」としか言いあらわしようのない体験なのだろう。このたつた一語に、強い感情がこもつた〉

若い人とかおじさんが、埋まっている人を助けていました。埋まっている人がいっぱいいたから。走りまわって、手分けして助け出そうとしていました。「女人の人と子どもは逃げろ！」と言われて、小学校のほうへ行きました。

〈猛火は夜になつても衰えず、広大な焼け跡を残した。多くの人々の命が失われた〉

——火事にあって、何か思った？

悲しくなつてきたり、さびしくなつてきたり……。自分のところだけでなく、知つている人の家が次々と燃えていて……。

私たちが小学校に行つたとき、運動場の集会所のガラス戸を男の人が破つて、中に入つて鍵をあけてくれました。百人ぐらいいたかなあ。子どもと女人の人が多くつた。

その夜は、畳一枚ぐらいの所に、私と二人と、隣のおばあちゃんと、おじちゃんと、おばちゃんと……六人いたんやね。毛布はみんなで五、六枚あつたけど、寒かつた。全然寝られなかつた。

——何か食べましたか？

地震のあった日は、全然お腹がすかなかつた。次の日（十八日）の朝は、配給のバナナを食べました。それからお腹がすいたので、昼、ローソンに並んで、お菓子とジュースを買いました。

——お父さんはどうしてたの？

入院してた病室（神戸市立西市民病院）がつぶれたから、違う棟に行つたんだけど、ケガ人で廊下がいっぱいになつて、春日病院に移されたんです。

（神戸市立西市民病院は、六階のフロアが五階に崩れ落ち、患者と看護婦四十数人が閉じ込められた。亜希さんのお父さんは六階に入院していた）

春日病院でも、ケガした人が大勢来たから、お父さんは退院しました。とにかく歩けるようになつてたので。帰つてきたら、じつとしてないの。うちの焼け跡を片付けて、小さなプレハブを建てたんです。水もないし、まわりは何もなく不便だから住めないと、ここに家があつたことを「形だけでも残しとかなあかん」と言つて。それで無理して肺炎が再発して……。今は、兵庫病院に入院してます。

——避難所から出たら、どんな家に住みたい？
風呂とトイレと寝るところがあればいい。

〈即座に、きつぱりと答えが返ってきた。それから少し考えて、言い直した〉

まあ、理想を言つたら、広い家で、庭があつて、部屋が多くて、屋上があつたらしいかな。お母さんは、「お金がないから、むだ遣いせんように」と言うてるけど、ほんまにそういうやなあと思います。

震災後一ヶ月の命日に供えられた花が、焼け野のあちらこちらに見える。
焼け土の匂う市場跡に人影は少なく、生活の匂いは避難所に移されていた。
亜希さんは、今、自分にできることは、避難所で配給を受けるために並ぶことと、水汲みですと答えた。

はい。お金がないです。

●ユ・リ（于立） 三十八歳

中国人留学生。現在、神戸大学経済研究科博士課程一年。阪神西灘駅に近いアパートの二階部分で、妻子とともに三人で住んでいた。この大地震で、アパートは全壊した。今は、阪急六甲駅近くの神戸学生青年センターが展開している「留学生支援」を受け、同センターに避難している。話は、同センターで、二月三日に聞いた。細身のユさんは、私の質問にていねいに答えた。

——日本には、いつ来られましたか？

——はい。一九九一年の四月です。

——中国から日本に留学するには、何か条件がつくのですか？

はい。僕は、ハルビン科技大学を一九八二年に卒業しました。中国では、卒業しても、すぐには留学させてくれません。僕は、ペキンに行きまして、経済政策などを研究する仕事をしました。大学卒業後五年以上働けば、留学できます。僕は、八年間働きました。

——留学は公費ですか、私費ですか？

はい、私費です。最初の一年間は、大学院に入るための勉強をしていました。神戸大学に通いまして、研究生でした。それから、神戸大学の経済研究科の修士課程に入学しまして、経済について勉強をしています。今は、博士課程の一年生です。

——被災したときの状況を、お話しいただけますか？

はい。寝てましたよ。すごく揺れて、すぐ地震だとわかりました。電気が消えて何も見えませんが、椅子の上に置いたつもりの服を探そうとしました。でも椅子は倒れていて見つかりません。テレビが僕の頭の横に落ちてきました。小さな部屋ですから、冷蔵庫の上にテレビを乗せていました。もし、テレビが僕の頭に当たついたら、ケガしていました

（落ち着いていた様を説明して、ニッコリ笑った）

（手振りで様子を示しながら、ゆっくり、言葉を探すように語ってくれる）

ガス臭かったので、元栓をしめたんですよ。

毛布をかぶって、階段が近かつたので逃げられました。家族三人で逃げました。

——部屋は、二階でしたね。

はい。向かいのアパートが、前の道路に倒れていきました。裏の道路は狭かつたので、裏側のアパートは、僕の住んでいたアパートにもたれかかるように倒れていきました。そのトンネルのようになつたところを、布団をかぶってくぐり抜けました。けれど、ちょうどその時に余震が来て、それが一番こわかったです。下敷きになるかと思って……。

みんな道路に逃げて集まつていきました。僕の子ども（小学二年・男）が、道路で布団をかぶつて泣いていました。倒れたアパートの一階で、二人のおじいちゃんが閉じこめられていました。どちらも一人住まいでした。一人の人は、「助けて、助けて」と、言つていました。その部屋は、ちょうど自動車の上に倒れていたので、すきまがあつて外に出してもらいました。もう一人のおじいちゃんは、もう動かなくなっていました。

——ユさんが住んでいたアパートについて話していただけますか？

はい。二階建てで、一階と二階と三軒ずつあつて、六軒です。家中は、三畳と六畳に、炊事場です。炊事場といつても、ちょっとだけです。

——いかにも狭いと、手で大きさを示した

——家賃はいくらでした？

はい。家賃は三万円です。風呂がついたら五万円も六万円もします。僕らは貧しいから、一番安いアパートに住みます。安いところは、地震でみんなつぶれました。学費や食べるごとにお金が要ります。学生ですから、アルバイトぐらいしかできません。

（そう言って、彼は一気に不満を話し始めた）

日本は一九八五年頃から、内需拡大をすると言いながら、行なつていないです。行なつていたら、こんな古い建物はなくなつてていたのではないか。中国は遅れていると言われていますけれど、こんな古い建物はほとんどないです。

——ところで、地震直後にアパートを飛び出てからは、どうしましたか？

はい。逃げるときに、僕は上着一枚だけを着ていました。靴下と靴は履いていませんでした。昼すぎになつて、取れるものを取りに、斜めになつたアパートに入つて、服や靴などを取りました。夕方、みんな行つているから、小学校へ行きました。

小学校では五泊しました。友達から、大阪の中国領事館へ行けば、国へ帰れると聞いていたので、帰ろうと思いました。二十二日に、荷物をまとめて、妻子三人で避難所を出ました。雨が降っていましたよ。

三kmほどを歩いて、新神戸駅から北神急行に乗りました。^{谷上駅}で神戸電鉄に乗り換えて、三田駅まで行きました。JRに乗り継いで、大阪駅に着きました。中国領事館に着い

たのは、夜七時頃だったと思います。そこからは、領事館の人の車に乗せられ、吹田市にある領事館の分室で「教育室」というところに案内されました。そこで二泊しました。

——中国へ帰った留学生は多いのですか？

はい。半分以上の人々は帰国しました。一時帰国しても、また来ることもできます。家族三人で帰るつもりでした。関西空港に着いて、飛行機を待っている間に、「でも、家を探さないと」と、思つたんです。僕が帰つたら探し難いでしょう。仮設住宅の申し込みもしないと。ほかの所を借りるなんて無理ですよ。地震で残つた所は、家賃が高いですから。日本で勉強を続けるなら、今、一時帰国するわけにいかないのです。

〈空港に着いたのは午前十時、飛行機は午後三時の出発だった。彼は、その時間の中でどうまる決意をした〉

それで、僕だけ帰りませんでした。彼女は何も言いませんでしたけれど、子どもは「いつしょにかえろ、いつしょにかえろ」と泣くほどの別れだったですよ。やつぱりどこでも一緒にいたいですよね。だから、記念写真を一枚撮りました。

〈彼は、妻と子どもと別れ、進路を逆にとり、神戸市北区の友人宅で三泊した。西宮の友人宅でも三泊した。同胞友人の安否を尋ね歩きながら、震災の町をウロウロしていました。三十日に、連絡のため大学に行きました。その帰り道、ここ（神戸学生青年センター）

に寄つて、留学生支援を知りました。

〈同センターは神戸大学のすぐ南にある〉

——これからは、どうされますか？

はい。お金と家のないことが困ることです。今まで、中国語を教えたり、学生相談所で紹介された短期の仕事などをしていました。そのどちらも、できなくなりました。でも、博士課程があと二年間残つてるので、大学院へ行きたいです。大阪や京都で、ホームステイする方法もありますが、交通費が要ります。

外国人留学生に支給される文部省の奨学金は競争率が激しくとてもむずかしいです。文部省は、二〇〇〇年に外国人留学生を一〇万人にすると言っていますが、国費の奨学生は今、一〇人に一人もいないです。民間の奨学金もきびしいです。

家が見つかつたら、彼女と子どもを、もう一度呼び寄せます。

日本の小学校だと、日本語ばかりでしょう。だから、四月になつたら神戸中華同文学校にいれようと、話し合つていたところだつたんです。

神戸学生青年センターの発行する二月十三日付けの『留学生支援ニュース五号』で、「阪神大震災で住居が全壊または半壊した外国人の留学生・就学生に当面の生活費として三万円をお渡しいたします」と告知されていた。三月四日現在で、一八カ国、二九九人に支給されている。同センターでは、生活費援助のほか、センターの宿泊施設を開放したり、下宿先の紹介、KDDの協力による無料国際電話の設置など、支援体制を整えている。同センターは民間団体による設立・運営。

母娘の脱出

●梁 佳恵 三十三歳

昨年九月二十八日、ヨシエさんは八百屋「宝島」を始めた。有機野菜と無添加食品をトラックに積み込んでの移動販売だ。母ひとり子ひとりの思い切った船出でもあった。自宅近くの、神戸市中央区にある倉庫で商品を積み込み、長田区から芦屋市の市境付近まで、神戸市域東西二〇キロで営業していた。相棒も得て、ようやく軌道に乗りかけたころ、地震に襲われた。

一月八日、自宅で話を聞いた。

「今週は配達が多いなあ」と、商売が順調に伸びているのがうれしくて、そんな気持ちで眠りについたんです。それが一月十六日の夜でした。

ベッドが大きく揺れて、目が覚めました。アカリ（三歳の娘）を抱え込みました。タン

スの上に並べていたぬいぐるみが一〇個以上降ってきて、ドンドンドンと音がして突き上げられたみたい。

揺れがおさまったとたん、電話が鳴ったんです。でも、真っ暗でしょう。すぐそこにあつた電気スタンドをつけようとしたけど、つかなかつた。タンスの上に懐中電灯が置いてあつたはずだと思って、手で探つたけど、ない。電話は鳴り続いているし、とにかく出なきやと必死で、アカリを抱いて、電話のところに行こうとしたんです。

——電話は、どこに？

寝ていた部屋の隣が食堂で、その向こうが玄関で、その玄関にありました。食堂に入つたら、いっぱい物が落ちているみたいだけど、何も見えないの。おそるおそる歩いてるうちに、ガラスを踏んでしまつたみたい。それでも何とか玄関まで行つて、電話に手を伸ばしたとたんに、鳴りやんじやつた。後でわかつたけど、大阪の父が心配してかけてきたんです。

「おしつこ」とアカリが言うので、トイレに連れて行きました。電話のそばに小さな懐中電灯を置いていたので、助かりました。トイレにつきあついたら、自分の血で足が滑りそうになつて。応急の絆創膏を貼りました。

それからまた電話が鳴つて、すぐ近所に住む妹のカイちゃんからでした。「ねえちゃん、

どうやつた?」と言うので、「大丈夫。きょう、アカリの幼稚園、どうしよう」と言つたら、「なに言うてんの、ねえちゃん。外の道、割れてるで」って。そう言われても、大変なことになつてるという実感がないんです。

寒いので、アカリにはパジャマの上からセーターオーバーを着せました。靴下と靴も履かせました。私も重ね着して、靴を履いて。北側の窓を開けて、玄関のドアも開けて、余震が来ても出られるようにしました。懐中電灯がもつたいないので、玄関にローソクを立てました。毎朝、写真の母を拝んでいた、そのローソクがあつたから。

明るくなるまで玄関にいようと思つていたら、アカリが「ママ、カレー、食べたい」と言つうんですよ。前の晩がカレーだつたんです。ガスが使えないなので、カレーは冷たいまま、ジャーのご飯にかけて食べさせました。それから二人で、懐中電灯と、アカリがいつも使つている小さい毛布と、母の写真を持って、玄関に座つていきました。明るくなつたら外に出ようと思つて。

そうしたら、明るくなつてすぐ、カイちゃんたち（妹夫婦）が様子を見に来てくれたんです。一緒に近くの中学校（神戸生田中学校）へ避難しようということになつて、カイちゃんのところの車で行きました。外に出てみたら、家がいっぱい倒れてた。

中学校に着いたのが、八時半ぐらいかな。友達も来ていて、あそこの家がつぶれたとか、

道が割れたとか、うちはこうだつたとか、話し合つてゐるうちに、これはただごとじやないなあと、やつとわかつてきてね。

八百屋の倉庫がどうなつてゐるかなあ、と、心配になりました。倉庫つていつても、かなり古い一軒家だから。カイちゃんのところの車で、まず家に戻つて、商売の車なんかが無事なのを確かめて、毛布四枚と、枕を三つと、クッションを二つ積んで、倉庫にまわりました。倉庫のお向かいのお好み焼屋さんがつぶれてて、倉庫の前の道をふさいでました。三階建てのマンションまでも道路に倒れてて、これはもう絶対あかんと思てんけど、大丈夫やつた。裏の家も何軒か倒れてるのに、うちの倉庫は戸がつぶれて開けっぱなしになつてたぐらいで、あとは被害なし。不思議でしよう。なんでやのつて、みんなに言われた。倉庫から、缶ジュース五、六本と、牛乳一本、パンを段ボール箱に詰められるだけ詰めて、持つて帰りました。カイちゃんは、私が八百屋をすると言つたとき、すごい反対したんやけど、「やつててよかつたね」やで。パンはおいといても腐つてしまふから、避難所で会つた友達や知り合いに配りました。

――避難生活はどうでした？

中学校の体育館が避難所になつて、四、五人の先生が柔道に使う畳とか、体操のマットなんかをさあつと敷いてくれました。ストーブもあつたし、毛布もみんなが持ち込んでま

した。着の身着のままの人もいたけど、みんなで分けあって、そんなに寒くなかった。

次の日に、避難していたその学校の中学生を集めて、当番とか決めてたみたい。その子らがトイレの掃除をしてくれて、きれいになりました。でも、すぐ汚くなるの。当番でゴミの処理もしてくれて、燃えるゴミと燃えないゴミに分けるんやけど、みんな守れへん。腹立つから、私もマジックで“燃えるゴミだけ”とか書いたけど、あかんね。それでも、ゴミ箱に入れる人はまだいいんだけど。ゴミなんか、そこらへんに置きまくつとうからね。廊下で歳とった犬がつながれてて、新聞紙を敷いてある上におしつこをもらしてた。

大勢が狭い所に一緒にやから、難しいです。ストーブをつけるかつつけないかで、一回もめました。「余震が来たら火事になるから、ストーブ消して」って言う人がいて、だけど消すとみんな寒いでしょう。いろんなこと言う人がいるんです。「メガネかける人、危ないから取りなさい」とか、「タバコは外で吸うて」とか。タバコのことは私も賛成でしたけど。それから、「外出たら、戸、閉めて」とか。出入りがものすごい激しいから、ほとんど無駄やねん。それでも出る人がいるたびに言うから、ほんま、うるさいなあと思ったり。呼び出し放送も、一日中鳴りっぱなし。次の日（十八日）になって、夜十時までと決められたけど、最初の日は夜中まで呼び出してました。

電気がなかつたでしょ、十七日の夕方になつてくると、「電気をつけてえ」と怒った

みたいに言つてる人がいて、先生は「関西電力に頼んでいるから、もう少し待つてください」と、困つてました。明かりといえばストーブぐらいだつたけど、その日の夜の九時頃かな、パッと電気がついて、みんな「おおっ」と叫んで、拍手です。テレビもついて、もう、それからはつけっぱなし。

十八日からは教室も開放されて、急にたくさんの人になりました。私たちも教室のほうに行くことになつたの。エアコンが入つていて、電気がきていたから、暖かかつた。そのとき、三階の教室から、長田が焼けているのが見えた。

——足の傷はどうなりました？

十八日の朝か昼、カイちゃんに言われて、消毒しなおしたら、光つたのが見えてね、引つぱつたら、ガラスやつてん。

（ヨシエさんは刺さつていたガラスの絵を描いてくれた。長さ二cm、幅五mmぐらいの、クサビ形をした薄いガラス片だった。左足の土踏まずに刺さつていて、たまに痛かつたが、気とめていられなかつたという）

十八日に被災者用の無料電話が避難所についたので、大阪の父に電話を入れました。「すぐ帰つてこい」と言うんです。一週間ぐらいで事態がおさまるやろから、それまで避難所に居ようと思ってたんやけど、十九日の朝になつて「これは長期戦やなあ」と考えるよ

うになりました。妹は風邪をひいたみたいやし、ひどくならないうちに大阪に帰ろうと決めたんです。

五人で車に乗りました。私とアカリ、妹夫婦、その息子のケンちゃん（二歳）。子どもたちは、「おじいちゃんの家に行ける」と喜んでました。

（午前十時すぎに出発。山手幹線を東に向かつたが、芦屋市に入る手前で大波瀬に巻き込まれた。走っていた国道二号線をはずれ、神戸市東灘区深江北町で車を乗り捨てた。午後二時三十分だった。誰も時計を持っていなかつたので、車で時刻を確認したのだという）

——車を置いて、子どもたちを連れて歩いたんですか？

車にベビーカーを二台積んでいたので。アカリとケンちゃんを乗せて、ほこりをかぶらないように毛布をかけました。大人三人はリュックを背負つて、交替でベビーカーを押しました。国道二号線を東に向かつて、歩くというより、走りました。西に向かつている人もいたけど、東へ行く人がほとんどうつた。たくさん歩いていて、なんでみんな道路の北側を歩くのかなと思つたら、南側は倒れているビルが多かつた。歩道は瓦礫でいっぱい、ベビーカーが押されへんから、歩道と車道との間を行きました。ものすごく速く、どんどん走るようにして。

ここから北へ行つたら西宮北口という所で、みんなそつちへ行つたので、道を行く人が

どつと減りました。「わたしら、どうしよう」と一瞬迷ったけど、「JRの甲子園口まで行こう。もう少し行つたら甲子園口やろ」と、まっすぐ進みました。

印象深かったのは、たぶん夫婦やと思うねんけど、目が不自由らしくて、二人とも白い杖をついていて、その二人の間に、小学校三年生か四年生ぐらいの女の子が手をつないで歩いているの。「あんたが頼りなんやから」と親が言うてるねん。胸が熱くなつて。何か手伝つてあげたらよかつたんやろうけど。

売店があつたので、ジュースを飲んで、アイスクリームを食べました。売店のおじさんが、「あんたら、どこから来たん」と聞いて、「へーえ、よう歩いたなあ、四、五時間かかつたやろ」とて言うから、「今、何時?」って尋ねたら、四時やつて。「それなら、歩き始めて一時間半や」とて言うたら、「あんたら、人の倍やなあ」とて、びっくりしてました。(ガラス片を踏んだ左足は、道程の半ばあたりから痛みだしていた。加えて、前日から生理が始まり、腰が痛くて気分もすぐれず、つらかったという。妹のカイちゃんは熱っぽくてインフルエンザのようだつたし、カイちゃんの夫は、アイスクリームを食べてから調子を崩してしまつた。それでも、四時半頃にはJR甲子園口に着いた)

甲子園口から乗つた電車はすいていました。大阪駅で環状線に乗り換えて、玉造駅に着いたら、父が車で迎えに来てくれて。家に着いたのは夜の七時半頃です。大人三人ともぐ

つたりしていて、歩き続けた足が、だるいのか痛いのかわからないような……。ご飯を出してくれたけど、一膳食べるのがやっとでしたね。

次の日（二十日）、みんな、インフルエンザにかかるしまって。私以外はみんな熱が出ました。順番に病院通いで、おじいちゃんにも移つて、妹はとくにひどかっただ。

——乗り捨てた車は、どうなりました？

二十七日に、子どもは大阪に預けたまま、家の片付けに帰つたんです。そのとき、見つけました。もうないと思ってあきらめてたから、ホッとしました。その日は日帰りで、二月一日にもやっぱり日帰りで片付けに帰りました。

——自宅に戻ったのは？

おととい（二月六日）の夜です。アカリを幼稚園に通わせたかったし、仕事の再開も考えないといけないし。

だけど、仕事の相棒がいなくなっちゃつたんです。彼女は、以前に八百屋でアルバイトしていたときからの友達で、伊丹市からわざわざ通つてくれてたんだけど……。彼女の家は、壁が落ちたぐらいの被害だつたけど、前から家主さんに「娘一家に家を建てたいから出てほしい」と言わせていたらしくて、そこへ今度の地震でしょう。敷金を全額もらって出てしまつたの。実家は下関だけど、そこには帰らずに、島根県の松江に行くそうです。

新聞か何かで、被災者向けに住居の案内があつたのを希望したみたい。だけど、松江でどうするのかわからぬ。

もうひとつ、ショックなことがあるんです。妹の夫が四月から、東京に転勤になることになつて。みんななくなつてしまふみたいで、さびしい。でも、アカリがいるから、がんばらんとあかんよね。

ヨシエさんは、避難所生活を経験し、次には大阪の父のもとへの強行軍。難民の群れのようにみんなが一方に向かって流れしていく中、破壊された町をまのあたりにした。激動の日々が続いた後で、相棒と別れ、仲良しの妹とも離れることになった。それでも、「宝島」のお客や仲間に励まされ、二月十四日のバレンタインデーから八百屋の車を再び走らせようと心に決めている。

見つめる



今にも倒れそうに傾いたビル(長田区)

保育園、「救援基地」になる

●田中英雄 五十五歳

純子 五十歳

夫の英雄さんは、牧師だが生活費を牧師給として得ることをやめ、通例の礼拝もしない。二年前、妻の純子さんと無認可保育所を始め、のち神戸市の認可を得る。夫が理事長、妻が園長。弱者、生活者の立場から行動し続けている。

住まいでもあつた教会が半壊したため、垂水区の空き家で仮住まいをしている。教会と保育園は、歩いて一〇分ほどの距離で、いずれも兵庫区にある。英雄さんが多忙のため、前半は一月三十日に英雄さんから、後半は二月二十日に純子さんから保育園で話を聞いた。

水も、食べ物も、みなありました。足りないものはなかつたです。

——何が、どれだけあつたのですか？

水は、二〇リットルのポリタンクが五個。食糧は、缶詰・小麦粉・餅が一ヶ月分。みんな保育園にありました。灯油もたっぷりありますし、ラジオも、電池もありました。教会にも、同じぐらいの備えはしてありました。

実は地震ではなく、原発事故に備えてたんです。いつ原発が事故を起こすか、わからないでしよう。それはいつも思っていることですから。いざ何か起きたときにどう身を守るかという危機管理は考えていました。

（英雄さんは、子どもたちを危険な放射能から守るため、自ら反原発運動に身を投じている）

いくら行政が安全基準を見直しても、こんな大きな地震が来たら、どんなものでもムダですよ。安全のためにと言って、コンクリートで固めて、戦車みたいな町ができたらいいややなあ。もっと、自然をおかさずに、いのちの道筋にそつたものにしてほしいなあと思います。

——教会は、どうなりました？

一階の壁はみんな崩れ落ちて、ボロボロです。あのときね、ドワーッと地震がやつて

来て、次の瞬間には二階が落ちてくるんじゃないかという恐怖があつたものだから、物が倒れるのと同時に部屋を飛び出ましたよ。それでも、タンスやら何やらいっぱい体に当たるものがあつて、あとで見たら傷だらけになつていきましたね。なんて言うのかな、僕は地震には敏感なほうなんだけど、動きが鈍くなつていて、それでもなんとか跳ねのけて飛び出ました。と同時に、いろいろなものが次々と倒れましたね。

二階に向かつて「逃げるぞ！ 出れるか！ 逃げるぞ！」って、怒鳴ったんですね。

娘が二人、二階にいましたから。でも、なかなか降りてこなくて。その間にもドアーッと揺れてるでしょう。もう気が気やなかつたですね。玄関から出ようとしたらドアがあかなかいんですよ。娘が、「父ちゃん、横のドアがあいてる」って言うてくれて、外に出られたんですよ。

——もう、すぐに飛び出たんですね。

そう。真っ暗だから、履き物も履けないで、ハダシよ。僕は下着のままやし、みんな寝間着のままよ。はじめはボーッとしてて、寒いのもわからなかつたけど、家族を脱出させて教会の前の公園に集まつたときに、「ああ、寒いなあ」と言いあつたり、足の中にガラスの破片が入つてると気づいたりしたね。逃げる途中で、ガラス踏んだなと思つたけど、気にしていられないもんね。

次の問題は、風邪ひきから家族を守らなあかんと思つてね。脱出したけど、肺炎や風邪になつたら次の行動に移れないでしよう。公園で、ダンボールとか紙の一つでも落ちてないか、探しまわりましたよ。夜明け前だから、ものすごく冷たい風でした。でも、紙もダンボールも落ちてなかつたですね。

しかたなくしてたら、道路に車が走るのを見て、通りかかった車に「毛布をください」と叫んでみたんです。一台目はあかんかつたけど、二台目の車の人が、自分の家からかな、二枚の毛布と上下一組のスウェットスーツを届けてくれたんです。

——飛び出てから、どのくらい時間が経つていました？

三〇分ぐらいかな。それからは、毛布に体を寄せあつて暖をとつていきました。まだ余震がドドオーッドドオーッと来てたでしよう。こわくて、じつとしてるしかなかつたですね。

不思議だなあと思ったのは、近所から人が飛び出して来ないんですよ。ガラスの割れる音がパリンと聞こえたり、「誰かいるう」って声がしたり。だから、「ここにいますよ」と返事したりしてたんですけど。ここらあたりは、一人住まいの家が多いんですよ。家がつぶれるかもしらん時に、家のどこかで隠れたりして震えてたんでしょうね。家の中にいたらかえつて危ないと、僕なんかは思うんですけどね。

ちょっと明るくなりかけてきた時に、冒険して靴を取りに行きました。でないと、動きがとれないからね。

（保育園は臨時の救援センターにもなっていて、ひつきりなしに電話が鳴る。英雄さんも、しばしば話を中断して電話に呼ばれる。ここからは、純子さんに話を聞いた）

——ほかにも、家から取り出したものがありますか？

夫は、「危ないから二階に上がるな」と言つてましたけれど、明るくなつてからは少し落ち着いて、服を着替えたり、毛布を出したり、服の予備やオーバーなどを取り出しました。無理して動かしたら家がつぶれそうな家具はさわらずにね。夫は足を血だらけにしてましたけれど、私は冷えないよう靴下を履いたまま寝てたせいか、ケガしなくてすんだみたいなの。

「ほかに出すものないかしら」と夫と相談して、アルバムを取つてきましたね。とにかく、「もう一度地震が来たらつぶれる」と、夫がしきりに言つていましたから、少しでも今のうちに取り出そうことになりました。電話の線がやたらに長かつたものだから、それを外まで引きずり出してね。そのときにはもう、電話が何度も鳴つて、安否を尋ねてきました。

——保育園は、どうなつていきました？

無傷というか、立派に立っていました。道具も本も書類も山のように散らばり、机が飛ばされて壊れるほどだったのに、幸い建物自体は大きな被害になつていなくて……。午前十時頃保育園に着いて、様子が落ち着くまではここで生活することにしました。そしてとりあえずは、三階の事務室から片付けを始めました。

おにぎりとペットボトルの水というように、いろいろと持つてきてくれる人が、次から次へと訪ねてくるようになつて、食べる物がいっぱいあるという状態になつたのね。炊き出しへもせなあかんかなと話していた矢先に、翌日十八日の昼すぎ、水俣（熊本）の男の人から「二ントントラックで救援物資を積んで向かいます」と電話が入つたの。それからは、東京や徳島や、別の熊本のグループからも次々と救援の知らせが入つてきたの。

（こうして、反原発運動のネットワークやその他の市民団体から次々と救援の手が集まり、保育園は救援活動の基地の一つになつていった）

——どんな救援の内容なのですか？

東京からは、「オートバイが役に立ちますか？」と尋ねられ、ちょうど障碍者の安否を尋ねてほしいという要望もすでに来ていたので、避難所をまわつてもらえそうな気がして頼みました。そしたら、十七歳から二十五歳ぐらいの青年たちが乗つたオートバイ一〇台とトラックがきました。

熊本からは、「一二〇〇人分の豚汁の用意をして行きます。鍋・釜・水・プロパンガス・コンロを持って行きます」と知らせてきました。この人たちは、青年団の有志を集めてきたということでした。

徳島からも、「一二〇〇人分の豚汁を……」ということになりました。

東京のグループは、初め一六人と知らされていたのに、二六人になっていました。知らない人たちがドッと押し寄せてきて、いつたい何が始まるのか、もう、人の数に圧倒されてしまつて……。トラックからおろされた食糧や水などで、庭は救援物資でいっぱいになるし……。もうびっくりしてね。

でも、オートバイの人たちが避難所をまわってくれて、障碍者の安否は全部わかつたの。喜ばれてね。それからは、避難所の状況や、物資は足りてるのかなど、情報収集にずいぶん活躍していました。

——保育園の仕事は、どうなつていました？

しばらくは、ここが炊き出しの基地になつていました。地震から一週間後ぐらいに、預かって欲しいと二人の子どもが来ました。水道もまだ出なかつたし、どこかへ避難している人が多くて、来れる子どもが少なかつたね。

職員も、園から近い人は被災しているし、遠い人は通勤に困つたりで難しかつたね。時

間を十時から二時までとすることで、二月一日からとりあえずの再開をしました。救援活動のほうは長期的な体制をつくるということで、教会前の公園に基地を移しました。水道も二月七日に出るようになりました。今では、保育時間を正常に近い状態に戻しています。

——子どもたちの様子は？

五人の子どもが、遠くへ避難したため退園しました。母親の八割が職を失っていますね。来れる子どもが少しずつ増えてきてね、一人えるたびに、だれそれちやんが来たと、子どもはうれしそうやね。年長組さんの子どもが、「これで分級できそうや」と言つたときは、目頭が熱くなつて。「これで日常が戻つてくる」と思つたりね……。

この保育園には約五〇人の子どもが通う。一歳から五歳までの異年齢の子どもたちからなる縦割りのクラスを編成している。ハシを上手に使える年長さんも、スプーンで少しばかり食べる一歳の赤ちゃんも、同じテーブルで、食事もおやつも一緒だ。四歳以下の子どもたちがお昼寝する午後の時間、年長組さんは楽しい「分級」が待つていて。折紙やお絵かき、お菓子作り、山登り、石けんとタオルを持ってお風呂屋さんだつて行く。嵐のように過ぎた震災後の数週間のあとで、「日常が戻つてくる」という純子さんの言葉は心に響いた。

燃える火だけを見続けて……

●山本久子（仮名） 四十六歳

JR鷹取駅（須磨区）の北側にはJR鷹取工場がある。JR工場の東側は、ゴム工場と靴工場・加工場の密集地域だ。以前から地域内の道路は、二車線のうち一車線を駐車両が一日中占拠し、実質的な交互通行と化していた。近代化されたビルは少なく、家内工業的な業態だった。震災でこの一帯は焼け野原になつた。

久子さんは、ここで靴の資材会社を経営している。会社は焼け野原の北端に残り、危うく延焼をまぬがれた。しかし重い課題が残つた。それは震災前から業界全体を揺るがせていた課題でもあつた。二月三日、芦屋市の自宅で話を聞いた。

陶器の電気スタンドが頭に落ちてきて、目が覚めたの。それまで、揺れの中でも寝てたんででしょうね。ラジオをつけたら「阪神高速が倒れている」って。夫が、「まさかあ。デマを流す奴もいるからなあ」なんて、言つてました。

私は会社が気になつて、朝八時頃、一人で出かけました。

——芦屋からだと遠いですね。よく行けましたね。

信号守つて、道も車線どおり走つていたら、着いてなかつたと思うわ。だつて、道路が陥没したり、もう通れなかつたりしていたもの。はしこい車の後について、反対車線なんかを走つて行つたの。脇道を走つたり、ね。

それでも朝のうちはまだ車は少なくて、九時頃には着きました。およそ一時間ね。

（震度七の激震地は、神戸の市街地を東西帯状に広がつてゐる。久子さんは、そのすさまじい破壊の帶の中を西に向かつて、およそ二〇km走つた）

会社の前に着いたときは、まだ、あんなには燃えていなかつたのよ。ゴム工場から火が出ていたぐらいで。消防車は来てなくて、消防団らしい人が、どこからかホースを持ってきて水をかけていました。でも、ホースが足らないの。私は、会社に入つて、とりあえず書類だけは持ち出しました。

避難所になつてゐる近くの小学校の周りまで火が来そつたので、「向こうにホース

をまわします」って言うの。「ああ、私とこが燃えてしまう」と思つても、言えないでしょ。

〈消え入るような声で、久子さんは語る。震災直後にハンドルを握つて悪路を走らせたり、火事場の前に立つその様から、いかにもたくましい“女社長”を想像しそうだが、実際はひ弱そうに見える体つきだし、語り口だ〉

ずーっと、何時間も、燃えている火だけを見続けていました。

——その場に、ずっといたのですか？

目の前でどんどん燃えていて、あたりはもう真っ赤なんんですけど、こわくなかったですしねえ。地震や火事のことではなく、火を見ながら、いろんなことが頭の中をぐるぐるめぐつていましたからね。

「工場が燃えてしまう！ 消防のホースをもつと寄せて！」と、叫ぶ人もいましたね。私は、ただただ火ばかりを見ていました。あまり長く見続けていて気分が悪くなり、公民館の避難所へ行つて休みました。

夕方四時頃に帰ろうとしたら、もうそのときは激しい渋滞でした。脇道も車でいっぱいになつていきました。夜の九時頃にやつと東灘区の本山あたりまで来たところで、小学校のそばの脇道に車を乗り捨て、三kmぐらい歩きました。家に着いたのは、十時ぐらいだった

んじやないでしようか。

——会社には、どんな影響が出ましたか？

資材を届けていた靴屋さんは二〇軒ありましたけど、今、仕事ができているのは一軒だけです。その一軒のために、電気が来ないですから暗がりで、三、四人が仕事をしています。パーツを届けているけど、赤字よね。しかたがないけど。

でもね、地震が来る前から、ここらへんの靴業界は行き詰まつていましたよ。ほとんど会社は、ファッショニ・シユーズを作っているんだけど、安いものは中国から輸入されてくるでしょう。そして、高級なものは、ヨーロッパ製品に食われようとしているでしょう。どんな靴を作つたらいいかというボリシーがないの。

靴というのは、健康を考えた機能性と、ファッショニ性とが、形状の上で両立しにくく商品なの。日本の靴作りには、靴は人間が履くものという考え方がないんですね。だからファッショニ性だけが優先されてしまう。ヨーロッパなんかだったら、靴は人間が履くものという考え方がきっちつとしているのに……。

この職種はね、^{しおり}障礙をもつ人たちが多い職場もあるし、就職差別を受ける韓国人・朝鮮人も多いんです。転職できないで困る人も多いと思うの。

〈家内工業的な規模の業界に、雇用面まで自助努力を期待するのは無理だろうし、資本力

で合理化されれば労働弱者はますます行き場がない。震災は、以前から業界が抱えていた数々の問題をあらわにさせた。



〈訪ねた久子さんの自宅は芦屋市の臨海部に面し、埋立地にある。玄関前には、白い砂山ができていた。かきわけて集めたものだ。あたりの舗装道路など、雪でも降ったかのように、白い砂がまき散らされている。地下から噴き出たものだから、噴き出た分だけ地下は空洞になっているのかもしれない〉

——これは、液状化現象ですか？

ええ、そうです。いつ陥没するかもしれないの。そしたら、家もどうなるかわかりませんね。

ケミカルシューズは神戸の地場産業として知られている。マスコミの震災報道でも、地場産業の復興をしばしば取り上げている。失った工場や機械の手当てはもつとも急がれる。それと同時に、何を作つてどう売つてゆくのかという震災以前からの課題もある。地場産業復興の掛け声だけでは、中小零細業者には厳しすぎる灾害のように思える。

大草原の小さな家

●荒木 左江子 四十歳

阪神地域は、神戸市・芦屋市・西宮市と西から東へ市域が広がり、南北の交通網は大阪湾と六甲山の自然地形に阻まれている。東西に偏向して発達した交通の中でも最も山側を走る阪急電車の沿線は、高級住宅地として知られる。夙川駅近く（西宮市寿町）に住む左江子さん一家は、昨年十二月に神戸市灘区から引っ越してきたばかり。

新築のため、建物の被害だけは軽い。周囲の人たちはみんな避難し、ライフラインは閉ざされた。ちょっとやかましい四人の男の子たちとともに、サバイバルでいこうと思つたが……。二月七日、左江子さんの自宅を訪ねた。息子たちは、中学一年・小学四年・六歳・三歳。

——引つ越ししてきたばかりだったでしょ。

ええ。去年の十二月に。夙川なんて、家が高くてまさか住めないわと思つてたんですけど、ちょうど手頃な物件があつたんです。

（夙川駅付近は、六甲山麓から穏やかな傾斜をもち、河川敷の成熟した並木は閑静な住宅地に付加価値を与えていた）

ここなら駅まで歩いて五分でしょ。将来、子どもが大きくなつたら、バス通学は高くつくし、電車だつたら安いもの。それに私、昔このへんにいたし……。父の転勤で東京にいたあと、こつちに戻つてきて、家は宝塚市だつたんですけど、西宮市内の高校に通いました。友達もまだたくさんいるし、親しみがあるんです。だから、ローンが少しぐらい高くなつてもいいかと思つて。

——ここも、揺れがかなりひどかつたんですよね。

ええ。いきなり揺れて、そのとき目が覚めたんだけど、とつさに次男の上にかぶさりました。ほとんど同時に、背中にドンドンドンと物が当たつたんです。壁が落ちてきたのかとドキッとしました。それは、本箱が三つも私たちのところに倒れてきたんです。でも、重たい本なんかは引っ越しのダンボールに入れたままだつたので、助かつたみたいです。長男と、次男と、私は本箱から抜け出したんだけど、二階に寝ていた夫と下の二人の子

どもが降りてこないの。どうしたのかと階段を上がっていましたら、声が聞こえて一安心しました。物置からいっぱい物が飛び出して、二階の部屋のドアが開かなくなっていたの。それをのけて部屋に入つたら、びっくり。みんなの寝ていた布団を取り畳むように、タンスが三つも倒れているし、ガラスの破片がいっぱいなの。タンスの上のものが全部落ちちゃつて……。でも、誰もケガしてなくて奇跡みたいだった。

外に出てみたら、近所の人が毛布をかぶっていました。「お宅、大丈夫ですか」「大丈夫です」と声のかけ合いをしましてねえ……。私、まだご近所の人をよく知りませんでしょう。知らない人とも話せてうれしかったです。

――ご近所の被害は？

私とこと東隣は新築で、倒れなかつたんですけど、そのお隣は親戚に避難されています。西隣は半壊して、お知り合いのところへ避難されます。南側のおうちには、別荘をもつていらして、そちらに行つているようなんです。でも、南側にある文化住宅は、一階が押しつぶされちゃつて、ひどいことになつていてるでしょう。だあれもないの。

みなさん避難して、野中の一軒家みたい。ドラマの『北の国から』とか、ローラ・インガルスの『大草原の小さな家』って、あるでしょう。まるでそんなふうになつちやつて。子どもたちは学校も休校で、授業も宿題もないし……。

サバイバルだと思ったの。米は三〇kgあるし、みそ漬けや梅酢漬けみたいな保存食や、干物もあるの。それで一ヵ月ぐらいはもつだろうと思つて。ガスも水も出なかつたけど、電気はすぐについたし、近くの小学校まで給水車が来ていたから。

それから、〈小声になつて〉冷凍庫におにぎりとお好み焼きがあるの。

——なんで、そんなに小さな声で話すの？

子どもたちに内緒なの。チャンスだから、親が用意してあげないで自分たちでさせようと思つて……。

——何をさせたんですか？

一食や二食、抜いたつていいでしよう。食事が足りなくとも耐えられるたくましさを育てようとも思ったの。地震があつた日は片付けばかりして、夫がいろいろ買い込んできたものを食べてましたけど、次の日は、いつになつたら「お腹がすいた」って言うかと思つて……。朝から何も食べさせないでいたら、十時半頃になつて「ごはん食べたい」と言いました。「食べたいときは、どうするの？」と私が問い合わせたら、「何か作つて」と子どもたちが言うんです。「お母さんたちは片付けで忙しいの。自分で作つたら？」と、長男のマサヨシと次男のマサタカに、米を量らせ、水をためたポリバケツからひしゃくでくんで、米をとがせました。アツアツのご飯に自家製で作つておいたふりかけをかけて食べ

ました。おいしかったですよ。

その次の日は、子どもたちがおかずを作りたいというので、スープ煮を作りました。いつ電気が止まるかわからないので、冷蔵庫の物が腐らないように生の鶏肉を使わなくっちゃと思って。玉ねぎや残り野菜の切れっぱしも入れて作りました。トマトとキュウリのサラダも作りました。お肉がたくさんあつたので、二日分もできました。

アルミの食器とフォークは、古着を切つたものでふき、各自で片付けました。水を使わないことを基本にして、なるべく汚さないとか、ゴミを出さないとかを心がけました。

——よく、それだけのことができましたね。

うちは男の子四人で、いつも騒がしいんですけど、こうなつたらいくら大きな声を出したっていいし、自由に遊びまわれるでしょう。地震で大変なときなんだけど、仕事も学校も買物も行くところがなくて、家族全員が一日中一緒にいる。“インガルス一家のような生活”を楽しむつもりだったの。

三日目の夜（十九日）、夫と話し合っているうちに、夫が、「もし、余震が来て、ここでぶつぶれても、誰も助けになんか来ないんじやないか」と言つたんです。それに、文化住宅の一階で、まだ生き埋めになつている方がいるようなウワサも聞いていたんです。夜になると静かすぎて、こわくなつてね。

小学校に避難することも考えたけど、夫が、「うちの子に静かにせえは無理や。こんな“騒音公害”を持ち込んだら迷惑かける」と言うし。夫の祖父母のいる茨木市（大阪府）に行こうかどうか、考えてたんです。夫は、「じいちゃん、ばあちゃんの寿命を縮めるでえ」って。

四日目の昼頃に、急に茨木にいくことが決まって出かける準備をしました。留守の間に余震が来てもいいように、食器を棚包したり家具を横倒しして、一応の対策をしていましたのですから、夕方になつてやつと家を出ました。全員リュックを背負つて。

——避難して、何を思いましたか？

祖父母の顔を見た途端、緊張の糸が解けましたね。サバイバルをやつてのけてるつもりでも、けつこうきつかつたんでしょうね。巣に戻った小鳥の気分でした。ここでは家が壊れる心配がない。衣食住にプラスして、暖かく受け入れてくれる祖父母がいて。心が癒されたというか……。ゆっくり寝る場所があつて、気がねしないで誰かと一緒にいられることが幸せの原点だつて、つくづく思いました。祖父母に感謝します。

一ヵ月ぐらいそこにいるつもりだつたんですけど、夫の勤務が二十六日から始まつて、二十八日には家に戻りました。九日間、お世話になつたんです。長男の中学校が三十日からで、次男の小学校が二月一日から始まりました。

家に戻つたら、見舞いにわざわざ来てくださる方がいたり、便りをいただいたら、電話をくださつたりしたおかげで、まだ連絡のとれない人たちも思い出しました。知っている人たちの顔をたくさん思い浮かべるだけで、元気がもらえるんだと知りました。人のぬくもりつて、生きる希望ですよね。今度の地震で、身に染みて実感したんです。

祖父母の住む茨木の、地震被害のない世界を、左江子さんは「ファンタジーの世界」と表現し、現実世界に戻つたとき、つまり家に帰つてきてからは、二～三日、カルチャーショックがあつたと言う。「前は、わざわしい近所づきあいのないマンション暮らしを望んでいたけど、今は、昔ながらの人の心の通う町に住んでみたくなった」と、最後に話した。

家族バラバラに別れて

● 柄尾悦子 四十一歳

兵庫区の一階建て高層マンションの一階に、六人家族で住んでいた。マンションは柱に亀裂が入り、取り壊しが決まっている。震災の翌日に行つた避難所で、確保できたスペースは毛布二枚分だけ。やがて、つてを頼り、四人の子どもは別々に預けて、親たちは仕事を再開することに……。悦子さんは市立保育所の保母。夫の文男さんは私塾を経営し、生徒には家を失った受験生もいた。

二月十八日、長田区内の避難所で話を聞いた。なお、子どもは、ヒロキ（中学一年）・コウジ（小学四年）・シング（小学二年）・リナ（五歳）。

——最初の日は、避難しなかつたんですか？

何かあつたら小学校に避難することになつてたので、地震があつたその日に行つてみようとしたんです。外に出るのが大変でした。玄関ドアがゆがんで開けられなくて、ベランダ側のサッシも動かなかつた。子どもの勉強部屋の窓が開けられたので、文男さん（夫）が面格子めんこうしのネジをはずしました。小さなドライバーしかなくてね、堅くて一ヵ所しかはずせなかつたから、面格子を押し開いて体をくぐらせるようにして廊下に出ました。

でも、小学校に向かう途中で、自転車屋さんが燃えてるし、学校の近くで火が出てるんです。学校も危ないかと思つて、マンションに戻りました。

同じマンションの人が、「ドアを蹴つたら開いた」と話すので、今度は文男さんだけが窓から中に入つて、ドアを蹴つてみたんです。それで、また、みんなでうちの中に入つたんです。だけど開いたドアはもう閉まりませんでしたね。

水と食べる物がいると思って、文男さんが、あるだけの十円玉を持つて、自動販売機に買いに行きました。

——えつ、電気が通じてましたか？

兵庫駅のあたりで、出るのがあつたんです。その自販機の近くの駄菓子屋も開いてたので、お菓子やらなんやら、買えるだけ買って……。自転車の前のカゴに、ジュースを十数本とお菓子と即席ラーメンなどをいっぱい詰め込んで……。

あの日はリナが、私のどこかをずっとさわっていましたね。脅えていた様子でした。私が離れると、早く戻ってきてねと、言ってましたね。一番上のヒロキは食欲がなくて、次のコウジとシンゴが、まあよく食べたかな。リナも、ときどきつられて食べてました。

——次の日に、やはり避難しようと……？

ええ。うちで一晩過ごしたんですけど、余震がしょっちゅうあって、家がいつぶれるかと思うと、こわくて。それで避難所の小学校へ行くことにしたんです。

朝、様子を見に行つたら、体育館はいっぱいでした。

もう一回見に行って、今度は教室をまわってみたんです。そこもいっぱいだつたけど、後ろのほうに机をいくつか集めて置いてあつたので、机を廊下に出したら場所が作れるんじゃないかなって。それで、文男さんが「ここ使ってよろしいか？」と声をかけて、机をどうけて、場所をやつと確保しました。

たつた毛布二枚分ですよ。六人が身を寄せて、そこで寝ました。

リナはよく寝ました。地震のあつた日でも、夜七時に寝て、朝の六時か七時まで寝ていましたね。それまでは九時とか十時まで寝なかつたのに。お兄ちゃんと別れるときは、おいおいと泣いたです。

——別れるつて？

小学校に来て四日目、二十一日に、リナが通っていた保育園の保母さんが訪ねてきて、「お風呂に入りにおいて」と誘われたんです。その夜は、文男さんだけ小学校に残して、子ども四人と私が保母さん宅へ行つて、泊めてもらいました。シンゴとコウジはそのまま預かってもらうことになつて。コウジは体調を崩して下痢気味だつたんです。

次の日に、私とリナとヒロキが小学校へ戻りました。リナが泣いたのは、このときでした。

シンゴとコウジはそこに五日泊まつて、二十六日に、同じ保育園の別の保母さんの家に行きました。

〈預かってもらつた最初の保母は、北区箕谷^{みのや}。次の保母は、須磨ニュータウン。どちらも、被害は少ない地域だつた〉

小学校には四人でいたんですけど、ヒロキは疲れがたまつてか、一番先にインフルエンザにかかってしまつて……。それで二十五日には、ヒロキを文男さんの実家（須磨ニュータウン内）に連れて行くことになつて、リナも一緒に引き取つてもらいました。地下鉄が復旧したので、行かれたんです。文男さんの実家は二十八日に水道が回復したので、シンゴとコウジも連れて行つて、子どもたち四人は一緒になりました。
——連れて行つたり、引き取つたり、大変だつたですね。

私もインフルエンザにかかるってね。防災指令が出ているものだから、二十五日から出勤し始めたんですけど、熱を出して二十七日から三日間、仕事を休みました。

——一家離散状態で、しかも避難生活の中で、仕事に出たんですね。

職場は保育所ですけど、まだ水が出ていなかつたので、保育はやつていませんでした。建物の被災点検とか、倉庫の片付け、事務整理ぐらいなものです。保育は二月六日から再開しましたが、来た子どもは三分の一ぐらいだつたですね。徐々に増えましたけど。

私の風邪が治つてから、リナだけを引き取つて、一人で私の実家に行きました。おばあちゃんにリナをみてもらつて、私はそこから職場に行つたんです。

〈悦子さんの実家は、自宅から自転車で通える程度の距離だつた。被災地の中でも、幸い被害は軽かつた〉

避難所は文男さん一人になりました。

——文男さんも、避難所から仕事に行つたのですか？

〈ここで、文男さんが答えた〉

私は最初、こういう状況では塾が開けなくともいいと思つていたんです。私自身が被災してそれどころではなかつたし、それに、積極的な判断でもあつたんです。というのは、私はね、自立と協同を人間の基本と考えていて、子どもたちにも塾でそのことを身につけ

てもらいたいと思つているんですよ。みんなが被災している中で、机に座つて勉強するこ
とよりも、むしろ家庭や地域の人たちに協力することが、自立と協同を学ぶいい機会だと
考えてね。

ところが、一月二十八日になつて、私学に願書を出すような時期になつて考えてみたら
ね、受験を控えてるのに、焼け出されて机も文房具もない生徒が一人いたんです。勉強す
るのに何も持つてないから、せめて筆記用具ぐらいは買ってやらなあかんな。机代わりに
塾も開けないかんのかと思つ始めたんですね。

塾は、長田交差点の角から三軒目の、古いビルに部屋を借りてやつてたんですが、その
ビル、かろうじて建つていたんですよ。午後一時から三時ぐらいの間、部屋を開けとくよ
うにしたら、五人から八人ぐらい集まりましたね。小学四年生から中学三年生までです。
ただ、余震なんかで崩れかけたものが落ちてくるとかして、町が危ないですから、生徒が
たくさん避難している小学校の中庭に集合してもらつて、私が毎日、小学校と塾の間を送
り迎えしています。

まだ、学校も開けてなくつて、開けても、せいぜい点呼を取るぐらいなものだから、そ
れで毎日、塾を開けてる意味もあるんですよ。
ただ、来られない子もいるんですよ。新開地から來るので、危ないんですよ。

（新開地は同じ兵庫区にあり、塾から東へ約二kmだが、途中に大開の大陥没を通らなければならぬ。ここは、地下鉄の「大開駅」が崩壊し、やや見下ろすほどに道路が陥没。幅五〇mほどある広い道路の陥没部分をよけて、人や車が行き来している）

その子は、やはり受験を控えてるので、お母さんが送り迎えしてたんですが、その大変さで、二、三日来たら、来られへんなということになりました。

——それにしても、親二人がそれぞれに仕事で、我が子がバラバラに別れて……。

（再び悦子さんが答えた）

なきなねえ。早く一緒に暮らしたかったです。仮設住宅は申し込んでいるけど、なかなか当たらないし、なんとか六人いられる場所はないかと、文男さんは、物件を探したり、避難所をまわつたりしてました。やつと、この避難所に場所が確保できそうやと聞いてきて、いろいろ交渉して。二月七日に、ここに来れたんです。家族六人がそろいました。これまでのことでのことで、ストレスがたまつてきてるんで、ふつうの生活が早くしたいなあと思います。

——ふつうの生活つて、具体的に言うと？

自分で食事を作って子どもたちに食べさせて、お風呂も入れて、自分の家の布団で寝る。
そういうことがしたい。

職場では、私とアルバイトの方と二人が避難所生活なんです。他の方は、家に帰ればふつうの生活で過ごせるんですね。この「しんどさ」はわからへんと思います。「がんばつてね」と言いはるけど、なんか私たちにしてみれば、そんな言わんでもええわいな、という感じで……。そこらへんの気持ちの違いみたいなもんがあつて、日々しんどいですね。被災した人々は、私を含めて、それぞれに精一杯がんばっています。がんばる。それしかないとんだからね。

悦子さんは、がんばりすぎるほどにがんばり続けている。文男さんも、毎日の塾と送迎に加えて、家族が暮らす場所を確保する大役を終えた。と同時に、インフルエンザで高熱を出した。痛む節々を押さえて、「きょうは教室を休む」と生徒たちに伝えてまわった。避難所にいる生徒には、電話連絡という便利な方法が使えないからだ。「たぶん何ヵ月かはここにいるでしょう」と二人は話す。もともとがつしりはしていたが、ヤセ型の文男さんは、心労と病みあがりのせいで、顔が半分になつたと思えるほどに、げつそりとやせていた。それでも、「僕は、病気にはかなわないけど、逆境には強いんです」と言つていた。

「無事で申し訳ない」

●池上伸代（仮名） 三十九歳

西区の丘陵地には、広大なペッドタウンが建設中だ。名付けて、西神二
ユータウン。地下鉄の起点、西神中央駅がある。大災害の伝えられた神戸市
でも、このあたりは被害が少なかつた。伸代さんは四人家族。夫、ナナ（小
学四年）、サチコ（小学六年）がいる。

被害をまぬがれた家族に、震災は何をもたらしたか？ 二月六日、ニューラ
タウン内で話を聞いた。

——ここは被害がなくて、別世界のようですね。

でも、すごく揺れたんですよ。グラッときたとき、ナナが「お母さん、どうしよう」と
私にしがみついてきて、一緒に布団にもぐっていたら、サチコが「これって、ほんとの地

震やろか」と言つている声が聞こえてきたの。私も、これがほんとの地震なんやと、なんべんも思つていましたね。揺れがおさまつたら、お父さんが「おお、えらいこつちや」と、懐中電灯をゆらゆらと照らしながら来ました。

〈お母さんと子どもたちは同室で、お父さんは隣の部屋で寝ていた〉

——壊れたものなんかはありましたか？

本棚の本が飛び出るとか、食器が十数個割れたぐらいで、被害が大変だったこと比べるとなんだか申し訳ないような気もします。

夫の実家（中央区）に電話をかけたら、「タンスと仏壇が倒れてきたけど、起きてたから助かった。今、片付けをしようところや」との話でした。うちよりは大変そうだけど、とにかくだいじょうぶなんやなあと思った。でも、ラジオでは「家が倒れている」とも言つてゐるし、どんなことになつてゐるのか、よくわからなかつた。不安だつたので子どもを小学校まで送つていつたら、一人で登校している子どももたくさんいて、先生が校門で帰してた。それぐらいのんきだつたんです、ここらへんは。

電気が昼前には通じて、テレビをつけたら、ビルや高速道路が倒れていたり、火事になつてたりで、「うそっ！　えー！」と、子どもと一緒に叫んでばかりいました。それからテレビに釘づけで、話をするのも忘れて、ただただひたすらテレビを見ていました。

——被災された実家のほうは？

次の日（十八日）に、夫が、両親の様子を見てくると言つて、車に乗つて出かけたんですけど、朝八時頃に家を出たのに、一〇kmも行かない明石駅あたりで昼すぎになつてしまつて、「どうしようもない」と帰つてきました。

夫の出かけている間に、長田にいる夫の親戚から「ちびちゃんたちだけでも、めんどうみてくれへんやろか？」と電話がかかってきました。「そんなこと言わず、みんな来てください。寝るところも、なんとかなります」と言つて電話を切りました。

その親戚とは、これまで深いつきあいはなかつたんですけど。私たちが無事で、被災した人がすぐ近くにいて、それで何もできないのはつらいし。サチコが、「どこでどうやつて寝るん？」と言つてきたので、「ゴロ寝でもいいわ。コタツで寝てもいいし」なんて。伸代さんの家は、四LDK。六畳部屋が三つ、一〇畳部屋が一つ、そして一五畳のリビング兼ダイニング・キッチン。広さは約一〇〇m²）

——ガスや水道や食物は？

ガスも水道も止まらなかつた。テレビに釘づけだつたから、買物に出てみようとも思わないで、食物は家にあるもので適当にいけると思つてたの。

十九日の朝、今度は夫と二人で出かけて、夫の実家がある中央区まで行きました。実家

は半壊で、おばあさんは、「おそろしいから」と公民館に避難してたんですよ。でも、おじいさんは「わしや、ここで死ぬからええ」と、避難をすすめても聞かないんです。夫が「頼むから避難所へ」と説得したけど、だめだったの。そのままにもしておけないので、けつぎよく、両親とも車に乗せて、私の家に来てもらつたんです。

家に帰つたのが夕方で、それから買物に出かけたら、コーパ（生協）は乾物とお菓子以外はなんにもなし。あんなの初めて見た。ほうぼうをまわつて、食パンの長いの、一斤といふのかな、それ二本買つただけ。

そこへ、前の日にちびちゃんだけでもと頼まれた長田の親戚から、「今から行つていいですか?」と電話がかかってきて、準備もないし急だつたけど、「どうぞどうぞ」となつたの。待つてたら十時ぐらいに来ました。二十代の若い夫婦と、五歳の男の子・二歳の女の子・五ヶ月の女の赤ちゃん。急に家の中に人が増えて、夫の両親と私たちの家族と親戚一家、合わせて十一人になりました。若夫婦が「風呂に入りたい」ということで、入つてもらつて、寝たのは一時ぐらいになつていきました。

「これ以後、伸代さん宅には人の出入りが多く、一番増えたときには四家族一四人が寝食を共にした。トイレはふさがり、着替えも不自由でプライバシーがなくなつた。子どもが深夜十二時まで起きていたり、赤ちゃんが夜泣きをしたりで、イライラが増すばかりに

なつた)

私は自宅で仕事をしているのだけど、締切が二十二日になつていた仕事があつてね、みんなが寝てからしたの。それで、ろくに寝てない日が続きました。

若夫婦は「家の片付けに行つてきます」と、毎日のようすに子どもを残して出かけて行くでしょう。上の子たちは走り回るし、赤ちゃんにはミルクを飲ませたりおむつを替えたりしなくちゃいけないし。赤ちゃんの物がどこにあるのか言わないまま、お母さんが「よろしくお願ひします」と出かけてしまうから、「他人の荷物を勝手にあけてもいいのかな」と思いながら、おそるおそるリュックを開いてね。ミルクはどうやつて作るのだつたのかなあと……。もう忘れちゃつたもの。

赤ちゃんのお母さんが紙おむつをところかまわず置いたままにするのも気になつてしまつたなくて、ベランダにバケツを置いてポリ袋を入れて、そこに捨ててもらうようにしました。お母さんがおむつをなかなか替えてあげないのも気になつた。「替えてもいい頃じやない」と言つても、テレビを見たまま動かない。サチコが「なんか臭いでえ」と言つて、やつと替えたり。サチコはちょうど小さい子の世話をやきたい年頃だから、「かわいい」と言いながら、赤ちゃんの世話をしてくれましたけど。

おさんどんはいつも私。若夫婦はお皿を拭くぐらいなもので、掃除もしないし。

被災した人が大変なのはわかるんです。家が壊れてショックやろうし、片付けや何かで疲れてるだろうし。家がある私のほうが我慢せなあかんかな、と思つたんだけど。

神戸が地震だといふんで、あちこちから「大丈夫?」とうちに電話がかかってくるんですけど。「大丈夫やつた」と答えるんですけど、五日目ぐらいになると、みんなが被災してゐるのにうちは無事なんだから、何かしないと申し訳ない気分になつたり。でも結局は親戚の世話だけで疲れ切つてゐんですよね。それがまた情けない。

そのうちナナが、トイレや洗面所がしょっちゅうふさがつてゐるのが不満らしくて、自分のイライラをサチコにぶつけて、サチコはそれを私に訴えてくるようになつて。夫は昼間は仕事でないし、帰つてくるとすごく疲れてて、心労が重なつてゐみたいだし。それでもうちの中がこれだけ大勢だと、ゆつくりもできないでしよう。一度なんて、赤ちゃんは夜泣きするし、お母さんは片付けから帰つてこないし、私は内職で手が放せなくて、夫が廊下で一時間も抱いてあやしてました。

家中おかしなつちゃつたのが一週間ぐらいかな? こんなことが一体いつまで続くのかなあと思つてしまひました。若夫婦はけつきよく二週間うちにいて、二月一日にちびちゃんたちを連れて高松(妻方の実家)へ行きました。

そのあと夫の両親と私たち家族だけになつたけど、私はなんだか落ち込んでしまつて。

そこへちょうど、テレビでボランティアの募集を見つけたの。ニュータウンにある体育馆で救援物資を仕分けする仕事。若夫婦が高松に行つた次の日からさつそく始めました。その時はひとの役に立ちたいというより、家から離れない気持ちのほうが強かつた。昼夜すこし体育馆の受付に行って、用紙に、名前・住所・何日頃まで働くか・働く時間帯を書いて、中に入つたらすぐに衣類の仕分けの説明がありました。「新品と新品同様は男物と女物に分けてください。中古は後で分けますから、そちらへ積み上げといしてください。どう見ても使えないものは、別にしてください。ただし、防寒着は古くても使います」って。それでさつそく仕事にかかりました。

——誰が、どこ宛てに届けた荷物ですか？

全国から、神戸市災害対策本部宛てに送られてきたものです。手紙が入つてゐるのもあつて、「がんばつてください」とか、「こんなことしかできません」とか。荷物の量はすごくて、積み上げていくと広い体育馆の壁面が見えなくなつていくくらい。こんなにたくさん的人が救援物資を送つてくれるのかと、感激して涙が出そうになりました。

一つの箱にいろいろ詰めているもありました。みかん五個・缶切り・箱入りティッシュ・化粧品のサンプル品・水のペットボトル一本・タオル……これ、一人の人が受け取るんなら、まあ、いいかもしれないけど。もし私に送る機会がまわつてきたら、たとえばタ

オルばっかり一箱にするわ。だって、仕分けで手数がかかってしまうものね。干しイモ・梅干し・漬物なんかをよく見ました。思わず絶句するようなものもありました。かかとのちびた靴とか、サビついた缶詰とか、食べかけの封を切ったお菓子とか……。

——どれぐらいの人数で、作業をしてたんですか？

最初の日の受付は、三人だけ並んでたんですけど、次の日には一〇〇人ぐらいは並んでいたと思う。そのうち、箱の数より人の数のほうが多くなってきて、仕分け前の箱をもらうのに、並ぶ列ができるぐらいなの。初めは、みんな黙々と一生懸命だつたんだけど、人が多くなつてくると、荷物の取り合いままでして欲しがるおばさんが出てきたりしてね。それまでは自分で考えて仕分けしてたのに、「ああ、それ違う。乾いた塩昆布と湿った塩昆布は分けるのよ」と言われてしまったり、果物ジュースと野菜ジュースを分けるかどうかで、おばさんどうし議論を始めたり。中学生や高校生も参加していたのに、おばさんたちのパワーがすっかり主導権を握って、若い人たちとはいなくなつてしまつたの。

私も、五日間ぐらいで行かなくなりました。夫の母も「一人にせんとつて」と言うし。余震が来たらこわいからつて。夫の両親は今もうちにいるんです。ほかにも親戚が風呂に入りたいと言つて来たりして、けつこう人の出入りも多いので、私もしばらくうちにいることになりそう……。

ライフラインが備わっていた西神ニュータウンは、被災した人たちにとつて最も近い避難先の一つだった。家や生活基盤を失って押し寄せた被災者を受け入れる側は、自分たちが無事だったことにうしろめたさを感じつつ家族の生活を侵されたという感情を拭えない。同じような光景はニュータウンのあちこちに見られただろう。さらに複数家族の同居は、子どもの育て方や生活スタイルの違いなどから、不協和音を生じさせることも多い。伸代さんにとって、この三週間は報いられないキリキリ舞いの連続だった。家を失つていなくとも、物的被害がなくても、彼女もやはり震災の影響をもろにかぶつた“被災者”なのかもしれない。

心は神戸に残したまま……

● 関田明子 三十歳

夫と、二人の息子（三歳・五歳）がいる。兵庫区の社宅で被災、その日のうちに子どもたちとともに、実家のある兵庫県加東郡社町に避難した。

一月二十七日、避難先に会いに出かけると、「自分だけがこんな所にいていいのか……」と、申し訳なさそうに話を始めた。

三月七日、電話をかけて再び様子を尋ねた。

地震のあったその日のうちに、こっちに来てしまったんです。

ここだつたら、電気もガスもあるし、水も出るし……。

神戸や西宮の友人が気になつて、電話してみたんですけど、なかなか通じなくて。みんな

な大変な思いをしてるのに、私だけがこんな所にいて、いいのかしら。

それに、生活の拠り所がなくなってしまったみたいな気がするんです。生活って、衣食住のことじゃなく、いろんな仲間とのつながりが失われたような感じ。どうしたらいいのか、あせつてます。

（明子さんは、昨年十一月に出版された『元気が出る子連れママのべんりBOOK』の編集スタッフの一人。西宮市内に連絡所をもつ子連れ情報誌編集部プレアデスによる阪神間七市のガイドブックだ。専業主婦の生活から、本作りへと飛び込んだ明子さんは、編集後記にこう記している。——夫や子どもの都合ではなく自分を自分の人生の中心に考える。私はどうしたいのか、どうなりたいのか。夢や希望は子どもの専売特許じゃない！　本づくりで実感した行動することの大切さを、これからの自分に活かしたいな——自分に言い聞かせるような、まだややだった生活ぶりのところへ、震災に襲われた。まさに生活の基盤が失われたかのように思えた）

——家はどうなったんですか？

夫の建設会社の社宅で、六軒長屋だったんですけど、すっかり傾いて。

寝ていたところにタンスが倒ってきて、大変でした。でも布団がクッションになつて、下敷きにならずに助かりました。

外に飛びだしたら、駐車場の車が三台、倒れた家に押しつぶされてましたよ。うちの車はなんとか大丈夫でした。みんなで車の中に入つて、暖房とラジオをつけました。そのうち、ライトをつけた車が集まりまして、家の下敷きになつてた単車を、男の人たちがひっぱり出しました。単車に乗つて見まわりに行つた人が、「もつとひどいことになつてゐ所がある」と言うんです。ショックでした。

少し落ち着いてから、傾いた家の中に入つて、冷蔵庫の残り物とかパンとかを取り出して、食べました。近くの兵庫中学校に避難しようということになつて、行つてみたら、もういっぱいなんです。十二時頃だったと思います。

いつたん引き返しました。社宅のそばに、もうすぐ完成する新しいマンションがあつたんですよ。そこの家主さんに、会社の若い男の人がかけあつて、急場の避難所に使わせてもらうことになりました。家財道具なんかを運びだしていただよどそのとき、実家から兄がやつて來たんです。

〈明子さんの兄は、ニュースで神戸の状態を知り、安否を確かめに八人乗りのワゴンでかけつけて來た。社宅は住めない状態になつていたし、子どももいるからというので、明子さんと二人の息子はともかくワゴンに乗り、実家へ向かうことになつた。夫は町の人たちで組織する夜警に参加するため、被災地に残つた〉

茫然としている間に、ワゴンで運ばれてしまったという感じでした。心はまだ神戸にあらのに、体だけ連れて来られたみたいな……。出発したのが午後三時ぐらいで、途中で三宮がめちゃめちゃになっているのを見て、それから山道を走り抜けて、社町に着きました。ここは、夫の建設会社の本社があるんです。空いていた社宅をあてがつてもらいました。

——お子さんたちは、どうでしたか？

五歳のコウスケは、兵庫区の保育園に行きたいって言つてました。連れて来られたのが、納得いってないみたいだった。

私も、最初は興奮していたけど、ここ的生活が落ち着いてくると、すっかり沈み込んでしまいました。一時避難のつもりで来たのに、「しまった。もう神戸に帰れない」と気づいたんです。もっと自分でどうしたいのか、考えればよかつた。あのとき即座に「子どもたちと一緒に受け」と言つた夫に、あとから不満をぶつけたり。でも、「子どものことが第一だから、しかたなかつたんや」と言わされました。

自分にはもう家がないんだと、言い聞かせるようにしてるんです。でも、涙が出て止まらない。あのときの新聞を見ていると、「あそここの町並みを自転車で走つて……」と思い出してばかりで、でもその町は壊れてしまつたし、私はこんなに離れたところにいる。こんなこと、繰り返し考えてても、しかたないんですけど……。

○

（一ヵ月あまりたつて、電話してみると、しつかりした声が聞こえた）

——その後、どうしますか？

お店で働いてるの。うちにばっかりいて考えててもしようがないから。

それからね、五年ぐらい前に、神戸で生協活動をしていたときのメモに、ここに住む人の名前があつたのを思い出したんです。「おやゆびひめ」という人形劇のサークルで活動している女性なんですが、連絡先を探して、電話してみました。震災救援のバザーと一緒にやれないとthoughtて……。

そしたら、ほかのお母さんたちを連れて、企画の打ち合せに来てくれたんです。「ああ、ここにも元気な人がいたんだ」とthoughtて……。

それまでは、料理のメニューが全然思い浮かべられなかつたのに、今は、冷蔵庫に大根とお揚げさんがあるのを見て、「お味噌汁ができる」と思うようになりましたよ。

社町と神戸市兵庫区は、直線でおよそ三〇kmの距離にある。しかし破壊された大都市神戸と、震災の爪痕のない田園風景の社町とは、距離以上の隔たりを感じさせる。その隔たりを、体だけ“運ばれてしまった”明子さん的心は、神戸に残されたまま虚ろだった。しかし、この地で職を得て、新しい出会いも得て、元気を取り戻したようだ。かつて本作りの作業を終えて「夫や子どもの都合ではなく自分を自分の人生の中心にする」と宣言した明子さんは、これからどんな人生を作っていくのだろう。

行動する



炊き出しの豚汁をつくる給食調理員たち(淡路島一宮町)

撮影:小松茂/洲本市

「自立建築」をめざして

●林 英雄 四十七歳

神戸市長田区大道通おおのみちどおりに住む建築士。頬から顎にかけてご自慢のヒゲをはやしている。がっかりした体躯で、「クマちゃん」と呼ばれている。震災で、家は半壊、周りは大火災。梁や柱の下敷きになった人を救出し、区長にかけ合って避難所を確保するなど、大活躍した。市内を三週間かけて見まわり、建築物への震災の影響を分析している。

神戸市が構想する広大な防災公園も防災道路も要らない。自分たちの手でこれから町づくりをと、「自立建築」を呼びかける。自治会役員として、町の専門家として、すでに取り組みを開始した。

寝てたらいきなり、「ドン、ドドドドドン」と地鳴りがして、下から突き上げられまし

た。そのあと「ゴーアーッ」と音がしてた。キヨンちゃん（妻）が、僕のところに飛び込んできた。次男のエイスケは、あのときのことを「ミキサーの中に入れられたバナナみたい」と言ってるよ。音もそんなふうだつたし、縦に揺れ、横に揺れ、もうむちゅくちゅだつたね。

——子どもたちは、どうしてたんですか？

僕たちは二階で、子どもは下で寝ていたので、「大丈夫か」と声をかけたら、「大丈夫、おとうさん、空が見えるわあ、赤いでえ」と言つてました。

枕元に落ちてきた本をかき分けて、メガネを見つけて、一緒にタバコとライターも見つけました。下に降りようと思つてライターで照らしたら、階段が三、四段分、下にずり落ちてる。おまけに落ちた本が重なりあつてて、足を置くとすべる。すごくヒヤッとしたね。それでもとにかく降りた。

二、三分後には、外に飛び出してたと思う。家が倒れてるし、火が出てるし、もう、すごいことになつていた。「震度八や」と思いましたね。

——震度つて、ほんとうは七までですよね。だけど八と思つた？

うんうん、今度の地震は、そんなもんじゃなかつたよ。僕は長野に住んでたときに松代群発地震にあつたし、震度五は何度も経験したけど、あの揺れはもう、全然違つた。

ハダシのまま飛び出したところへ、キヨンちゃんが、コートと、スキーで履くアフター
ブーツを出してきました。すぐ近くに、四軒長屋が二棟、八軒あつてね、お年寄りが多い
んですよ。エイスケ（中一）とエイゾウ（長男・高三）と、近所の人たちとで、重い梁と
柱を持ち上げて、お年寄りを何人も助け出しました。「死ぬうう、死ぬうう、助けてえ」
と声がしてて、梁が胸を直撃してます。助けるほうも必死で、考えるよりも体が先に
動いてました。まさに“火事場のバカチカラ”で、あとで同じものを動かすとしても、
びくともしないんですよ。

肋骨を折った人がいて、通勤中の車の人に、「市民病院へ運んでください」と頼みまし
た。いやあ、あんなときでも通勤しようとしてた人がいたんですね。会社とは逆の方向だ
ったけど、引き受けてくれました。市民病院は東へ数百mぐらいの所だったけど、そこが
また大変なことになつてました。六階の床が落ちて、五階に入院していた患者さんが閉じ
こめられてたんですよ。負傷者はたくさん運ばれてくるけど、ほとんどが玄関あたりに放
置されてたとか。軽傷の人は帰され、肋骨を折った人は五時間待たされて応急処置を受け
たそうです。今は、別の病院に入院します。

——火が出てたというのは？

長屋の前が五〇mぐらいの幅の幹線道路で、その北側が大火災でした。ガスが吹き出し

て、たまつて、爆発するように炎が吹き上げてるんですよ。どんどん延焼する。見てるだけで、手のつけようがない。熱が、カーッと伝わってきました。風はこつちと反対の西のほうへ吹いてたけど、ときどき風向きが変わるんです。そうすると、手の平ぐらいある大きな火の粉が飛んでくるんですよ。それを足で踏んだり、棒でたたいたりして、夢中で消しました。

道路の南側でも、うちのすぐそばのロウソク工場が燃えててね、溶けたロウがあふれだして、火柱が電柱みたいに立ち上がつてました。駐車場の車に火が移つたら爆発するでしょう、そうなつたら大変と思って、端っこをくぐつて、車をとにかく外に出しました。キヨンちゃんはあのときのこと、「映画みたい」と言つてます。

爆発の心配のない所に車を移動させて、外に出て、気づいたら、なんと道路は避難する車の列で、ビシーッと渋滞してゐんです。

——なんで、避難する車だとわかつたのですか？

だって、煤けて顔を黒くしてゐるし、積んでゐる荷物にもまとまりがないし、布団やら卓上スタンドやら、積めるものを急いで積んだようだつたから。あの渋滞じや、消防車も何も動けませんよ。僕は、警察官をつかまえてかみつきました。「なぜ車を止めないか。もし車に引火したら、たちまち火の海じゃないか」つて。

（火災の真っ只中を通る幹線道路が消防活動のため通行止めになつたのは、翌日の十八日のことだった）

車じやなくて、マウンテンバイク（スポーツ仕様の自転車）が役に立つたね。瓦礫のうえでも走れるしね。町内を見てまわつて、寝たきり老人も大丈夫とわかつて、次は避難所を探さんとあかん。県スポ（旧称である県立スポーツセンターの略。現在は文化体育館）はけつこう傷んでいて、これはあかんと思つて、長田区役所へ行つた。区長が全然判断できなくて、「あそこは鍵がないから無理」「蹴破るでえ」とか、押問答して、やつと、旧消防署の一階車庫を避難所としてあけてもらつた。

仮設トイレ・畳・乾電池、この三つがすぐ欲しいと、要求しましたね。数日後だけど、諫早（長崎県）なんか、さすが水害でえらいめにあつてるからわかつてて、畠三〇〇帖を送つてきたもんね。

——その他のものはそろいましたか？

毛布が来たのが、十七日の夜の九時か十時頃かな。毛布一枚ぐらいじや、寒いですよ。救援物資は、一人につきバナナが一本、おにぎり一個だけ。だけど僕たちは、キャンプ用品をひっぱり出して、家の前で隣近所の人にくき出しをしたんです。夕方の四時頃かな。こんなときにキャンプの技術が役に立つなんてね。壊れた家の木材をひっぺがして、たき

ぎにして、おにぎりと“さ湯”を作った。ぬくぬくのおにぎりは、心が落ち着くんやね。被災した近所の医者から、救急用の水のパックをもらいました。それを、さ湯にした。あとは、きのうの残りが冷蔵庫にあつたから、ハムなんかを持ち出してきたり、被災した市場の人からタラコの箱をドンともらつて、みんなで分けて。

あの日はずいぶん動いたなあ。「おとうさん、すごい」って子どもが言つてくれるんですけど、僕は「お前たち、すごかつたなあ」と言つてやりました。子どもは、大人たちのしていることを見て、自分の役割を見つけ、できることをしようとするんですね。子どもたち、生き生きしてますよ。

次の日に、僕の仕事場の建築事務所（中央区再度筋町）を見に行つた。直線距離で四、五kmだけど、家の周りとあんまり景色が違うんで、びっくりしましたよ。破壊されないでちゃんと建つてる家やビルがけつこうあるのが、信じられない。焼けてもいないし。事務所も無事だつた。水道も電気も電話も使えた。ガスは前から使つてなかつたし。事務所を仮の住まいに決めて、一家で移りました。家は“半壊”だけど、とてもじゃないけど住めないよ。その夜、事務所のテレビで初めて見たんだけど、「あの火の中にいたんだね」つてみんなで話して、あらためてショックだつたね……。

（クマちゃんは、大道通自治会の役員でもあつた。自治会は、立ち退き問題を抱えていた。

阪神高速道路の延伸地域に入っていたのだ。密集地のため、火事や悪い日照など問題を抱えていたが、ここに住む人たちの地域への愛着は強く、交渉は互いに譲らず難題となつていた。そこへ、地震が襲ってきた。対象地域のほとんどが、全壊・半壊、さらに焼失した

前から僕は、「自分らの町づくりをしよう」って提案し続けていたんだけど、この地震で、僕の意見に協力しようという気運が一気に出てきてね。

“自立建築”というのを考えているの。自立建築が集まって、自立した町内会ができる、自立町内会が集まって、自立した町ができる。神戸市が言うような防災広場も防災道路も要らん。防災広場でなく、子ども広場で十分。消防車の通れる道は確保する。緑道にしておいて、花壇やなんかの杭は消防車が蹴破つて入つてくれればいい。住居は五、六階建てぐらいまでで、高層マンションみたいに大きい建物にしない。路地裏のよいところも活かしたい。“中層化した下町”ということかな。建物には各棟ごとに貯水槽をつけ、各戸に簡易スプリンクラーをつけます。食糧は、各戸の冷蔵庫にある三日分ぐらいの量で十分。電気は、最小限の電力のために、太陽電池でいいと思う。災害にあっても、三日間は命が保てるようにする。建物は下層階が仕事場や店舗など生産性のあるところで、上層を住宅にする。職住一致か近接が望ましいから。

（クマちゃんは、一気にビジョンを語った。自分たち住民の側にビジョンがあれば、役所の押しつけのような防災計画が要らなくなる。それどころか、その矛盾もあらわになる）

大規模集積地を作つて、非常食を備蓄するなんて言つても、いつたい何万人の食糧を確保しておくる。食糧の保存期限が過ぎたとき、どう処分するの。個人とか小さい集団の備蓄なら、ムダがないでしよう。防災のために公園や道路を広くとつたら、それだけボクたちの住むところが狭くなっちゃう。高層化したウサギ小屋になっちゃうよ。そんなものじやなく、世代をこえて受け継いでいく住宅を作りたい。

今度の震災だつて、役所の広報が全然役に立つてない。避難所に貼つてあるけど、そこに行かないわからへんでしょう。僕らは、電柱にメモ帳をぶら下げて、誰がどこにいるのかを書き、連絡をとりあつてている。僕もこうやって書いてるもん。

（そう言つて、大判の手帳を見せてくれた。自分たちの町づくりのため、すでにクマちゃんたちは動きだしている）

今、空き地を貸してもらつて、三〇坪、二階建てで上下六〇坪の“連絡場所”を作ろうとしているところ。もう整地はすんだ。そこにプレハブを建てて、情報を集約する場所にする。救援物資の仕分けとか、自治会の会議なんかができるでしよう。拠り所がないと、みんな散つてしまふからね。

——ところで、地震に強い住宅というのは？

大きな地震が、今度みたいに直下で襲つてきたら、絶対大丈夫なんていう建物はありません。逃げ出せる程度に壊れないように、しっかりと建てておください。木造と瓦屋根でも、造りをしっかりしておきさえすれば、その程度の建物は建てられます。コンクリートが丈夫だといっても、建築費が高いんですよ。庶民の誰が建てられますか？ ただ、耐火性を考えると、やはり鉄骨とかコンクリートの共同住宅になるかなあ？ いずれにしても、自分たちで考えていただきたいね。

※クマちゃんこと林英雄さんは、地震発生からおよそ三週間、神戸市内を観察し、木造・鉄骨・コンクリートの三種類の建築への震災の影響を分析した。そして、防災への指針を示す次のメモを提供してくれた。

〈林メモ〉

◎木造瓦屋根でも、基礎をしっかりと作り、筋交を入れた壁をバランスよく入れた建物は、傷みが軽いようだ。また、被害を受けた木造住宅の中でも、多少傾いたり歪んだ程度の家は、修理がしやすいのではと思う。壊れているのは、下町のいわゆる文化住宅とかゲタバキ住宅といわれているもので、昭和

四十年（一九六五年）前後から建てられたものが多いと思われる。

◎鉄骨は、燃えないかぎり、けつこう強かつたと判断する。内部発火を防げば、かなりの損傷が救われたのではないかと思う。コンクリートに比べて全體荷重が軽いことが、よい結果をもたらしているものと考えられる。木造と同じく、鉄骨も修理しやすい。

◎RC—コンクリートは、基礎をしつかり設計し、耐力壁をバランスよく入っていても、六階以上の高層ビルでは、中間階が破壊されている。五階以下の中層コンクリート建築ではこうした破壊はないが、一階をロビー・駐車場などのために柱だけの開放空間（ピロティ）にしたもののが、破壊されている。これは、今回の地震の大きな特徴で、最初の縦揺れの突き上げで、基礎と柱脚が破断し、次の落下で圧壊したあと、横揺れで建物が傾き、破壊につながったのではないかと思われる。つまり、中層建築でピロティがなく、基礎がしつかりし、耐力壁をバランスよくしていれば、ほとんど被害はなかつたものと見受けられた。ただし、液状化については、また別の検討項目である。コンクリート建築は、少々のクラック（ヒビ割れ）でも、なかなか修理しにくく、解体費用も莫大であろう。効率化・合理化一辺倒の風潮で、余裕を失った設計のツケがまわってきたことも事実はある。

大地震ショックで、誰しもが、地震に強い町や住宅を願う。しかし、その

思いが、コンクリートに固められた無機質な町を作り出しあはしないかと、私は危惧している。たとえばのことだが、どんな地震が来ても大丈夫な町づくりをしていながら、一〇〇年・二〇〇年の先まで大地震が来なかつた場合、防災に費やした莫大な出費は報いられるのだろうかと思う。今回の震災では、木造家屋が倒壊したり、瓦屋根が落ちたケースが非常に多かつたため、木造は危ないという不安が強くなつてゐる。しかし、気候と風土にあつた木造建築と瓦屋根を、より強固にする考え方があつてもよいのではないか。クマちゃんのような専門知識をもつた人たちが自治会ごとに活躍すれば、快適で安全な住みやすい町が、市民の知恵でできるのではないか。クマちゃんたちのビジョンを一例として、一刻も早く、被災した人たちに知らせたい。でないと、役所の図式でコトが運ばれていきそな勢いだ。

淡路を担うのは……

●小松 茂 四十三歳

消費者運動の活動家でもあり、淡路の市民運動のリーダー。一九八一年、京都から淡路島の一宮町に移り住んだ。その後二年間、東京で日本消費者連盟の事務局員を務め、帰島してからは洲本市に居を移し、同時に、食料品店「夢ひろば」を開く。洲本市長の私的諮問機関「洲本市のゴミを考える会」副会長も務めた。全国各地で学校給食について講演や改善要求運動を行なっているほか、食べ物やゴミ問題についても講演してまわっている。“自立した生活者”をめざすグループ「生活ネット」を一九九三年に組織し、島内全域で活動している。

阪神・淡路大震災が「阪神大震災」と呼び慣らされ、置き去りにされた不安を抱く「淡路」にとつての復興とは？ 二月一日、夢ひろばで話を聞いた。

地震のあつた十七日は、「夢ひろば」で扱っている牛乳を配達する日やつたんですよ。いつもより船が一便早く、午前四時二十分頃には、志筑港で荷受けをすませて、配達を始めていました。津名町から一宮町とまわって、地震の起きた直前は、洲本市南部の小路谷のマンションに入ろうとしていました。

洲本は、そのとき雨が降っていたんですよ。

——えつ、雨が！ 阪神間は降つてなかつたんですけどね。

細かい雨ですけど、電線や木の枝に雨がくつついてたんですね。「ドン！」と音がしたかと思うと、「ザーッ」とその雨が落ちてきて……。「大雨か」と、一瞬思いました。それで、配達先のマンションに駆け込んだら、照明が消えて揺れが来たんですね。今度は、地震やと思って、それも大きくグラッと来たから、県道の真ん中へ飛んで出て、うずくまつてじーっとしてました。「ゴーーーッ」という地鳴りが聞こえるんですよ。

すごかつたけど、こわなかつたですね。高校生の頃から天文か地球物理を勉強したいと思つてて、地震に関心があつたでしよう。あの二日前、十五日には、子どもたちに、「地震はここだつて来るから用心せなあかんねんで」と、言うてた矢先ですよ。

運びかけた牛乳、どうしたと思ひます？ ここまで来て届けないのも、もつたいないと思つてね。配達する先は七階だつたんですよ。余震でエレベーターが止まつたら困るから、

階段を一気にかけあがつてね、ドアのところに牛乳（五kg）をドンと置いて、今度は階段を急いで降りました。それから車に飛び込んで店に向かつたんです。津波が来るかもしけないと思って、あせりましたね。

——店のほうは、どうなつていました？

店に帰る途中で、瓦を落とした家があるし、これはタダゴトやないと思つてました。店のシャッターを開けたら、足元がヌルッとするんです。電気をつけてみたら、棚の一升ビンが全部割れていきました。

——えつ、電気は、ついていたのですか？

そうですね、一瞬消えましたけど、すぐつきました。店の片付けはできそくにないと思い、家へ向かいました。

家に着くと、戸が開かない。窓が開けられたのでそこから入つたら、タンスやらもう何もかもいっぱい倒れていました。でも、小学六年の娘が、足の裏を少し切つた程度ですみました。

「震源地は淡路島。洲本、震度六」と報道されたものだから、電話が次から次へとかかってきてね。でも、七時をすぎると、電話が通じにくくなつてピタッと止まつてしましました。最初は「どうしてる？」という電話ばっかりでしたけど、翌日には、「救援しようか」

と電話が入つてきましたね。広島県神辺町の学校給食の調理員たちで「炊き出しする用意がある」というんですよ。「それだったら、洲本の調理員たちにも声をかけてみますから一緒にやりましょう」ということになりました。僕とこが連絡先になつている「生活ネット」も参加することにしました。

——それはいつ実行されましたか？

二十八日です。神辺町からは、女性九人・男性五人の一四人が来ました。食材料から水から、カマドから薪から、とにかく一切合切持つてきまして、こちら側には何も負担をかけないという体制で来たんですね。給食で使う大きな鍋で、豚汁を六〇〇食作りました。一宮町の避難所になつてている老人福祉センターを基地にして、町内六カ所の避難所と、東浦町の避難所になつている老人福祉センターに届けました。

——炊き出しには“豚汁”が多いですね。他の救援基地でも豚汁と聞きました。

やはり、蛋白質があつて、野菜がとれて、あつたかくて、手軽に作れて、ということでしょうね。僕たち洲本側は、調理員が一四人、「生活ネット」から一人で臨みました。大根とお揚げさんを炊いたものを作りました。それにしても、給食調理員の手際のよさには感心しましたね。大きな鍋に醤油を一升ビンでドドドッと入れて、味見をして、ちよつと濃いかなと言えば、ハイ、ひしゃくで水を二杯という具合なんです。さすがプロだなと

思いましたね。

僕はずつと、学校給食の問題を追い続けているでしょう。学校現場では、給食は民間でもパートでもいいと言われている状態なんです。こういう緊急事態でこそ給食調理員が活躍して、その役割の必要性を知つてほしいという気持ちになりましたね。

（神戸市西区のある小学校の例を示す。神戸市内は全校で給食が停止になっていたため、その小学校では給食調理員を各小学校の避難所に出向かせたという。行く先是、困難な通勤事情を考慮して調理員自身の判断で決め、どこへ行くかだけを校長に知らせればよいといふ措置が実行されていた）

—— 炊き出しの六〇〇食は十分な量だったのですか？

十分だったと思います。多めに作つたということもありましたが、回収にまわつたときは余つてました。神辺町の調理員の人たちは、また救援に来るそうです。四国や、そのほかあちこちから救援グループが入つてきます。

でも、僕は、なぜ洲本市が淡路の救援のリーダーシップをとれないのかと、イライラしていますね。洲本は淡路一市一〇町の中核で、県の出先機関もあります。ふだんは何を決めるにしても、偉そうにしてるんですよ。

洲本市内に限つては、見た目にはたしかに被害は少ないけど、周辺の町は大変なことに

なっているんです。淡路全体で、死者が五七人、家屋の倒壊・焼失が七〇〇〇軒以上もある。こんなときに、洲本の市議会議長がゴルフコンペに行つてゐるんです。一月十九日ですよ……。洲本が先頭に立つて復興を考えて当たり前なのに、その復興の図が描けずにいるんです。

——淡路の主産業って、何なんですか？

観光・農業・漁業・瓦・線香、ということかな。

淡路は、阪神間と比べて大きな会社がないでしょう。会社がつぶれて仕事がなくなつて路頭に迷うということは少ないでしょうね。農業や漁業の場合は、家さえあれば仕事はできそうですよね。むしろ、生産物を消費してくれていた阪神間がやられていくことのほうに影響は大きいように思いますね。それと、ため池に亀裂がずいぶん入つているようですから、夏場に雨が少ないと被害が出るかもしれませんね。

それにしても、北淡町の消防団の若い人たちには、よくがんばったですね。地震直後の救出のときに、どこの家ではどこの部屋に人が寝ていてかということまで、お互いに知つてるのでよ。ここは東側の部屋に老夫婦がいるとか。それで助けられた人も多いようですよ。こういう地域社会のつながりが、復興への新しい動きになつていけばいいのですけどね……。

若いボランティアの人たちも、自主的によく動いていますね。ボランティア協会や社会福祉協議会や婦人会の人たちもがんばっています。そうした組織以外にも、たとえば三十代前半の女性も、自発的に動いています。子育て真っ最中で忙しい年代ですけど、避難所に大きなポリ袋を配って、「洗濯物を入れてください」と言って、それを持って帰つて洗濯して、また届けるとかね。高校生あたりもけつこう参加してますね。

過疎で、二十代の青年がないんです。そこを補つているのが、徳島大学の学生とか、ボランティアの活躍です。

——復興については、どんなふうに考えているのですか？

今までは、狭い道を広くしようとしても予算がつかなかつたんですね。再開発もしにくかつた。ですから、震災復興で、こうしたことができるんではないかと、行政は思つていいんじゃないでしょうか。

住民の間では、「阪神大震災」の名前に、「淡路」が入つてないと、不満が多いです。復興から取り残されるんじゃないかと思つて……。

自分たちが、それぞれの町を、あるいは自分たちの暮らしを、どんなふうに作りたいんかと、そこを出発点にすべきですね。行政に何かをしてほしいと頼つてもダメなんだとうところを、もう一回みんなが再確認することがだいじだと思うんです。オカミが、新し

い町はこういうふうにして、ここに広い道路を作つて……と決めて、それで私たちの暮らしがよくなるものではないんですね。行政の“再開発”はあくまで外枠であつて、その中身を作るのは、被災していようといまいと、そこで生きている住民一人一人だと思うんです。そのことを、たぶん若いボランティアの学生たちはある程度感じたと思います。国なんて頼りにならん、行政なんて頼りにならん、と。それは今回、すごくいい教訓になつたと思うんですね。

しかし一方で、震災前からですが、淡路の若い働き手はどんどん都会へ出て行つて、帰つてくる見込みがないんです。いきおいお年寄りが多くなりますから、国や行政に頼る仕組みができるがつてしまつていています。今回ひどくやられたのが、富島・室津・尾崎・群家の四カ所ですが、六十五歳以上の人口が二五%にも達するかという地域です。子どもは阪神間などに出て行つてしまつていて、被災した所をサラ地に戻すことはしても、もう一度建て直す元気が出るかどうか。旅館をやめるとか、商売をやめるとか、そんな話をもう聞きましたね。余生を老人ホームで過ごすとか。

町興し・村興しを考えんといかんのですが……。

だけど、淡路の高校生とか今回ボランティアで動いた人たちは、気づいたり感じたりしたことがたくさんあると思いますよ。今まで、若い人たちが自主的にこんなに活躍する

なんてなかつたことですから。それが、町づくりの次のステップにつながるかどうか、そこを考えていくのが自分の課題かなと思っています。

淡路は震源地でもあり、実際、震災の被害は大きい。取材をするまでは、阪神間でも淡路でも、震災のもたらした被害は同じだと考えていたが、それは間違っていたようだ。阪神間では、産業基盤が根底から破壊されたため、本格的な復興は数年を要するだろう。一方で、淡路では、瓦や線香の製造業や農漁業の設備などで被害はあつたが、再開はできそうだ。道路・交通網も健在だから、被災者の住宅対策を急げば、自力復興に希望が見える。にもかかわらず、明るさがない。それは、震災以前から続いている町興し、村興しの問題解決の糸口が見いだせないからのようだ。

淡路にとつての震災は、北海道奥尻をはじめとする農漁村に被害をもたらした災害と共通項をもつのだろう。そこでは、災害の恐怖をその発生時には報道されたが、年月とともに、災害が残したもののは忘れられていった。地域の行政がいくらかの対策を講じ、復旧・復興の形をなせば、住民たちもそのまま流れに身をまかせるしかなかつたのだろう。

ただ、今回の震災は農漁村の淡路だけでなく、百万都市の神戸や阪神間にも広がっている。それだけに、淡路の「災害後」は、今後も報道され続ける

だろう。ボランティアをはじめとする若い力も、淡路にやつて来たし、その動きが島内にも生まれた。今後を見守りたい。

震災の名称について

「兵庫県南部地震が、いつのまにか阪神大震災と名前が変わってしまったでしょ」と、小松さんは言い、置き去りにされた淡路の住民感情を訴えた。このあたりの違いを、あまり意識せずに呼びならわしている人は多いと思う。他の地域に住む人は、なおさらだろう。地名の感覚については、当地でも個人差があるが、およその理解の助けとして説明しておく。まずは、「地震」と「震災」の違いから。

「地震」——一月十七日午前五時四十六分に発生した地震は、規模をあらわすマグニチュードが七・二。この地震につけられた名称が「平成七年兵庫県南部地震」。気象庁が同日、命名。

「震災」——地震によって引き起こされた災害を震災といい、「兵庫県南部地震」による震災の名称としては、「阪神大震災」と「阪神・淡路大震災」の二つが混用されている。まず毎日新聞が、地震発生の翌日に「阪神大震災」と見出しをつけ、NHKや朝日新聞も一月二十三日から同じ名称を使用した。これがマスコミを中心に定着した感がある。一方、二月十四日、政府

は「阪神・淡路大震災」と閣議決定し、政府では後者が使われている。

「阪神間」——地元では普通、地域の名称として「阪神」ではなく、「阪神間」を使う。阪神電車とか、阪神地域と言うことはあっても、場所をさして“阪神の店”とは言わない。“神戸の店”と対照させるなら“阪神間の店”になる。阪神間とは文字通り大阪と神戸の間で、東西に並んだ尼崎・西宮・芦屋をさすことが多い。両端の大坂・神戸を阪神間に含めるかどうかは、人によつて違うようだ。北部の伊丹・宝塚を含むこともある。

「淡路」——阿波（徳島）に通ずる路という意味で、四国の文化圏とも近い。淡路と阪神間は、地域感覚からも歴史的にも明らかに差異がある。震災の名稱としては、激震地の淡路の地名が入った「阪神・淡路大震災」のほうが妥当と思う。

なお、筆者の住む「明石」は、阪神間に位置しない。もとより淡路でもない。しかしながら、地震による被害は大きく、今もなお避難生活を続いている人が多いことを付け加えておきたい。

「町の地質屋さん」のレポート

● 背はら本もと 格いなる 四十五歳

ハシモト・イタルさんは、神戸の市立中学校で理科を教えていた。偶然にも地震の四日前、「神戸で大地震は起るのか?」という授業をしていた。震災後は、すぐさま徒步・自転車・バイクで被災地を駆けめぐり、記録と検討を続けていた。

北海道大学理学部で地質学を専攻、一九七四年卒業。のち東京で地質のコンサルタント会社に勤め、地質調査にかかわった。やがて人間相手の仕事がしたいと、教師生活に入る。同時に、「六甲山はどうしてできたか」などをテーマに、十数年間、神戸の地質や断層を研究。一九八七年には、神戸市西区でアカシゾウの化石を発見、「神戸の地層を読む」の著書もある。

自ら「町の地質屋さん」を名乗る彼の動きを知りたいと思い、震災一ヶ月後にあたる二月十七日、自宅を訪ねた。

彼は今回の震災で、今までの地震に対するとらえ方や考え方の甘さを痛感

したと言う。震災八日目の夜に一気にまとめた記録の中で、「地震とは破壊なのだ」と表現している。また彼は、「神戸にはこれから約一〇〇〇年間は破壊的な地震は来ない」と断言した。神戸付近での地下のエネルギーは解放された。だから次の活動は一〇〇〇年以上先のことになる。備えるべきは、もっとひんぱんに神戸を襲っている洪水だ——中学校の授業でも、生徒たちにそう話している。

ハシモトさんは今も、校庭に現われた地割れや小さな断層を追いかける。無数にできた断層と、それらの及ぼした被害を徹底的に明らかにすることが、他の地域で予想される直下型地震の対策に役立つはずだから。調査を終えれば、彼の報告が出るだろう。潤沢な資金に支えられた研究者たちも災害の実態や地震のメカニズムの解明を進めているが、「町の地質屋さん」の奮闘に、私は期待をしている。

彼の記録から抜粋して紹介させてもらうことにした。

■破壊が走つた！

神戸市立櫛谷中学校教諭（西区在住） 脇本 格

言葉に言い表わせないことがある。一月十七日の早朝に神戸を襲つた大地震は、まさにそれだった。

決してシユミレーションなどではない。立ち並ぶビルが倒れ、傾いていた。窓ガラスは吹き飛び、七階建てのビルが六階建てになつていた。家は瓦礫と化していた。単に壊れていたのではない。こつぱみじんに粉碎されていた。線路が曲がり、道路が陥没し、地面に亀裂ができていた。高速道路の橋脚が折れ、港の岸壁が壊れ、電柱が折れていた。

同時に、無残にも多くの人の命と財産、夢と人生が破壊された。

今まで私は、地震とは地下の岩石が破壊されてその振動が地表に伝わってくることだと子どもたちに教えていた。違う！ そうではない。地震とは破壊なのだ。大地の巨大なエネルギーがすべてを破壊していく。その破壊が走るのだ。

■大魔神が家を揺さぶつた

十数個の食器が割れ本棚が倒れただけの我が家ですら、ベッドから振り落とされた息子

は地震の直後に「大魔神が家を持ち上げて揺さぶっているのかと思った」と言つた。妻はただただ叫んでいた。娘は布団をかぶって声も出せなかつた。それまでは地震の最中に平然と揺れを観察していた私も、今回は違つていた。ただ「これはすごい!」「うそだ!」「そんなはずはない!」と思うだけで声も出せずベッドにしがみついていた。

その時どんな揺れがあつたのか。多くの人は「わけがわからなかつた」と言う。

いくつかの地域の人から集めた情報を紹介しよう。

- ① 「ゴオーーー」という音が遠くで聞こえていた。次の瞬間、ドーンという音と衝撃と共に家がつぶれて埋められてしまった。そのあと激しく揺さぶられて屋根の土が次から次に落ちてきて息もできなくなつた」（神戸市長田区）
- ② 「ドンドンドンと三回の突き上げがあつて、体が浮いた。あらゆる方向から物が飛んできた」（神戸市長田区）
- ③ 「地震が起こる二分ほど前から遠くでゴオーーー」という音が聞こえてきた。そして持ち上げられたと思つたらドンドンドンとすごい音がした。あとはかき混ぜるように揺られてわからなかつた」（淡路島北淡町）
- ④ 「ドンドンドン……とまるで花火のような音がして、大きな揺れがきてそれがやんでからもドンドンいっていた」（淡路島北淡町）

⑤「家ごと機械じかけの鉄板の上に乗せられて、激しく上下に揺さぶられた感じがした」
(神戸市須磨区)

⑥「初めにドンと下から突き上げられて体が浮いたような感じがした。その後はいろんな方向に揺さぶられた」(神戸市西区)

⑦「ドーンという音と共にくつきりとラインの見える鈍い光が明石方向に見えた」(神戸市北区・新聞配達中)

⑧「地震が来る前にゴォーと大風が吹いているみたいな音がして、続いてドオーンとすごい音と共にすごい力で突き上げられた」(淡路島由良町)

⑨「ドンドンドン、ガンガンガンでグルグルグル、上下に動いた後はかき混ぜる感じに動いた」(明石市)

⑩「嵐の海で船の底にいてひどく揺られた感じでグニヤグニヤになつたように思つた」

(明石市)

⑪「すごい音がして、急に船が揺さぶられ前に進まなくなつた」(淡路島——宮町・漁船の上で)

淡路島や長田区での家屋の崩壊は、初めの「ドン」あるいは「ドンドンドン」という音と共に生じた激しい上下動のたたきつけの瞬間に起こつたのだ。

「ドンで飛び上がったら、次の瞬間には屋根がなくて空が見えていた」（北淡町）

「二階に寝ていて揺れがおさまって、窓を開けたら道路がそこにあった」（兵庫区）
などの話も、崩壊が初めの瞬間に起こったことを物語っている。

初めの上下動の程度は地域によってかなり違っている。しかしそ後の「あらゆる方向の揺れ」「かき混ぜられる揺れ」はどの地域でもあまり変わらなかつたのではないかと思われる。

今まで私は「地震の揺れは、はじめに初期微動がカタカタカタとやつて来て、続いて主要動がグラグラグラとやつて来る」と教えていた。しかし、そんな初期微動はどこにもなかつた。震源があまりに近いため、それに気づくまもなく激しい揺れがやつて来たのだ。

我が家では、机の上の不安定なランプも、たつた一〇cm幅のカウンターに置かれたワイングラスも倒れていないのに、冷蔵庫やピアノが十数cm動いていた。慣性の大きさの違いがなせるわざである。

被害が甚大でなかつた地域でも、ブロック塀や石垣が崩れたり、墓石が飛び散つたりしている風景は至る所に見られる。

神戸市は震度六、地域によつては震度七とされたが、「震度六＝烈震」とは「家屋の倒壊は三〇%以下で山崩れが起き地割れを生じ多くの人は立つていられない程度」とある。

しかし我が家で経験した揺れは「誰も立つておれない揺れ」であった。どんなに立つていようとしても絶対、立つてなんかおれなかつた。この地域では家屋の倒壊はなかつたし、山崩れ・地割れ断層はなかつたが、揺れの激しさは間違ひなく震度六では言い表わせないものだつた。加速度計は我が家付近で四八〇ガルを示していたという。震度七は四〇〇ガル以上とされている。私の感じた揺れは「震度七II激震」ではないか。ならば六〇〇八〇〇ガルを記録したという、あの大破壊が起こつた神戸市の中心部は爆震（暴震）とでも言うしかない。

■起こるべくして起こつた大地震

ほとんど一〇〇%の神戸市民は、神戸では地震は起こらないと思つていた。地震の研究者たちは、決してそんなことは言つていなかつた。大地震の可能性は指摘していたのである。問題は、それが市民にも行政にもまともに受けとめられていなかつたことにある。

私は「六甲山地はどのようにできてきたか」ということを主なテーマに、地層と断層を追いかけてきた一人である。六甲山は二〇〇万年前にはなかつた。五〇万年前から急激に上昇しておよそ一〇〇〇mの高さになつた山である。六甲山地の形成は、大地震を数限りなく起こしながら動いてきた断層の歴史であつたことはまぎれもない事実なのだ。実は日本列島のほとんどの山はこうしてできている。この造山運動に「六甲変動」と名がつけら

れるほど、六甲山地はよく研究されている。六甲山を高くした断層のよう、一七〇万年前以降に活動し、今後も活動する可能性のある断層を「活断層」と呼ぶが、日本中は活断層だらけといつてもよい。

偶然にも、大地震の四日前に「神戸で大地震は起るのか?」という授業をしていた。日本は世界の地震の一〇分の一が起こっている最大の地震地帯である。そして神戸（六甲山地）は断層の巣ともいえる地域である。したがって「神戸で大地震は必ず起る」という結論を生徒に伝えたのだった。「それが起るのは明日かもしれないし、一〇〇〇年後かもしれない」と付け加えた。

しかし本音としては自分が生きているうちに起るなどとは考えていなかつた。また、こんなにも激しい衝撃と破壊が起ることは考えていなかつた。

神戸市は一九七二～三年に専門家に調査委託をして『神戸と地震』という報告書を作成している。その中で次のような指摘がある。

「六甲周辺の地震活動が低い。（中略）見かけ上の不活発さは、将来大地震が発生するためのエネルギーの蓄積期を意味しているのか、防災・地震予知の問題を合わせて、さらに詳しい研究がのぞまれる」

通産省地質調査所発行の『神戸地域の地質』（一九八三年）でも、こう書かれていた。

「活断層の数多くある神戸市周辺においても今後大地震が発生する可能性は十分あるといわなければならない。（中略）活断層群の実在するこの地域では将来都市直下型の大地震が発生する可能性があり、その時には断層付近で亀裂・変位が起り、壊滅的な被害を受ける可能性は高い」

一九九五年・阪神大震災は、一〇〇〇年以上もの「蓄積期」を経て大地のエネルギーが一気に解放された破壊だった。

■破壊の帶が続く

今回の地震の震源は淡路島の北の海底二〇kmと言われている。はたしてそれは正しいのだろうか。神戸市内の被害の甚大地域を駆けめぐらながらそう思った。なぜ震源に一番近い明石市と淡路の岩屋で被害が少ないのであるのか。震源から遠く離れた東灘や西宮、伊丹で想像を絶する破壊が起こっているのか。そんな疑問をもつて私は、住んでいる西区から明石、垂水をへて須磨、板宿まで海岸にそって自転車で走つてみた。（図1）

明石から垂水までは、まれに倒れかけた家もあるが多くはせいぜい瓦が落ちていているだけである。垂水の海神社では石柱は倒れていたが灯籠さえ無事であった。

塩屋では倒壊した家が急に増えるが、山側の急傾斜地はあまり被害がない。
須磨に入ると町の様相は一変する。壊滅である。累々と倒壊家屋が連なっている。ここ

図1 自転車で走ったルート

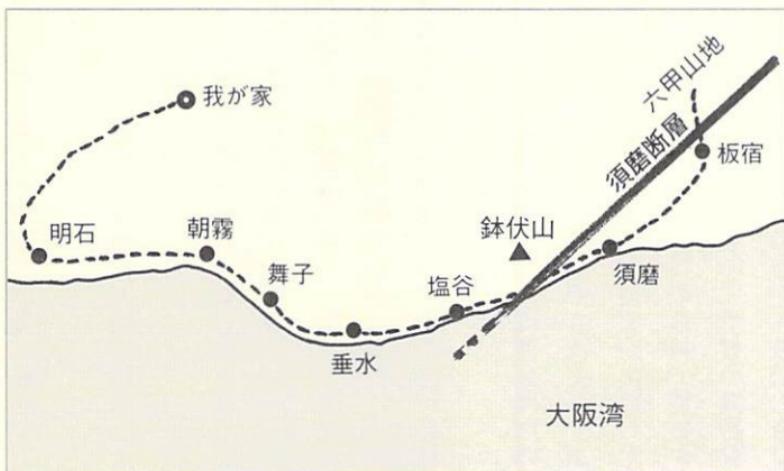
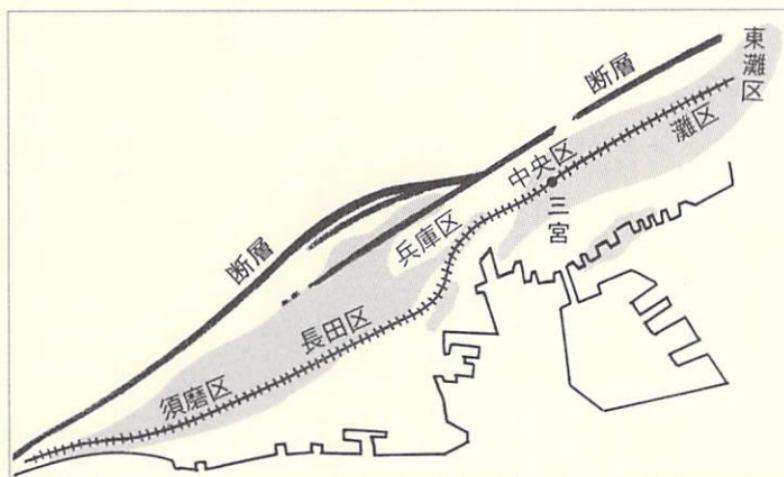


図2 須磨から東灘までの被害甚大地域



は私が新任で勤めた鷹取中学校の校区である。教え子の家の前でぼう然と立ちすくんでしまった。

東に進む。板宿付近の友人宅を訪問した。無事である。須磨断層の南、一〇〇mのところにあるので心配していたが、ブロック塀が崩れただけで亀裂さえない。須磨断層の北、一〇〇mほどの友人宅にも行ってみた。まったく被害がない。

今回、活動したとされる断層に沿って被害が出ているのだろうという私の予想は、ここでははずれた。断層の直上は被害はあるがそれほどでもない。断層の北は傾斜のきつい地域であるが被害は軽微で倒壊はない。

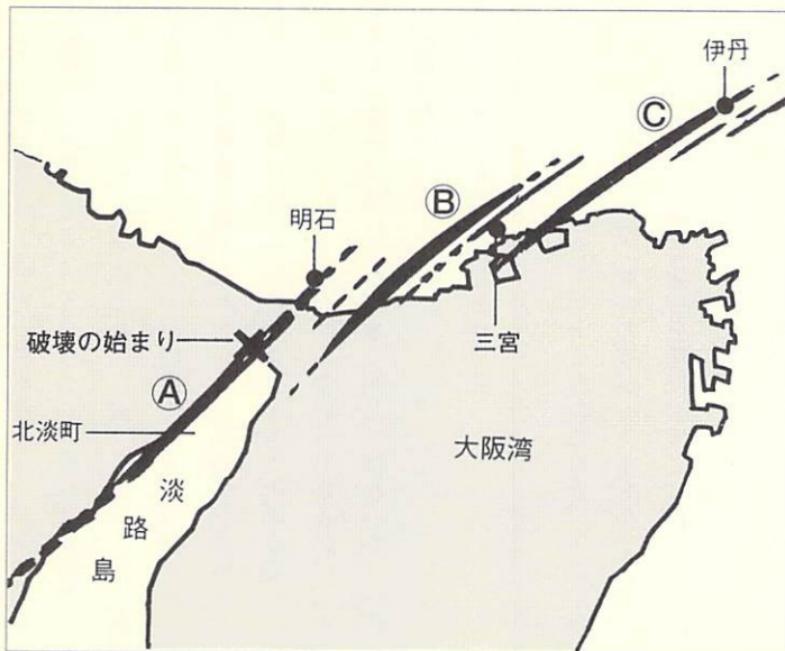
断層の南、五〇〇mから一〇〇〇mの地域が激しい被害を受けている。そしてそれは帶状に延々と続いている。(図2)

老朽化した家屋の密集地に被害が出たのだろうとも考えた。それは違っていた。もつと老朽化した家が連なる地域でも被害の少ないところがある。

地盤が弱い地域に甚大な被害が出たのだろうとも考えた。それもまた違っていた。もつとも地盤として弱い海沿いの地域で被害があまり出ていない。

須磨から始まって、私の二番目の勤務校である神戸中学校の校区を通って三宮につながる幅一～二kmの直線上の帶が大破壊の帶である。この校区でも教え子の家が粉碎されてい

図3 破壊の帯



た。ここを破壊が走ったのだ。断層が走ったに違いない。

淡路島の北が震源だという。しかし、それは破壊の始まりにすぎないのだ。破壊は点で起ころのではない。点で始まり面に沿って走るのだ。震源面とでも言うべきものだ。その破壊が震源面＝断層として神戸の市街地を駆け抜けたに違いない。

断層が直接地表に現われたという淡路島の北淡町を歩いてみた。たんばを横切つて水平に八〇cm、垂直に七〇cm程度の落差をもつ断層が続いている。山の中に入るとわからなくなる。市街地に入るとまたわからない。わかるのは、その方向に倒壊した家屋が連なることである。これは神戸の市街地と同じではないか。この破壊の帶に沿つて新たな断層ができたに違いない。

■連続的に幾すじもの断層が走つた

地震が発生した時、ドンドンドンという三回の音と共に激しい上下動によるたたきつけがあつたということはどういうことだろうか。破壊が何回も起つたのだろうか。そんなことを考えながら地図に被害の状況や分布をまとめていて気がついた。

淡路島の西海岸の野島断層を延長しても、神戸市の市街地の破壊の帶とはつながらない。野島断層による破壊は、偶然にも明石海峡えいせきかいで止まつたのだ。(図3のA)

六甲山地の南麓を走る須磨断層・会下山断層は、淡路島の東海岸の仮屋断層につながる

はずだ。この断層の南、五〇〇～一〇〇〇mが、須磨から長田・兵庫に至る破壊の帶だ。（図3のB）もうひとつのが、被害甚大地域である三宮から灘・東灘・西宮・伊丹にかけての破壊の帶も、別のラインではないか。（図3のC）

系統としてはいずれも同じ北東—南西方向の断層だが、それぞれ異なる。

断層は雁行状に連続的に平行して何本もが駆け抜けたのではないか。

破壊の始まりが、淡路島の北の海底であった。その破壊は、まず淡路島の西岸を南に走り、続いて須磨から長田・兵庫を破壊した。さらに次は三宮から西宮・伊丹にかけてを廃墟にした。そんな推定をした。

■人々、復興への力

地震が起つてからいろいろな場所に支援にいく職場の同僚を尻目に、負い目を感じながら私は被災地を歩いた。援助や救援に駆け回っている組合の仲間にも申し訳ないと想いながら自転車をこいでいた。

この調査をしながらいろいろな人に会つた。いろいろな姿を見た。ふだんなら黙つてしまふ人が話しかけてくる。苦難の中で不思議な連帯感ができるものらしい。

当然、今回の災害の実態や地震のメカニズムの解明は、それぞれの専門家が今後本格的に行なっていくことだろう。しかし、私はどうしても今回の大震災の姿をしつかりとこの

目に焼きつけておきたかつた。それが私の仕事だと思った。神戸に育ち神戸で理科の教師をしている、自称「ローカル・ジオロジスト（町の地質屋さん）」の私だからこそできることを、しておかなければならないと考えた。そして、この仕事はしばらく続けなければならない。肉親を殺した犯人を警察に任せずに自分の手で探そうとするような気持ちかもしれない。

我が美しい神戸と阪神間の都市、淡路は確かに壊滅的な打撃を受けた。人々に深く忘れがたい傷を残した。今もなお、再開のめどすら立たない学校が多い。避難場所になつている学校では教職員が奮闘している。授業を再開した学校も昼までに切り上げて教職員が各地に支援に行つている。市内ではほとんどネクタイ、背広姿の人を見ない。作業服でリュックをしょって歩いている。女性のはなやかな服も見ない。懸命に自転車で走っている。でも地震以前に比べてみんなの顔がはつらつとしているように見えてしまう。

以前にもまして明るく、美しく、すてきな町に完全な復興と再建をなしどげる人々の力までも、地震が破壊したはずはない。

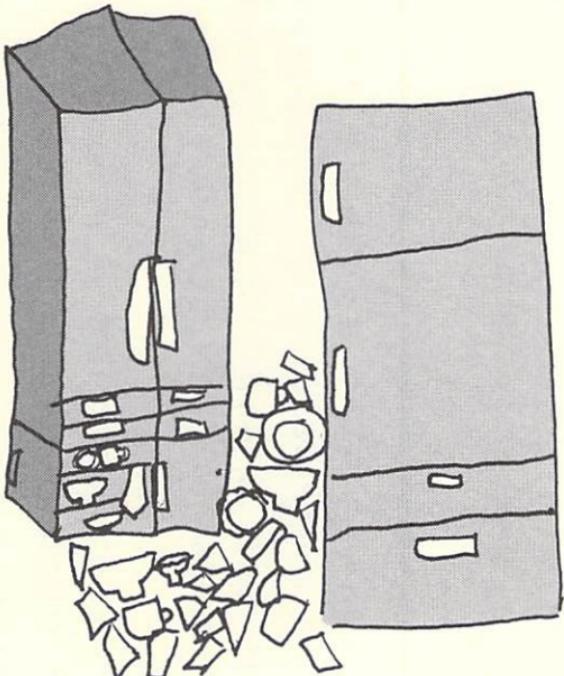
（一九九五年一月二十五日 阪神大震災から八日目の夜）

（『科教協ニュース』四四六号への投稿を一部改変・抜粋）

③章

震災日記・その後

そのとき、家族は…



カヤの絵「しおりがいっぱいいつぶれているところ」

■それぞの受けとめ方

大地震のその瞬間、妻は私の上を飛び越えて、子どもに覆いかぶさった。妻よりも私はほうが、子どもの隣に寝ていて近かつたはずなのに、私より早かつた。妻は叫び、私は状況把握に必死だった。これらの動作や思考はすべて「瞬間」の間になされていることなのだ。

私は、揺れがおさまると、布団をめくり子どもの体にさわるなどして無事を確かめるほどのことはした。しかし、懐中電灯やラジオを探し出す必要のほうが、私をせき立てた。同じ揺れの恐怖を体験しながらも、その後の、お互いがした行動はそれぞれに別だった。ときたま分担を確認しながら、とにかく、家の中をザッと片付けた。ガラスの破片などの危険物はとりあえず取り除いた。一夜明けて、妻は、余震にすっかり脅えているように、私には見えた。

これだけの大地震を、家族のみんなは、どのように受けとめたのだろうか。



幼い二人の娘たちに、何度か、「地震はこわかった?」と尋ねてみた。首を傾げるか、言葉の代わりにニコッと笑顔を返してくるか、「こわかったよ」の一語だけ。二人とも、

親に乗られて「重かった。苦しかった」とは話した。それだけでは、地震をどんなふうに受けとめたのか、よくわからない。ふだんから絵を描くのが好きな二人なので、絵を描かせてみた。すると、地震のことや、箕面に避難していたときの絵を、二人は喜んで描いた。長男の山田友は、大学に通うため、箕面に一人住まいしていた。箕面の地震は観測データがないが、近くの大坂は震度四、京都は震度五だった。彼は、この地震をどう受けとめたのだろう。一人離れて、家族を思う気持ちとは……。地震がもたらした大災害の中で、何を考えたのだろう。書いてみないと声をかけると、さつそく翌日、FAXで文章を送ってきた。

妻は、三月になつてメモを書き始めた。地震直後に自分に襲つてきた恐怖を分析するためには、それまでは漠然としていた自分の意識が、書くことで姿をあらわしてきたという。私が読んで、こんなふうに感じていたのかと初めて気づいた箇所が多くあつた。私の受けとめ方と、"まったく違う"という印象だつた。

以下、妻と長男の文章と、娘たちの絵を紹介したい。

■輝子の文章

てるこ

まつ暗だった。

グラッと横揺れがあつて「地震や」と飛び起きた。続いてグラグラッとくるものと、とつさに思つたが、ちがつていた。

ゴーというもののすごい音とともに、何かが下から激しくつきあげてくる。

これは、何なんだ！ 何なんだ？



あまりにも突然恐怖が襲つてきたので、子どもの名前をとつさに思い出せなかつた。「子どもたちー」と叫ぶのが精一杯だつた。

そして、子どもたちが窓のそばに寝ていることを、とつさに思い出した。

アブナイ、ガラス、窓ガラスが割れると思い、「フトンをかぶりー」とまた叫んだ。

ほんとは、「もつとこっちへ来て、ガラスがアブナイから窓からはなれて」と心の中では叫んでいたが、声にならない。文が言えなくなつてしまつた。子どもの一人は私の身体

の下に感じたが、もう一人がどこにいるかわからなかつた。

うろたえて、「あと一人、あと一人」と言い、フトンの上から子どもの身体をたしかめようとした。その時はじめて、山田のわりと落ち着いてはいたが、うわずった声がすぐそばで聞こえた。「大丈夫や。二人ともおる」



その言葉を信じて、子どもたちのフトンのうえに荒々しく両手を広げてのっかつた。すぐに山田が私の背中に静かにかぶさってきた。

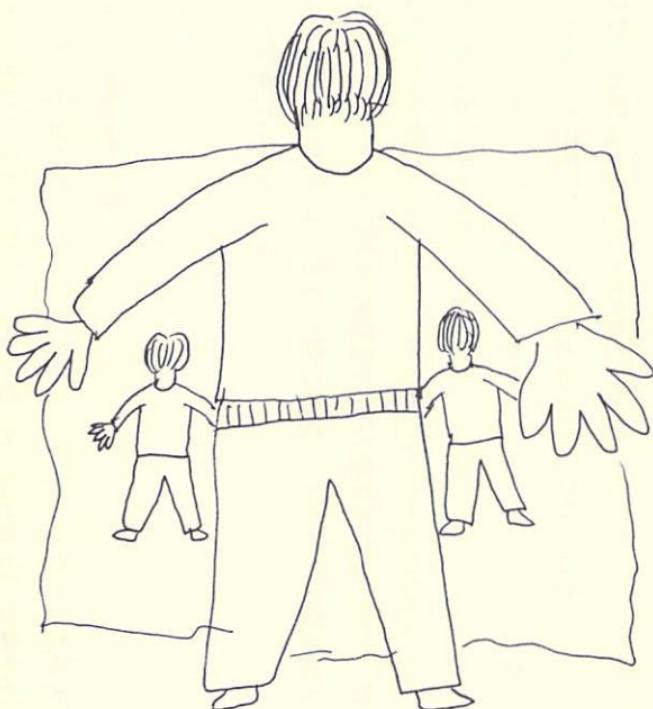
親子四人が重なりあつていて、何かが壊れ続けているような破壊音がしていった。ガシャーンと大きな音がしたとき（台所で食器が大量に壊れた音だった）、私たちの後にガラスの大きなショーケースがあつたことを、思い出してしまつたのだ。

シマッタ。私たちにまともに倒れてくるかもしれない。

山田はパジャマ一枚なのだ。頭にガラスがささり血まみれになつて動かない様が浮かんだ。この場所は危険だ。なんとか山田にフトンをかぶせなくてはならない。右肩を動かそうとしたが、山田はまるで巨大な岩のようだつた。

ビクともしない。ものすごい力で押さえつけているのだ。
もう、なすすべがない。

地震のときお母さんが
がやとあさのふと人のうえ
にのっかってきたところ
くるしかった。



カヤ（8歳）の絵

この理不尽な破壊に抗うこともできず、ショーケースが倒れないように、運を天にまかせて、じつとしているしかない。

生きた心地がしなかつた。

私は地震についてまったくの無知だったので、こんなものすごい揺れが、まだまだ長く続くのだと思いこんでいた。

ショーケースは私たちの上に、倒れてこなかつた。

私たちは助かっただのだ。

後になつて、地震の揺れは長くても一分ぐらいで止まるもので、そんなに長く続かないということをTVの解説で知つた。今回の揺れも二〇秒間ぐらいだつたらしい。

私にはもつともつと長く感じられたけれど……。



しばらくして、ラジオを聴いていた山田が、震源地は「淡路」だと言つた。

えー、とびっくりした。

毎日ベランダから見えてるあの淡路島、どうか震源地の揺れなのか、どうりでものすごくかつたはずだと、妙に納得した。私はこのとき、淡路の次に、ここ明石が、一番被害が

ひどいのだと思いこんでいた。

ところがそうではなかつた。

神戸で一人で暮らしている母から電話がかかつた。

「みんな無事か。家がつぶれたので避難所に行く」とのこと。公衆電話なので、くわしいことは聞けずに、すぐに切つた。

「家がつぶれた」「避難所」——この言葉の実態を現実としてイメージできない。母のそばにかけつけたくとも、交通が遮断されている。どうしようもない。

しかたなく、「母」を心の中に押しやつた。

やがて、ラジオの情報から、明石は被災した西の端にあたり、東の方面がもつとすごい被害を受けているということが、だんだんわかってきた。

○

電気もガスも水道もない。電話も不通に近かつた。

こんなことは今まで経験したことがない。

ついでに私の思考回路も切れてしまつていた。

心中に「直下型地震の恐怖」をしまいこんで、外側から見ると、私は黙々と片付けを

していたけれど、あまりにも一度に経験したことのないマイナスに襲われて、わけがわからなかつたので、心は、茫然としていた。それでも、夕方までは多少気もはつていた。

六時ごろ電気がついた。

と同時に、疲れがどーと出てきた。

寒くなつてきていたので、すぐにコタツをして寝転んだ。

ホッとした。



そして、ぐつすり眠つて元気を取り戻すはずだつたが、そうはいかなかつた。

ラジオが信じられないような情報を流していた。

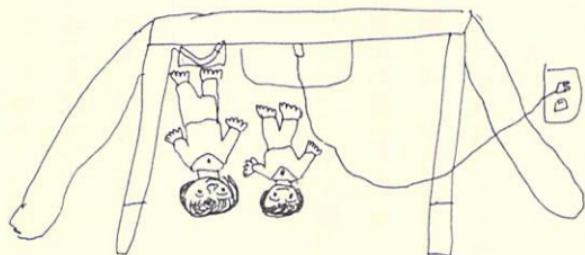
一体、神戸はどうなつてしまつたんだろう。とてつもなく恐ろしいことが起つてゐるらしい。感情移入したら涙があふれて、ラジオを聴き続けることはできなかつたので、淡々と聴いていたつもりだつた。しかし、どうしても他人ごとのようには聴けなかつた。たいへんだった、たいへんだと思つてしまふのだつた。

おまけに、夜中の三時ぐらいまで、九時間も立て続けに聴いてしまつてたのだ。

私のキャパシティを大きく超える量の悲惨さを受け取つてしまつてた。

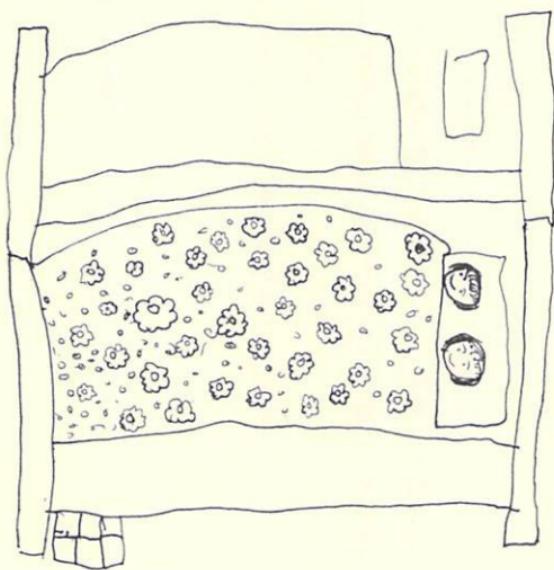
眠りたい、ぐつすり眠りたいと思つたが興奮していく、ほとんど眠れなかつた。

じんのときこたつにもくいたところ



育休

アサ（6歳）の絵



アサ（6歳）の絵 余震に備えて二段ベッドの下段に子ども2人で寝たところ

案の定、朝、頭痛がした。

二～三時間ぐっすり眠りさえすれば、治る。しかし、眠りたいのに、疲れなかつた。

家族とか親戚関係の安否は確認できたが、神戸にたくさんいる、得がたい友人たちが気になつてしまたない。

○

あれから「余震」が何回あつたのだろう。

震度一か二はグラグラするだけだから慣れてもうこわくなかった。

時々、震度三がくると、足元も気分もフラッとするが、物も壊れないし、大丈夫だ。

もう少し強いのがくると、心の中にとりあえずしまいこんだ「本震」がチラチラと顔を出す。あの時の恐怖がまた断片的によみがえる。

もう一度あんな目にあうのは、どんなことがあつても絶対にイヤだと思った。そして、もしかしたらもう一度「余震」という名であんなおそろしい揺れがくるのかもしれないと思つてしまつた。

あの時は、予告なく突然おそろしい現実の中にはうりこまれたので、不安を感じる間がなかつた。けれど今や、「不安」が私を支配し、私は本震の恐怖の記憶とセットになつた「余震」にさいなまれるようになつていつた。

このマンションだってヒビが入っているし、駐車場のアスファルトは何本も地割れがしている。給水塔もぶっこわれて水が蛇口から出ない。

今度強い「余震」があつたら、壊れるかもしれない。コンクリートの天井が落ちてきたらどうしよう。どうやって逃げたらいんだろう。

こんな想像をするようになるなんて、地震前には思つてもなかつたことだ。でも今は、どんなすごい破壊でも、現実として起ころうのだと、ラジオの情報は伝えていた。

今までなら、「でも、私自身の身の上には起こらないかも知れない」というほうを無意識に選択し、自分を守つていたのだが、今回は違つていた。「起ころうかもしれない」ほうを心が選んでしまうのだ。

頭痛がひどく、顔色が青くなり、手先が冷たくなり、動作がゆっくりになつてしまつた。食欲もない。頭も心もボーッとなつた。

○

箕面は別天地だった。

ライフルラインが全部そろつていた。

朝昼夜と三回食事を作り、洗濯をし、掃除をし、スーパーに買い出しに行くだけで、一

日がアッという間にすんでしまう。小さな台所で、道具もフライパンぐらいしかないので、工夫して食事を作つた。朝食は、パン、ミルク紅茶、卵ときのこ、キャベツとツナのサラダ、ハッシュサク、というように、はりきつて食事を作つた。

食事ができるということに、こんなに幸せを感じるなんて、今までなかつたことだつた。水とガスが出るということがありがたかつた。スーパーには、低温殺菌牛乳やにがりで作つた昔ながらのトーフ、抗生素質をつかっていない卵があつて、すごくうれしかつた。

時には足を伸ばして図書館に行つた。

こじんまりとしやれた建て方がしてあつた。

無言の本がいばつてずらーと並んでいるのではなく、くつろいで本と親しめる工夫がしてあつた。何事につけ巨大なものがきらいな私は、この小さな図書館がすごく気に入つてしまつた。係の人も親切で、何よりも館内がシーンと静まり返つていのがよかつた。人のざわめきが耳ざわりよく聞こえるくらいの静けさが保たれていた。



部屋を占領されたトモは、大学の図書館で勉強したり、夜は友達の家に行って、締切の迫っているレポートを完成させたりしていたが、おかげで私は、快適な日常生活を送るこ

ひなんしていたあみのおの
図書かんにいくとちゅうで
きれいなにじがかかるていた。
かや



カヤの絵 トモ（長男）のいる箕面市にいる間、3人で図書館へ

とができた。

カヤとアサは、あいかわらずかわいかった。そのことが、私の心を安定させ、私はだんだん元気になつていった。



TVでは「強い余震があるかもしれないのに注意するように」と言つていた。

箕面では、本震は、震度四か五だったので、余震が来ても一日に一回か二回だった。震度も一か二ぐらい。

それでも、ゆつくりとオフロに入れなかつた。

地震はいつ来るかわからないのだから。



お見舞いの電話をしてきてくれた友人によると、「マグニチュード六の余震」とTVが言うのは震度五ぐらゐのことで、マグニチュードと震度とは違うのだという。私はそれも知らなかつた。もう、震度五より大きな余震は來ないそうよ、と友人は言つてくれた。

「へー、ずいぶん地震にくわしくなつたのねー」とおどろくと、「そりやー、今、必死で地震に関する情報あつめてるのよ」と言う。

でもひょつとしたら、もつと大きいのが来るかもしれない。まだ私は悪いほうへ考へが

いっていた。すると電話の向こうで、「信じるの。来ないほうを信じるのよ」と、きつぱり力強い声が聞こえた。「明るいほうでいこうね」と元気づけてくれた。

その声が、私には天使の声のように聞こえた。



そろそろ水道が出るからと、山田が迎えにきた。

箕面から明石に帰つたら、マンションはまだ断水していた。

水が出たら洗うつもりの食器がグチャグチャにつっこんであつた。まあいかとも思ったが、悪臭がしていた。水を一階まで汲みに行つてもらつて、せめてここだけは洗うこととした。

断水とわかつていても何度も水道をひねつてしまふ。



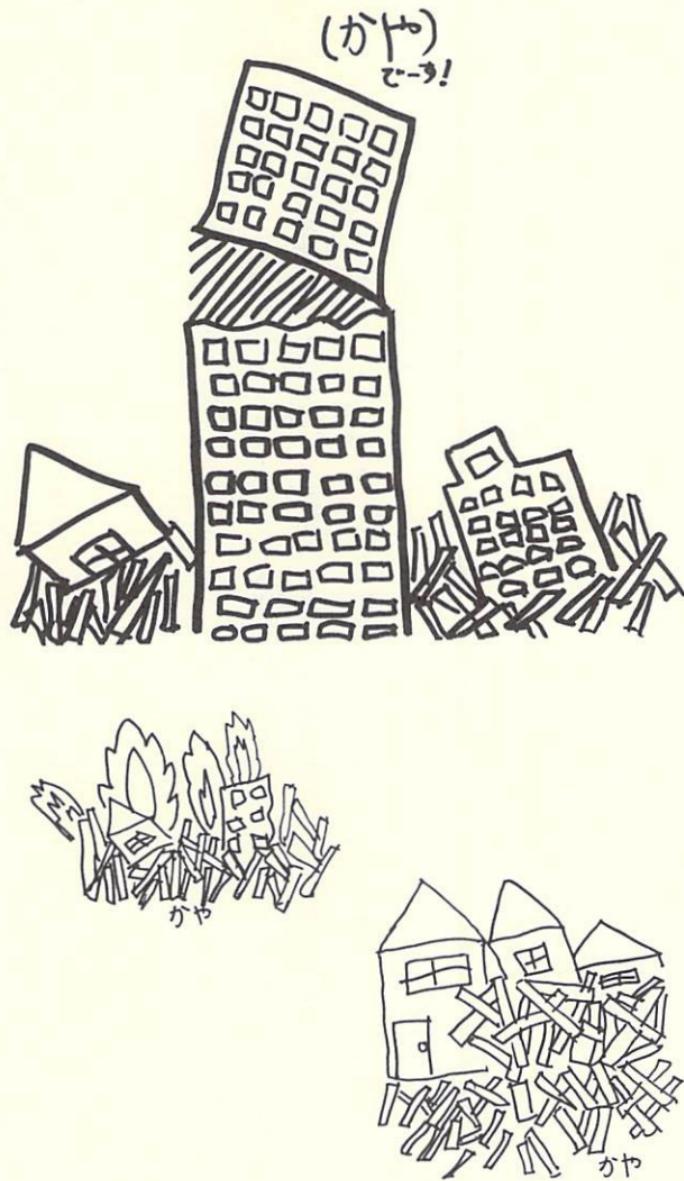
家の中には、倒れたものが積み重なつていて、ベランダの植木鉢も壊れたまま。

半日片付けをして半日休むことにした。

なんだかしんどくて、どんどんやつてしまふことができなかつた。

余震が来ていないのに揺れたみたいで、なんか変だつた。

身体が斜めに傾いているみたいな感じがする。



カヤの絵 被害が特にひどい地域の様子を、思い浮かべて描いた

地震前後の記憶が取り戻せないことも気づいた。

思い出せない。無意識のうちに記憶回路が遮断されたみたいだつた。

ここから先は立入禁止。あの恐怖を、心のすーと奥に閉じこめてしまつて、自己防衛しているのだ。

○

水道が出た。生活が半分ふつうになつた。

でもまだ、頭の中がスッキリしない。家の中の整理がつけばスッキリするのかもしれない。でも、日常生活を送るだけで疲れてしまつて、なかなか整理ができない。

私の状態は、少しずつよくなるというのではなくて、階段を上がるよう、一〇日同じ所にいて次に一段上がる、また一〇日して一段上がるというふうになつていてみついた。ガクッと一段下がることもある。保育所にアサを送つていくとき、壊れた町を通らなければならぬ。時間がたてば少しずつ忘れるはずの恐怖に、また引き戻されそうになる。母のいる「避難所」というところは、大勢の人が避難していく、「大変な場所」だつた。元気に話す母が不思議なぐらいだつた。私は感じないようにした。長くいたくなかった。

母の家の取り壊しで、見覚えのある場所があたり一面破壊されているのを見た。このあ

たりは、無残に破壊されても、傾いた家やペしやんこになつた文化住宅が、まだ形としてあつた。でも、板宿の南側のほうは、黒焦げのビルは残つてゐるが、焼け野原が続いている。何もない。町が死んでしまつたみたいだ。



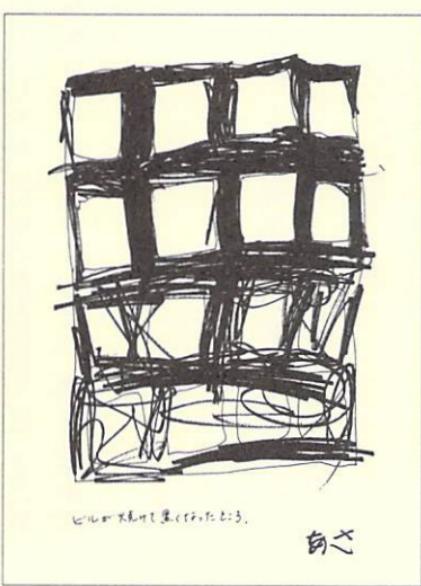
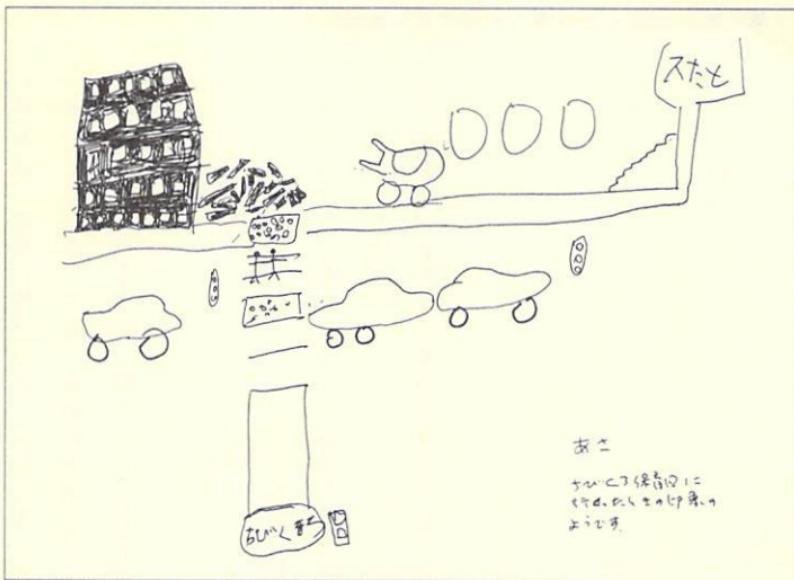
仕事が始まつて、たくさんの友人と話をする。友人たちが支えになつた。

山田が、「神戸には当分もう大きな地震は来ない」という猪本先生の話を聞いて、私と子どもたちにわかりやすく説明してくれた。

ホッとした。

初めて、オフロにゆつくり入つた。

(山田輝子 四十八歳)



アサの絵 ビルが焼けて黒くなったところ

地震が起こったとき、「わあ、すごい」と思った（箕面は推定で震度四か五）。しかし恐怖心より「びっくりした」に近いものだった。すぐにテレビをつけたが、眠気がとれず頭がボーッとしていて、よくわからなかつた。「ああ、いつものよりもちょっと大きかつたんだな」と思つたぐらいだつた。実家のことまで、その時は考えがまわらなかつた。明石の近くが震源地だなんて思いもよらなかつた。ふすまを隔てた廊下は倒れた本と割れた食器でいっぱいだつたけれど、あとで片付けることにして、また一眠りすることにした。

九時ぐらいに起きてテレビをつけて驚いた。生田神社がペしやんこになつていた。でもまだ半信半疑でいた。十時頃、様子を見に大学へ行くと、後輩たちがテニスをしている。「お前ら何しどうねん。今すごいことになつとんやぞ」と言つても、あまり心配していそうにない。彼らは実家が遠いのか、ニュースを知らないのか、それにしても彼らのノーテンキさには腹が立ち、すぐ家に帰つた。

明石のマンション自体は大丈夫だろうと思つた。あんな大きいのが倒れれば、すぐに報

道されるだろうと思つたからだ。でも、小さい妹たちは、打ち所が悪ければ危ないのではと考えるにいたつて急に心配になつた。板宿（須磨区）に住んでいるおばあちゃんも気になつた。須磨区の被害が大きいらしさことがわかつてきたからだ。

実家への電話は不通が続いたのですますあせることになつた。でも、なんとなく全員無事のような気はしていた。テレビが明石のことにつれていなかつたからかもしれない。箕面周辺が全然変化がないから、テレビからのさけびごえが何か信じがたく、神戸から感覚的にいつすぐ近くのここが大丈夫なんだからという気もしていた。テレビの画面に見入りながら、時間が経つていった。

夕方、アルバイト先で電話が通じないことを話すと、公衆電話で試してみればと教えてくれたので、すぐに実行した。一発で明石につながつた。「あつ、トモか！ こつちは全員大丈夫。そつちは？」「うん。こつちも大丈夫」と答えるながら、父のこわばつた即答ぶりに家族の不安が伝わってきた。「おばあちゃんの家はつぶれた」と知らされたが、幸いおばあちゃんは無事とのことでホッとした。その公衆電話から親戚の所へかけて、結果を実家に知らせるということを何度もすることになつた。明石では公衆電話はだいぶん並ばなければ使えないらしかつたからだ。

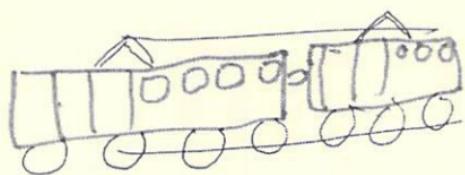
次の日の深夜に、家族が車で一時間かけて、僕のワンルームにやつて來た。父だけ次

の朝に帰って、母と妹たちが残った。家は狭いけれど、三度の食事を作つてもらえるので悪い気はしなかつた。大学は地震の三日後からスタートして試験が普通通りあつたので、「なんでこんな非常事態に普通の学校生活なんだろう」と、僕はおこつていた。

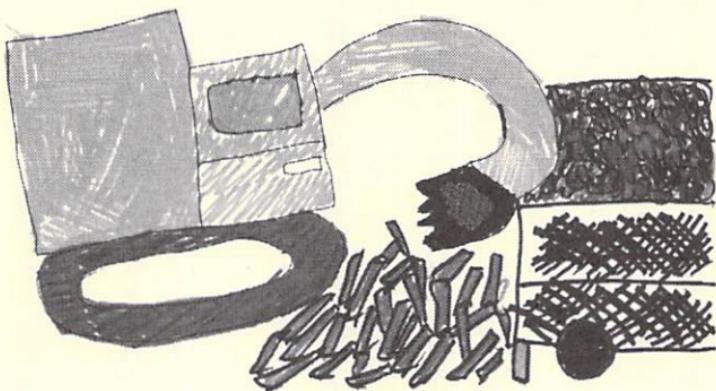
母はこつちにいる間にだいぶん元気になつた。妹たちは最初から無邪気なままそれなりに楽しそうにしていた。父はその頃、この震災を記録するのだと、一人実家でワープロに向かっていたはずだが、まだ僕にとつて、地震は遠い出来事のようだつた。

母と妹たちは十日間いて、一月二十八日に明石へ帰つた。その後、僕は、おばあちゃんが避難している小学校に行つた。その小学校は、僕の母校でもあつた。そのためか、学校が避難所に様変わりしていて、地震を肌で感じたよう思う。

おばあちゃんは畳一枚もないところで生活していた。箕面から出てきた僕は、避難所暮らしの光景を見て、何か申し訳ないような気持ちになつた。普通の生活をしていることが悪いような気持ちさえしてきた。「ごめんな。学校があつてなかなか来られへんかつて」と話した。おばあちゃんは思ったよりしつかりした声でいろいろ話をするので、ひとまず安心した。二度目に避難所を訪ねたときは、おばあちゃんの家を見に行つた。一階はつぶれていたけれども二階は中に入れそだつたので、裏からまわつて少し物を取り出した。おばあちゃんにとつて、持ち物が取り出せることは、すごくうれしかつたようだ。「お父



アサの絵「車が焼けているとこ」「クレーン車でこわしているとこ」「トラックで水を出しているとこ」「でんしゃ」



カヤの絵 ショベルカーで瓦礫を トラックに運んでいるところ

さんに頼んで後で車で来てもらつたら、ほとんど二階にあるものは取り出せるで」と言つたらとても喜んでいた。

同じ時期に、大学で募つていたボランティアにも参加した。その日は、一五人ほどが御影公会堂の隣にあつた元気村に行つた。援助物資が整理しきれず山積みになつていて、その仕分け作業をすることになった。せつせと働いたのに一日がかりの仕事となつた。少しは役に立つたのかなと思いながら、くたくたになつて梅田（大阪）に着いた。腹が減つていたせいもあってか、腹立たしくなつてきた。梅田と御影の雰囲気の違いに、いらだつていたのかもしれない。

三月に入つてから、再度ボランティアに参加した。今回はガレキを除いて、トラックが通れる道を作る作業だ。倒れているガレージのシャッターをのけたり、ハンマーでカベのブロックを壊したりした。単純明快な仕事で、二〇人ほどで五時間かけて、道作りに成功したときは爽快だった。関東から多くの学生が泊まり込みで来ているのを知つて、すこし驚いた。僕の友人も関東で、駅前で募金活動をしているらしいし、程度の差こそあれ、多くの人ができる範囲で手助けをしようとしているのを知るのは気持ちいい。

僕が見たボランティア活動の特徴は、すぐ友達になれるということ、皆一生懸命働いているということだろう。独特の連帯感があるし、いつでもサボれるという性格の作業ゆ

えに逆に、がんばってしまうようだ。

感覚というのは慣れるにつれてマヒしてくるのか、しだいに焼け野原を見ても動搖が少なくなってきた。街も少しずつ活発化してきたように思つ。携帯電話が、被災地を歩く人々の中でブルルーと鳴つたりしている。

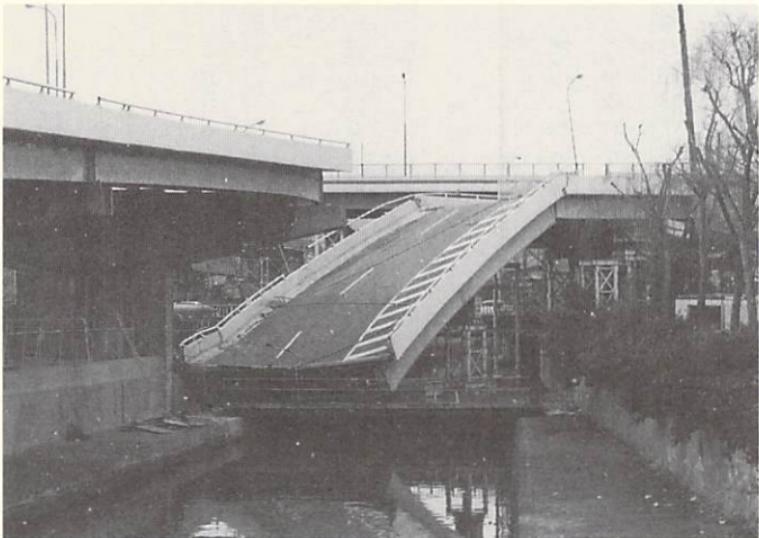
友達と話していく感じたことは、被災した人々は心の痛みとともに“怒り”を胸に抱いているということだった。政府の対応や地域の現状などを、“怒り”を交えながら話すことになる。被災地以外の人々は「そうやね」と聞き役にまわる。

学生ボランティアの活躍がマスコミをにぎわせている。多くの場合は、この現状を前にして何かしなければ罪悪感を感じるという動機で参加しているのだろうと思う。そして活動をしているうちに、どんどん仕事がまわつてくる。そういう過程で活動にかかる人が多いのだろうし、僕自身もそうだった。僕はそれはそれでいいと思っている。

「何か役に立ちたい」と思つて、全国から学生が集まつてきている。
「僕、石川から来ました。一緒に活動しましよう」

高校生か大学生かわからなかつたが、作業場で出会つた彼はとてもさわやかだった。

「日常」が戻るまで



川に落ちた高速道路の高架橋(長田区)

■「余震は来ないよ。大きいのはね」

証言の取材をほぼ終えた、三月二日午前六時二十四分、私はすでに起きていて、原稿書きのため、ワープロに向かっていた。

「バシッ！ バシッ！」と、二回ぐらい壁がひずむような音をさせて余震が起きた。ニュースを聞くと「北淡町で震度三。垂水区で震度二」だった。明石には残念ながら震度計が設置されていない。しかし、ニュースで知る前に、「震度二か三」と体感で測定していた。一月十七日以来、震度一以上の有感地震は、これで一九〇回になつた。無感地震を含む地震の総数は一六一八回に達している。

理科の先生の觜本格さんから、地震発生のしくみをやさしく教えてもらつて、「神戸には当分もう大地震は来ない」と、私は思った。しかし、安心してみたものの、体の反応まではなかなか制御できない。震度三程度になれば、一瞬ヒヤッとしてしまう。思わずまわりを見まわして、落ちるような危険物がないか確認する癖がついてしまつた。

觜本さんは中学生に、地震をこんなふうに説明している——太いガラス棒を一本用意して、その両端から圧力を少しずつかけていくとどうなります？どこかで必ずバリッと割れますね。ガラス棒は地下の岩盤を例えたものです。割れたところが断層です。

余震は、その割れ残りだと説明してくれた。岩盤それ自体は数十もの厚みがあるし、自然界のしくみはガラス棒ほどに単純ではないとしても、その説明だけで、私にとつて、余震の恐怖はかなり薄らいだ。「あのう、空が光つたっていうでしよう。あれ、説明できます?」

「ああ、簡単ですよ」と、言い残して、会見している部屋を出て行つた。まもなく白い石を二個、持つてきた。部屋を暗くした。火打ち石のようにカチッとたたくのではなく、強くこすりあわせると、白い光が出た。

「どんな石でも、こすりあわせると光が出ます。これは、結晶片岩といって、特に出やすいんだけど、この地震で被害のひどかった淡路島の富島から持ち帰つてきたものです。數十の厚みのある岩盤がこすりあわされるのだから、光が出ても不思議ではありません。光は、何かに当たつて、人間の目に見えます。海が光ることもあれば、雲が光ることもあるし、地上が光ることもあるでしょう」

その二個の石を土産に持ち帰つた。

さつそく我が家でも、部屋を暗くし、誰でもできる簡単な実験をしてみせた。そして、「余震は来ないよ。大きいのはね」と妻に話すと、胸のつかえが取れるかのように安堵した。妻の文章にもあるように、やつとこの夜から、風呂にゆっくりくつろいで入れるよう

になつたそうだ。

マスメディアを通じて、「最大でマグニチュード六程度の余震が起きる可能性があります」と私たちは知らされていた。今では、「大きな余震が起きる可能性は弱まつた」と変更されている。いずれにしてもわかりにくい表現だ。揺れの恐怖を体験した人々は、おろしいほうにシフトして身構えている。皆本さんから、「余震は来ないよ。大きいのはね」と聞かされて安心したのは、妻よりも先に知つた私のほうだった。

■妻と子どもを迎えるに

証言を集め歩いていた間、私と家族がどのように暮らしていたのかを、振り返つておきたい。

箕面へ避難させていた妻と子どもを迎えたのは、一月二十七日だ。

それまで毎日、お互いに電話をかけて、生活ぶりを知らせあっていたが、水道の復旧見通しがついたことから、「そろそろ帰つてくるか」ということになつた。とはいっても往復にはまた国道一七六号の大渋滞を覚悟しなければならない。そこで、二十七日に、私が明石を出発して、その日のうちに箕面にたどりつく。一晩泊まつて、あくる朝、明石へ帰るという段取りにした。

ちょうど二十七日は、中国自動車道の復旧初日と重なった。宝塚付近に震災の影響があつたらしくて、とりあえずは対面通行という仮復旧の姿だつた。

中国自動車道の滝野社インターをめざして、裏道を走つた。まず、成功。ほとんど渋滞なしで走れた。インターから、中国自動車道に入った。しばらくは、快調に走つた。左車線をのんびりと気持ちよく走つていた。舞鶴自動車道とのジャンクションを過ぎた直後に渋滞の後ろについた。渋滞になると、時計と距離計を見比べる習慣がついていた。

まったく動かない。距離計を見る以前の問題だ。ジャンクションまで、バックして抜け出る車が出始める。時計は、午後三時三十分。宝塚の対面通行が原因らしい。ラジオを聞いていると、「JRバスと神姫バスが、不通になつて新幹線の代行輸送として、新大阪と姫路の間を運行させたばかりだが、あまりの渋滞に、さっそく明日からのダイヤを中止も含めて見直す」という。まさに、交通マヒ！ ゴジラが都市を襲い、人間が逃げ惑つているような錯覚さえおぼえそうになる。朝までかかるのではと思い、ゾッとしてきた。

後ろの大型トラックがバックで抜けようとしたのを見計らつて、私も抜け出た。三田西インターを出て、国道一七六号に入った。けつきよく、震災の翌日に、箕面に向かつたときのコースと同じになつてしまつた。それでも渋滞の列は、前回より、やや流れが速い。

午後十一時頃、箕面に着いた。ワールームのトモ（長男）の部屋は、敷かれた布団とホームゴタツでいっぱいだった。小さい子どもたちは眠っていた。妻とトモの顔を見て、ホッとした。やっと生活のにおいのするところにたどりついた。

■水道のない生活

翌朝、九時すぎ、明石に向かってトモの家を出発した。相当の渋滞を覚悟し、しばらくは脇道を走り、思い切った遠回りの迂回路をとった。国道一七六号線には宝塚で合流すればよく、それまではなるべく国道に沿った道は走らない作戦にした。それが功を奏して、午後二時頃には明石に着くという“快挙”だった。

しかし、水は、まだ出ていなかつた。

水道が復旧したのは、その二日後、一月三十日のことだ。ただし、マンション中が一斉にその恩恵に浴したわけではなかった。各戸への配管に支障が出たところもあつたようで、工事の車が数台、修理に来ていた。

蛇口からやつと水が出たため、食器を洗い、たまつた洗濯物を洗濯機に放りこんだ。元気が出てきて、部屋に掃除機をかけ、事務書類や本を片付ける気になつた。午後になると少々疲れたものの、一日中、片付けていた。

水道が止まっていた期間は、ほとんどが私の一人暮らしだった。だから、水汲みも最小限ですませることができた。家族をもつ人たちはそうはいかない。二〇リットルのポリ容器や四〇リットルのゴミ箱を利用して、水をいっぱいに汲み、マンション備えつけの大きな台車で運んでいた。二回、三回と続けて汲んでいるのかなと思える人もいた。

その水汲み場で、おばあさんが、素手で洗濯をしていた。水は冷たく、手を赤くしていった。洗濯しているじょうずな手の動きに、子どもの頃を思い出てしまつた。「冷たいでしょ。大変ですね」と声をかけたら、「おたくはどうしてるの?」と聞き返されてしまった。私は、洗濯をしていなかつた。

私にとって水を一番に必要としたのは、トイレだつた。大便を流すのに、水洗タンクに水をいちいち入れるのが案外面倒で、しかも、うまく流れない。流すのを失敗すると水を無駄にするだけでなく、あのタンクはけつこう量があるので、また水を汲まねばならない。かといって、バケツで直接流そうとすると、八リットルぐらいを一気に使わないと成功しない。コツを得ないと、しぶきが飛び散る。けつきよく、二〇リットルのポリ容器から、水洗の水が流れ出る穴のふちのあたりをめがけて、いきおいよくザーッと一気に流し込むコツをつかみ、これが一番うまくいった。

大量の汚物が出る避難所では、トイレの始末が大問題だつたようだ。大便は、流すだけ

の水がなく、新聞紙などでくるんで、固体物として処理していた。

下水管の破損をよく調べないままに水道を復旧させたため、汚水があふれて騒ぎになつた話も聞いた。

飲料や調理用の水は、少量ずつ使うから問題ないが、食器洗いは、私にはやつかいだつた。水を使わず布でふきとるのがよいと知つたのは、荒木左江子さん（『大草原の小さな家』）の取材からだ。しかし私は取材と記録に追われて、食器の始末を“習得”するまでには至らず、使つた食器が流しにあふれることになった。

二月末現在で、神戸市内にまだ水が出ない箇所が、倒壊した家屋を除いて一万戸以上もある。二〇階以上の高層マンションでエレベーターが止まり、階段の途中で七回も休み休み水を運んだという話も聞いた。とても笑つてはすませられない。こんなことが三、四回も続いたら、避難するしかないだろう。

■交通事情

一月二十九日、妻と子どもたちは、初めておばあちゃんを避難所に見舞つた。元気そうなおばあちゃんに、びっくり。「仮設住宅は簡単に当たらないよ、だから、うちにおいで」と誘うが、「まだここにいる」と言って譲らない。カヤ（長女）は、「タマゴスープがあり

ます。欲しい方は、運動場東側まで取りに来てください」の放送を聞いて、欲しそうにしていた。

全壊した実家にも行つてみた。九日前に私が訪れたとき、こわいながらも意を決して通つた通路は、さらに左右から互いに家が倒れかかり、瓦が落ちては積み重なり、瓦礫の山になつてしまつていた。

震災前、おばあちゃんの家へ行くには、山陽電車の明石駅から板宿駅まで特急に乗つて一五分だつた。しかし、山陽・板宿駅はまだ開通していない。明石からバス→地下鉄と乗り継いで、一時間前後かかった。

トモのいる箕面市へは、阪神高速道路と国道一七一号を走つて約二時間だつたが、高架になつていた阪神高速は倒壊して開通は三年先といわれている。

仕入先のトーハン神戸支店へは、国道二号を東に二二一km走つて、約五〇分で行けたが、これもおよそ二倍の時間がかかるようになった。国道二号は片側五車線で、阪神高速の高架下を通っていたが、高速道路の傾いた支柱を支える鉄骨が三車線を占領しているから、車が通れるのは二車線しかない。そこへ、瓦礫を積んだダンプや大型レッカーが走り、路線バスも走る。慢性の渋滞は、阪神高速が開通するまで続くのだろうか。大地震の直撃を受けた高架道路は、高速道路に限らず、至る所で補強の支柱が立てられている。

鉄道も、地震発生直後にすべて止まつた。再開は、虫食いのようになつて部分開通が相次いでいる。鉄道マンの必死の復旧作業の成果だと思う。輸送力がバスなどと比べて格段に優れているだけに、開通はうれしい。ただし、地元の地理を知りつくしている人にとっても、部分開通の乗り継ぎはパズルのようだ。

例をあげよう。須磨区北部から灘区の王子公園近くの勤め先まで、約一時間で通勤していた人がいる。バス→地下鉄→バスというコースだった。震災後まもない頃、四通りの乗り継ぎコースを試みた。
①バス→バス→バス→神戸電鉄→北神急行→バス。
②バス→バス→バス→バス。
③バス→徒步→JR→阪神電車→バス。
④バス→バス→阪神→バス。
疲れ果てた様子で、「どれも三時間ほどかかつたわ。往復六時間よ！」こんなこといつまで続くのかしら。私、病気になりそう」と言つた。三月初めに、元のルートで通勤できるようになり、月曜日だと約一時間四五分、その他の曜日は約一時間三〇分になつた。

■仕事再開まで

私と妻は、「ヒントブックス」という本屋を一人だけでしている。店を持たずに、注文を受けて取り寄せた本・定期刊行の雑誌や書籍を、配達したり宅配便で送る。事務作業のほとんどをコンピュータで処理できるようにして時間を生みだし、本の相談（レファレン

ス)に力を入れている。遅いといわれる本の取り寄せスピードを、一日でも早くする方法も研究し実践してきた。こうしたことの一〇年間続けてきて、最近は雑誌や書籍でも紹介されるようになつた。

コンピュータが示す本の調達所要日数実績の平均値は、わずかずつでも早くなる傾向にあつた。震災前には「五・四日」になつていた。そこへ大地震が來た。東京から神戸に荷物が入らなくなつた。

さらに、ヒントブックスの得意先のほとんどは神戸市内だつた。『友人』とも言えるほどの関係の人が多かつた。その安否を確認するため、電話をかけることを試みたり、徒歩で自宅を訪ねてまわつたりした。そこで交わされた話がこの本の下敷きとなつていつたのだが、ともかく、家を失つた人や遠くへ避難した人、行き先のわからない人がたくさん出てきて、仕事どころではなかつた。

一人か二人を訪ねるだけで、まる一日かかつた。その間にも、月末には取引先から請求書が送られてくる。銀行からは、数々の費用が引き落とされる。だから、その手当てを考えなければならなかつた。

一方、遠隔地の得意先も多い。その人たちから、安否を尋ねる電話が次々かかつてきつた。早く再開の見通しをつけねばと思いながら、本が届けられない事情を説明するのが精一杯

だった。

仕入先のトーハン神戸支店は、JR神戸駅から東へ五分ほど歩いたところにある。震災後は、一月二十一日に初めて訪ねた。様子を見に行くだけが目的だったが、思わぬ楽しいひとときを過ごした。

それまでは、トーハンへ仕入れに行けば、商品のある棚をめぐり歩くだけで持ち時間を使つてしまつたものだ。この日はカップラーメンを食べさせてもらい、東京から応援に来ていた本社役員や支店長と同じテーブルで話した。大阪の取次会社の社長も前後して見舞いにかけつけた。社長の大きなバッグからは、手品のように次から次へと見舞品が出てきた。支店長の机に、栄養ドリンク剤・菓子・下着などの山ができる。いずれも、泊まり込み生活を続いている支店長や職員たちに役立ちそうなものばかりだった。会社勤めと違つて家から出る機会の少ない私には、その男同士の友情がもの珍しく、心地よかつた。

支店長はヒントブックスの仕事のやり方を親しく聞いてくれた。「これからも、応援しますよ」の言葉がうれしかった。が、今まで積み上げてきた方法を今後も続けられるのか、不安は消えなかつた。

後日、電話で確かめたところによると、トーハンはA・B・C棟のうち、B棟の柱四本に亀裂が入り、依然として使用不能。社員・パート合わせた職員六〇人のうち、パートの

おばあさんが生き埋めになつて重傷、おつれあいが亡くなつてゐる。家を焼失した職員一人、全壊の職員五人。その状況の中で、本社や各支店からの応援を含めた「書店復活支援隊」が走りまわつた。被害を受けた書店の棚の整理に始まり、倒壊した店で鉄かぶとをかぶつての片付けまでこなしたという。震災後一ヶ月は、こうした支援に明け暮れた。激務の続いた支店長は「ずいぶん危険な作業もありましたが、一人の事故もなくして何より」と、受話器の向こうで安堵の息をついた。

二月二十二日、五八個の荷物が、トーハン東京本社から届けられた。地震直後から東京で送品待ちになつていた本が、ドッと来たのだ。大量の本の整理はパニックに近かつたが、それもやむを得まい。

無店舗販売のため、これまでトーハン神戸支店まで荷物を取りに行つていたが、支店の一部が被災したことと、交通事情の悪化によつて、この方法が不可能になつた。それで東京から直接届けられるルートになつた。以後、ほぼ毎日、荷物が届くようになつた。

ヒントブックス再開だ！　日常が、徐々に戻つてきている。

人々をつなぐもの



ここには古い家が立ち並んでいた(淡路島一宮町)

撮影:小松茂/洲本市

■私的なメモが……

どうして私が本を作ることになつたのか、机に山積みになつた原稿やメモを整理しながら、自分の思いをたどつてゐる。

まず、大学の頃の話から。

進学のときに、気象大学校を受験した。合格せず、甲南大学理学部物理学科に進んだ。教養課程で「地学」を受講し、地震の震源地を求める演習を受けたり、地震観測所を見学して地震計の大きいことにびっくりした覚えがある。

学生時代は、自然保護運動の渦中にいた。今でいう環境問題だ。運動団体の事務局に専従でかかわり、学業との両立ができず大学は中退した。ほぼ一〇年間、事務局に籍を置いていたが、当時は地質見学や断層が自然保護運動の主なテーマの一つとなっていた。だから活断層の存在は知つていたし、神戸に地震が起きたときもおかしくないことも、知つていた。

それだけに、あの朝ラジオから「震源地は淡路島。マグニチュード七・二」とのニュースが流れたときの戦慄感は大きかった。「七・二」は、そんじよそこらの数値ではない。大震災になる。マンション周囲の、一見平時と変わらない風景に目を疑つた。絶対何かが起きている。一体、どこで起きているのか——しばらく後に、三宮の大破壊や長田の大火災を知つたのだつた。

私は、家族四人が折り重なって揺れの中にいたときの、あの恐怖を、書き残そうと思った。これから見ること、聞くことも、できるだけ書いておこうと、本能的に思った。

それに、あの一瞬をさかに「仕事ができなくなつた」と判断していた。今までには、仕事をするか、本を読むか、家事をするか、その連続が私の日常生活だつたから、時間がいつぶんにあいてしまうことになる。さて、何をするか。「とりあえず書こう」と思ったのだ。

もともとは、自分のためのメモのつもりだった。

家がつぶれず、ケガもなく、懐中電灯もすぐに見つかり、ラジオも確保して初期情報が得られたために、可能になつたメモだ。メモは、うんと長いものになつた。

■やつぱり彼も！

仕事は予想どおり休業状態になつた。今までの“日常”がなくなり、歩いて時間をつぶすのが苦にならなくなつた。変わり果てた町を眺め、つい物思いにふけつてしまつ。

友人・知人を訪ね、話を聞いた。自分で何かが変わつたあるような気がした。

もつと話を聞こう。そして話を聞いては、余韻を胸に響かせ、また歩いた。家に戻ると記録をした。記録はたまつていつた。

洲本格さんの名前を神戸新聞で見つけた。以前からの知り合いで、断層などの調査活動を始めていたのを知った。多くの大学教授陣が権威ありそうな発言で紙面に躍り出ている中で、いかにも彼ららしい行動だ。ひたすら会いたくなり、連絡をとつた。

淡路の小松茂さんからは、震災後まもなく、FAXが届いた。「こちらは無事です。入用のものがあつたら届けます」という簡単なもの。ボランティアによる支援のネットワークを組織しながら、動きのとれない洲本市政に怒りをつのらせていた。

建築士のクマちゃんこと林英雄さんは、「一家四人、長田の炎の内より無事に脱出」とFAXで知らせてくれた。やがて連絡がついた。電話の向こうで「僕は自立建築というのを考えている」と言う。やっぱり彼も行動している！　すぐさま話を聞く日程をつめた。

それぞれの地域、それぞれの職業にあって、地道な活動を続けていた人たちとは、突然の震災に襲われても、自分のやることを見つけて動きだしていた。それが頼もしい。

私は勇気づけられ、話の聞き取りは、だんだんに“取材”の姿勢になつていった。

■語られた言葉

被災地で“取材”をするのは、一苦労だ。

相手に連絡がとりにくい。電話連絡ができなければ、とにかく足を運ぶしかない。そこ

にいなかつたら、帰つてくるのを期待して、待つ。事実、二時間待つこともあつた。

話を聞く場所にも恵まれない。ちょっとそこの喫茶店で、とはいかない。相手も私も、体調はすぐれない。冷えて寒いし、いきおいトイレも近くなる。

交通渋滞は激しく、移動の間に時間がやたらと経ってしまう。

被災地では、一つの用事を済ませるのに、まる一日かかることだつてある。

その中で、救援や復旧にかかる人たちは、これまた忙しい。避難所になつた小学校では、校長は連日寝られず、教員の数も足りない。当初は、教育委員会から何の指示もないため、教員仲間同士の連絡で、周辺の被害の少ない地域の教員が自主的に動いた。せめて夜勤だけでも代わろうと、手分けして応援に出向く人が多かつたという。この非常時にマニュアルはなく、公務員としての命令系統を気にする人がいる一方、そんなことは言つていられないと独自の行動をとる人も続出したそうだ。「どちらも責められない。みんな、がんばつていましたよ」と、ある先生は話していた。

震災前は、どの人にも、それぞれの暮らしがあつた。一瞬の恐怖体験の後、暮らしは壊れた。私が取材した人たちは、さまざまなもの記憶をひもとくうち、その後に自分の身に降りかかったこと、明日からの生活への不安や展望を話しだした。ある人は地域への提案を語り、ある人は行動のプランを語った。

私の取材した文章が、そうした展望やプランを伝えるものになればいいのだが。被災地の人々をつなぐものになればいいのだが——そう思い始めた。

■ライフベースはあるのか？

二月三日、早川和男さんを灘区の自宅に訪ねた。十数日前、ラジオから流れてきた彼の提言に、強く関心をひかれたからだ。

「地震からこっち、ヒゲを剃る間もなくてね」と、白いヒゲをもじやもじやとさせ、マンションの一室に案内してくれた。現在は神戸大学教授だが、一九八二年に設立された日本住宅会議の事務局長を昨年十一月まで務めていた。同会議は、八七年に「住宅憲章」なる宣言を発表している。その前文を紹介したい。

わたくしたちは、日本国憲法の精神にしたがい、人間にふさわしい住居の確保が、健康で文化的な生活を営むために必要な、国民の基本的権利であるという理念を確立し、その実現をはかるために、この憲章を定める。

住居は、生活の器として、生命の安全と健康を守り、人間の尊厳をたもち、安らぎと秩序を保障し、人間発達と福祉と幸福の基礎をつくり、文化としての居住環境を発展させ、市民社会の基礎となる。

貧しい住居の状態は、家族の調和を阻害し、教育に悪影響を与え、社会全体の健康および道徳にたいして、重大な脅威となる。人間にふさわしい住居の実現は、豊かな生活と健全な市民社会および国際社会の平和と発展に、不可欠である。

国民は、国政の主権者として、自ら人間らしく住む権利の実現に努め、住宅政策や町づくりに参加する。国および地方自治体は、良好な住居と生活環境の整備に不断の努力を傾けるとともに、その政策の立案・施行に当たって、国民参加の道を開いておかなければならぬ。

日本住宅会議編「住宅憲章」岩波書店（一九八八年）

早川さんは、「住むところさえあれば食べることはできる」と機会あるごとに主張している。そして、「住宅と仕事があれば、人間は生きていけるんですよ。あとは、自分でしようとするものです」と語る。

電気・ガス・水道・電話などをまとめて「ライフライン」と呼ぶ。どの一つも、現代に生きる我々にとって、欠かすことはできない。ならば同様に、住宅と仕事（学業）は「ライフベース」と言えないだろうか。まさに、生活の基礎なのだから。

震災で、ライフラインの脆弱ぶりがあらわになつたが、ライフベースへの視点がなかつ

たことのツケはさらに大きかった。多くの家が失われ、多くの尊い命が奪われた。

学校は、長期にわたって避難所として使用されたまま、授業が再開できないでいる。その実態は、まさに、住む場所と学業を保障できない政治の貧困を如実に表わしていると思うが、どうだろうか。

戦後、見せかけの便利さを求めて、ライフラインは整備された。しかし、ライフベースは果たして存在しているのだろうか。私たちの今住んでいる住宅は、ライフベースという名に値するものだろうか。

もうひとつの一言である「仕事」は、どうだろうか。

二月十四日、バレンタインデーに縁起をかついで、梁佳恵さんは、八百屋「宝島」を再びスタートさせた。長田区から中央区を経て東灘区まで、移動販売車はまわった。のち、彼女は言った。「地震のときもこわかったけど、今のほうがこわい。お客様が避難所に行ってしまって、いなくなってしまった。最低のロットを仕入れても、大量に売れ残る」と。二月二十八日を最後に、しばらく休業すると伝えてきた。

同じ被災者が助けあってこそ町が作られていくのに、それが難しい。私は、くやしくてならない。

マスコミでは、事件やドラマがなければ被災者が個人として報道されることはない。そ

の報道されなかつたところにも、被災者はたくさんいる。神戸・阪神間・淡路の被災地域に住む人は、優に二〇〇万人を超えるのだから。被災者の思いと現状を、個人の生の声を通して伝えることができればと思つた。

被災者の現状と言えば、避難所の環境も大きな問題だろう。震災から五〇日間、証言を集めてまわる中で、そう感じた。ただ、このテーマは私の手には負えなかつた。ひとくちに「避難所」と言つても、『公認』と『そうでないもの』があるらしく、カウントされているのは公認された避難所数にすぎない。その公認でさえ、格差は大きいらしい。そうしたことを見たときに、私はむしろ、救援活動にかかわつた人たちからのレポートを期待したい。現場からの生のレポートは、役所や識者の視点・マスコミの報道とは違つた、今後への貴重な情報になると思う。

■町を作ろう

被災地の中でも特に被害の大きかつた一部の地域では、震災二ヵ月後にあたる三月十七日に、都市計画決定がなされようとしている。新聞紙面には、そうした復興計画の記事が多くなつてきている。しかし、多くの被災者は、仮設住宅もまだ当たらず、仕事のメドも立つていねい。どこに住むのか、どうやって食べていくのか、これからどれだけお金が必要

要なのか、何もわからないときに、復興計画を見せられても判断ができない。「待つてくれ」としか言いようがない。広い防災公園、新しい道路、それが自分にとつてよいものなのか。自分たちの住む町にとつてよいものなのか。

計画決定までの期限は、法律で「二ヶ月以内」と決められているそうだが、いま決定をせまるのは、民意を汲んだという形だけを整えようとしているにすぎない。自治体当局は法による免罪をもくろんでいるかのようだ。法は誰のためにあるのか。

生活に困っている状態で、行政の試案にノーと言うのは難しい。首を横に振れば家も建たない。都市計画が固まるまで、自分の土地といえども勝手に使用はできないのだ。

二月十九日、クマちゃんからFAXが入った。「林メモ・第二号」だ。「自立建築」について彼が私に語ってくれたことが、より明確に示されている。

歩いて上がる階数の集合住宅。各戸は三世代以上が住める造りで、世代から世代へと受け継ぐことができる。建物内でプライバシーを保つつゝ向こう三軒両隣の互助関係をつくる。危機的状況でも、水・電力・食糧は三日間もちこたえるだけの備えがある。これが「自立した建築」だ。「自立した町内」は、子ども広場や路地裏、非常時の食糧・かまどを備え、建物には発揮できない機能を補う。そして各町内が結びついた「自立した町並み」は、グランドや林間散策路、診療所などを準備して町内機能を補う。

つまり、上から与えられる住環境ではなく、生活を単位として外へ広がっていく発想だと思う。生活のための設備が、災害時にはそのまま防災設備になる。

「市の計画にウンと言わされるのではなく、自分たちの計画を市が応援するようにもつていいけないか」とクマちゃんは話す。

クマちゃんの提案を「知つてほしい」願いに、私はいつそうせき立てられた。彼のほかにも、被災地で行動を起こしている人たちや、それに共鳴する人たちが、必ずいるに違いない。人間にふさわしい暮らしあは、被災者誰もがもつ願いなのだから。

東灘区の森南地区の住民が、署名運動を始めたと報道されている。彼らは、独自の再建計画を立てつつある。クマちゃんも、何度も市に足を運んでいるようだ。

三月十七日に期限を迫られている地域以外の、須磨区板宿地区をはじめ被災地の大部分は、まだ復興や再建の計画すらない。あせつても、どうにもならない。明日の町に向けて、みんなで語りあい、自分たちで計画を立てよう。みんなが町づくりに参加することが大切だと思う。

■震災五〇日目に——あとがきにかえて

夜明けは、午前七時すぎ。まだ明けない町を一番電車が走り抜けていく。終夜営業の明かりに疲れが見える頃。

午前五時四十六分、一瞬、光を見た。と同時に、大地が裂けた。地上の裂け目は土煙をあげて振動している。町の明かりは消え、大音響が地表を覆う。人々の悲鳴は、大音響にかき消され、くだけ散る木片・土壁・コンクリートの塊りに埋めつくされた。アスファルトは、布きれのように波打ち、うねつた。高エネルギーの電磁波は、獣たちを恐怖に陥れた。地球は直径一万二七〇〇kmの巨大な塊りだ。人類は、その地表を取り巻く空気の層で生存しているにすぎない。ひとたび、地表がやぶれれば、人は“こけし”的に倒れ、建物や道路は紙か糸のように、いともあえなくちぎれ、切れる。

ひとしきり均衡を保つ運動を終え、何事もなかつたかのように、地表は静けさを取り戻した。悪夢は、正夢と化した。



玄関ドアを開け閉めすれば、ドンと音が響く。マンションの気密性が高いため、ドアを閉める振動が空気をふるわせ、建具が鳴る。そのたびに、ビクッとしてしまう。たまにふ

と、あの激しかった揺れが呼び覚まされる。いくら元気を回復させていても、こうした脅えはつきまとつて離れない。自然の力にかなうはずもなく、その猛威には畏れおののくのが人間であることを認めようと思う。

地震発生直後、とりわけ当初の一、二週間、神戸の市民の心は熱く燃えていたように思う。私も、その雰囲気の中にいた。今日、三月七日で、ちょうど被災後五〇日目になる。町じゅうに、取り壊しのホコリが舞い、ダンプが行き交う。人々は、瓦礫の撤去に忙しい。バスが走り、歩く人はめっきり減つた。町は、静から動へ様相を変えつつある。

町は破壊された。そして、一見元気そうに見える市民たちも、ほんとうは満身傷ついでいるのかもしれない。だからこそ、理解しあい助けあつていかなければならない。

○

神戸の町は、三月も終わり頃になると、雨がよく降る。暖かい春がもうそこまで来た知らせだが、雨はまだ冷たい。六甲山は、無残にもその麓の町を破壊してしまつた。だが、春の知らせとともに、ツツジが咲き乱れる。そのツツジが咲くまで希望をつなぎたい。ツツジが終わつても、ニセアカシアの花が山を白くする。レンゲの美しい花畠が田園をうめつくすだろう。自然是きびしいが、やさしい姿だつて見せてくれるのだ。

(一九九五年三月七日

著者)

私がこの本の版元（アスク・ヒューマン・ケア）と出会ったとき、同社はすでに被災地向けに行動を起こしていました。心のケアに関するマニュアル翻訳、アメリカの援助者を招いての無料ワークショップ開催などです。多忙の中で、本書の緊急性を理解していただき、三月十三日には、印刷所に入稿することができました。最大限努力しての日程でした。何度も夜明けまで編集作業をしてくださった武田裕子さん、一日でも早い刊行に全力投球してくださった今成知美さんに、心からお礼を申し上げます。

証言をしてくださったみなさんをはじめ、々のお名前を掲げませんが、たくさんの方々のご協力をいただきました。ありがとうございました。

（著者）

著 者 山田利行（やまだ・としゆき）

1950年生まれ。5歳より29年間神戸市に住む。

現在は明石市で、無店舗による書店「ヒントブックス」経営。

自宅およびオフィス

〒673 兵庫県明石市西新町2-1-6-405



左から、輝子、著者、茅、麻、友

●本書は全国の書店で扱っています。

（「地方小出版流通センター扱い」と言って書店にご注文ください）

●「ヒントブックス」でも直売します。受注専用 FAX 078-922-1188

阪神・淡路大震災

明日の町へ

家族の体験／行動する人々 50日の記録

1995年4月10日 初版第1刷発行

著者 山田 利行

発行所 (株)アスク・ヒューマン・ケア

〒103 東京都中央区日本橋浜町3-19-3 ソグノ21ビル
TEL 03-3249-2551

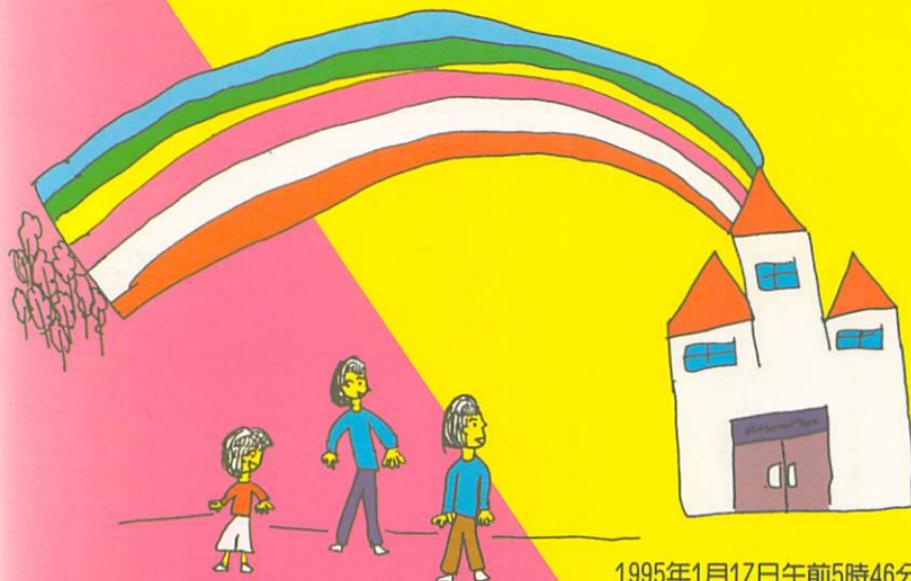
印刷所 明和印刷株式会社

©山田利行 1995 Printed in Japan

定価はカバーに表示しております

落丁・乱丁本はお取り替えします

定価1500円(本体1456円) 発行▶株アスク・ヒューマン・ケア



1995年1月17日午前5時46分
『兵庫県南部地震』起きる。